

# 魔導装甲アレン

第三部 逆襲の紅き煌帝

秋月あきら

第一章 不気味な足音

《1》

あなたは最後の希望。

これをあなたが見ているとき、わたしの精神はすでに此の世にないでしょう。

あの恐ろしい計画を止められるのはあなただけです。

楽園に行きなさい。

あの場所にすべてを隠しておきました。

あなたにすべてを背負わせてしまって、本当にごめんなさい。

その世界は優しい光に包まれていた。

太陽光ではない、空を思わせる広大な天井が輝いているのだ。

人工の空。大地は黒土だった。

栄養の行き渡った土壌には豊富な植物が息づいている。

色とりどりの花々が香り、生い茂る木々立ちが風に揺られている。そこには蜂や蝶も虫たちもいた。そして、手入れの行き届いた芝生が広がっている。

人工的に作られた自然公園だ。

公園の先には天井に届きそうな高い影が見える。

鉄筋コンクリートのビルだった。

街が広がっている。

高層ビル群の間を縫うように張り巡らされた空に架かった透  
明な筒状のトンネル。その中をタイヤのない車が空を飛びなが  
ら行き交っている。

ステーションから発車したのは、磁気浮上式鉄道だ。

失われた時代。

世界に住む者たちは、それをロストテクノロジーと呼んだ。

広大な自然公園の中には湖と大河があった。

増水があったのだろうか、乾いた大地に船が乗り上げ、木片  
などの細かいゴミも散らばっていた。

その中に人影があった。

まだ子供だろうか？

それは少年だろうか？

それとも……？

微かに微かに歯車の音がするような気がする。

空を飛んでいたスクーター型エアバイクが、旋回して川岸に  
下りてきた。

エアバイクを止め、地面に降り立った人影は、ゆっくりと、  
まるで怯えるような足取りで、少しずつ近づいてくる。

気を失っていたアレンの瞼が痙攣した。

眩しすぎる光。

目を開けたのはどれくらいぶりだろうか？

どれほど意識を失っていたのだろうか？

躰が動かない まったく。

いつまで経っても視界が完全に開かない。

アレンは声を絞り出す。

「腹……減った」

ピクニツク日和だ。芝生の上でお弁当を食べたら、さぞかし美味しいだろう。

なのに酷く寒く、躰が動かないのだ。

アレンの視界の先でぼやけている人影は、驚いたように後退した。

「……ピーピー……ガガ……」

そして、人間とは思えない電子音を発したのだ。

「ガガ……アナタハ……ガガ……あなたはニンゲン……ガガガ……あなたは人間ですか？」

抑揚には乏しかったが、それは紛れもなく人間の声だった。

アレンは静かに瞳を閉じた。

「もうちょっと……寝かせろ……起きたら……飯食う……」

それは眠りについたと言うより、意識がブツツリと切れた感じだった。

急に辺りが騒がしくなる。

パトランプをけたたましく点灯させたエアカーが、ぞくぞくと集まってきていたのだ。

木々に止まっていた鳥たちが一斉に飛び立った。

それは事件だった。

アレンの出現はこの都市にとって、何千年ぶりの大事件だったのだ。

失われた歴史の続きが、紡がれようとしていた。

ベッドの上で目を覚ました。

粗末なベッドだった。

土壁の狭い部屋で、泥臭く、獣の臭いもする。

「……ううつ」

頭を押さえながら少年はベッドから這い下りようとしたが、全身が酷く痛んで上体を起こすことすらできなかった。

「くつ……」

自分の躰を観察する。

着せられているのは麻の粗末な服だ。右上で包帯が巻かれ固定されている。左脚も同じように固定されている。どちらにも添え木が入っている。

服をめくり上げると、肋骨のあたりが蒼く変色していた。

「……ここも折れているのか」

ほかにも打撲や擦り傷、無数の傷が体中にあつた。

ドアの先から気配がした。

少年は身構えるが、それ以上の行動は取れなかった。

部屋に入ってきたのは十五、六の娘。

「きゃっ」

いきなり少年を見て小さく悲鳴をあげた。

そして、すぐに頭を下げた。

「ごめんなさい、起きていると思っていなくて。体調は大丈夫ですか？」

「見ればわかるだろう」

少年はぞんざいに言った。なまいきな感じがする。

しかし、娘のことが嫌いなわけではないらしい。

「君の名前はなんと言う？」

「ラーレと言います。あなたは？」

「朕は……朕は……」

「チンさん？ 珍しい名前ですね」

「いや……そうではない……名前が……思い出せないのだ」

少年の顔から一気に血の気が失せた。

記憶喪失。

ラーレは戸惑ったようで、相手の言葉を理解するのに時間を要した。

「名前が思い出せないって……もしかして、ほかの記憶も？」

「ほかの記憶？」

「どこに住んでいたかとか、家族は？」

「……駄目だ。なにも思い出せない」

力なく少年は首を横に振った。

ラーレはタンスの中から服を取り出した。

「あなたが着ていたものです。とても高価そうなので、身分のある方では？」

少年はその服を片手で受け取った。

ところどころ痛んだり破けているが、肌触りの良い上等な布だ。金糸の刺繍が施され、煌びやかな色彩の服。この世界で数少ない貴族階級が着るような服だった。

「朕はなぜこんな怪我をしている？」

「ここ数日、川がずっと氾濫していて、漁もできず荷の運搬もできず困っていたんですが、きのうになってやっと水かさが減り、父が村に売りに行く荷を運ぼうと船を出そうとしたところ、川岸であなたを見つけたそうです。全身傷だらけで、家族の間では川の氾濫に巻き込まれたのだろうって……」

開かれたままだったドアの向こうから、子供の声が聞こえてくる。

「お姉ちゃん！ 大変だよ、早く着て！」

すぐに幼い少年が部屋に飛び込んできて、ピクツとして瞳を丸くして姉の後ろに隠れた。

それが自分に向けられたものと知って少年は、いかにも嫌そうに鼻で笑った。

「これだから子供は嫌いなんだ」

「な、なんだよ、おまえだって子供じゃないか！ ぼくよりは年上みたいだけど」

前半の威勢はよかったが、後半は尻すぼみして姉の後ろに隠れた。

ラーレは弟の頭を撫でながら、

「弟のカイです。まだ幼いので村にもあまり連れて行ってもらえないので、他人が珍しいんです、勘弁してあげてください」

急にカイが慌てた。

「そうだ、お姉ちゃん父さんが大変なんだ！」

「お父さんが？」

「死んじやいそうなんだよ！」

「えっ、そんなまさか!？」

大柄な男が部屋に入ってきた。

「おいおい、まだ俺は死なないぞ。ちよつと銃弾が当たっただけだ。あと顔面も殴られた」

がたいも良く長身の男だが、顔は人なつつこい笑みを浮かべている。が、その片方の元は腫れて青あざになつていて。さらに裸の上半身の腹には包帯が何重にも巻かれていた。少し包帯に血が滲んでるのが伺える。

「だいじょうぶお父さん!？」

ラーレは慌てて心配そうな顔で、父の腕にすがりついた。

「だからちよつとした怪我だ。大したことない、軍人だったころに比べればかすり傷だ。それより、坊主目え覚ましたみたいだな、どうだ調子は?」

顔を向けられた少年は無言だった。不愉快そうな顔だ。

代わりにラーレが説明する。

「名前も思い出せない記憶喪失みたいなの」

急に父親は少年に顔を近づけてきた。

「おまえさんの顔、どつかで見たことあるんだよなあ? 村の坊主……にしては、高価な服着てやがったな。俺がお偉いさんの息子を見る機会があるとしたら、軍人だったころだが……」  
「どんだん近づいてくるオヤジを嫌そうに少年は顔を背けた。  
急にカイがはしゃぐ。」

「父さんは帝国の軍人だったんだ。すっごい強かったんだ



ぞ！」

「出世はしなかったがな、する気もなかったんで引退して、今は人里を離れて農場を経営してるんだ」

少し自慢そうに父親は鼻を高くした。農場経営が順調なのだろう。

なにかが引つかかったのか、少年は難しい顔をして小さく呟く。

「……帝國」

父親の耳にも届いたようだ。

「帝國っていつたら、シユラ帝國に決まってるだろう。嫌われたり畏怖されたりしてたが、帝國のお陰でなんだかんと言ってる国は豊かだったんだ。それが今じゃ……治安は悪くなる一方で、世界中で暴動やら戦争が起きてやがる。この怪我もそのせいで負わされたんだ、村にどっかの武装団が攻めてきてよ」

世間では革命家トツシユの英雄譚と語られている。

だれがあシユラ帝國が滅亡することを予想しただろうか？  
あまりにも突然で、世界中のだれもが信じがたい出来事であった。

鋼の要塞アスラ城が水に沈み、城にいた者で生存を確認された者は、今のところひとりもない。

独裁国家であるシユラ帝國にとって煌帝は絶対的な存在であった。さらに実質的な国内ナンバー2だった“ライオンヘア”を失ったのも大きい。

すぐにシユラ帝國は分裂し、国として維持ができなくなって

しまった。そして、世界最強の軍事国家がなくなったことで、諸国のパワーバランスが崩れ、各地で戦乱が起きはじめたのだ。恐怖政治を敷き、他国から畏怖されていた帝國がなくなったことで、逆に世界が乱れるとは皮肉な話だ。

部屋にクリーミーな匂いが漂ってきた。

父親はクンクンと鼻を動かした。

「そっぴや、今日はシチューだとさ。うちのカミさんのシチューはうまいぞ、乳もウチで搾ったもんだ。たんまり食って早く怪我なんて治しまいな！」

「それはこっちのセリフだ」

少年は鼻でクスリと笑った。悪意のない、純粹な笑みだった。

記憶喪失の少年が目を覚まして、数週間の日数が経った。

今でも記憶は戻らない。

名前がないのでは不便だと言うことで、アレクサンダーと名付けられ、愛称はアレックスにされた。アレックスがなぜだと尋ねると、父親は昔飼ってた犬の名前だと答えた。それを聞いたアレックスは不満そうにしたが、その犬がとても優秀で家族から大層可愛がられていたことをラーレに聞かされると、とくに文句を口にすることもなくなった。

アレックスは家族として、この家に迎え入れられたのだ。

父親のアントン、母親のシモーネ、姉のラーレ、弟のカイ。

アレックスの年齢はわからなかったが、とりあえずラーレの弟、カイの兄として扱われることになった。

農場では多くの山羊を飼っていた。この毛色の黒い山羊たちから、毛を刈り取り、さまざまな材料とし、その乳は食用として飲むだけでなく、チーズやバターなどの加工品になる。

晴天のもとで山羊の乳を搾っていたラーレのもとに、アレックスが松葉杖を突きながらやって来た。

「なにか手伝うことはないか？」

「無理しないで休んでいてください」

「世話になってる分は、なにかするよ」

アレックスの言葉遣いは、時が経つにつれて当初よりも、くだけてきていた。

怪我が治りはじめ、身体が動かせるようになってから、アレックスは積極的に身体を動かした。その中で農場の手伝いもするようになっていた。

風が吹いた。

「いい匂いですね」

ラーレの言葉にアレックスは、不思議そうな顔をする。

「なにがだい？」

「草の匂いです。見てください、川岸に草が生えはじめたんです。この辺りは乾燥地帯で、草木はあまり生えていなかったのに」

「なぜ生えるようになったんです？」

「理由はわかりませんが。川の増水が治まって、水が引いた場所に草が生えはじめたんです。びっくりするくらい急激に成長して。村で話を聞いたんですけど、各地でそういうことが起きて

るみたいで、場所によつては森が現れたとか……びっくりするけど、草木で大地が溢れるのはなんだかうれしいです」

これまで世界は砂漠に被われていた。

砂漠といつても、砂だけの世界や岩や連なる崖など、その深刻さは地域によつてさまざまだった。

シュラ帝國のアスラ城があつた場所は、まさに灼熱の地獄であり、城以外は砂だけの世界だった。しかし、現在ではその周辺は巨大な湖となり、そこから各地に流れる河の周辺には草木が生い茂っている。人々はそれを奇跡と呼んだ。

生きるのに必要な大切な水資源。だれもが手放しで喜んだ。些細な異変などだれもが目をつぶった。

ミルクを湛えたバケツをラーレが持ち上げたのをアレックスが見た。

「持つていくよ」

「いいです、片手じゃ大変ですから」

右腕はギブスで固定されている。左脚は松葉杖を必要とし、液体の入った重たいバケツを持つには不安が過ぎる。

「持つと言っているんだから、朕が持つ」

少し強い口調で言われた。

「わかりました……しつかり持つてくださいな、気をつけて」  
ラーレはバケツを持った手を差し出した。そして、バケツを受け取るうとしたアレックスの手を触れあつた。

ほのかに頬を赤くしたラーレ。それを見て、つられるようにアレックスも頬を赤くした。

「行くぞ」

無愛想に行つてアレックスが、バケツを持って歩き出そうしたとき、大きくバランスを崩してしまった。バケツの中で飛び跳ねたミルクが地面に溢れる。

やはり怪我をしたアレックスでは 違った。

「きゃっ！」

叫び声をあげたラーレが倒れて地面に手を突く。

大地が呻いた。

轟々と激震が一撃大地に奔つたのだ。

山羊の群れが逃げていく。

鋭い眼をしたアレックスの視線の先には、大地を穿つた大穴から硝煙が立ち上がっている。それは天災などではなく、明らかな人工的な攻撃だ。

微かに足から伝わってくる振動。

地平線の向こうから隊を成してやってくる。軍隊だ、武装した軍隊が進撃してきたのだ。

叫ぶアレックス。

「家族に知らせろ、早く行け！」

「でも置いては……」

「だからこそ怪我のしてない君が行け、明らかな敵意を持っていると家族に早く伝えるんだ！」

ラーレは唇を噛みしめ、後ろ髪を引かれながら家に向かって駆け出した。

軍隊の前衛は巨大な飛べない鳥 クエツク鳥に跨った騎鳥

部隊だ。兵士だけでなく、クエツク鳥も軽鎧けいがいを装備している。兵士の装備は銃剣だ。

その後ろからは戦車部隊。砲台をこちらに向けている。

ひとり残されたアレックスはなぜか笑っていた。

「なぜだか……血が騒ぐ。この躰がなにかを覚えているとでもいうのか……？」

少年とは思えない悪魔の笑み。

波乱を予感させた。

《 2 》

クーロンは今、軍隊に包囲されてから三日、小康状態に入ってから二四時間以上経っていた。

もともとシユラ帝國の領土内にあったクーロンは、自治は独立したものとして、自由の名の下に繁栄と陰を築き上げてきた。生活水準や科学水準もほかの都市に比べ飛躍して高く、スラム街ですら近隣の村よりもよい生活をしていた。

シユラ帝國が自然解体された今、クーロンを我が手中に収めようとする者が出るのは必然。今まではシユラ帝國の報復を畏れていた新興国が、クーロンに攻め入ってきたのだ。

武装には武装。

新興国軍との緊迫状態が続いているのは、クーロンが軍事都市の顔を持つているからだ。

都市を高い壁で囲むのは、古代から行われてきた防御策であ

る。クーロンの市壁は強固な合金でつくられており、壁、見張り塔、市門から成り立っている。高さは三階建ての建物を優に越し、厚さも大人が手を広げたほどだ。

見張り塔からには砲台も備え付けられている。火薬などではなく魔導砲である。一発で都市供給の電力を食いつぶし、辺りを焼き尽くすほどである。それが五機、都市の周りに備え付けられている。新興国軍がなかなか攻め入ってこないのこのためだ。

しかし、すでに一機破壊されている。

それによって敵は甚大な被害を被り、三千を越える多くの死傷者を出したが、クーロン側も大きな痛手となった。守りが薄くなった箇所をどう守るか。敵はまだ二万以上の師団を組んでいる。

現在、クーロンの電力は完全にダウン。防衛に必要な最低限の電力は確保されているが、市民たちのライフラインは完全に停止させられている。

ときは夕刻。日が暮ればクーロンは劣勢に追いやられる。シスター・セレンは聖堂にて祈りを捧げていた。

普段は寂れた教会であるが、今日ばかりはひとが多かった。市内放送のラジオで状況を確認しながら、人々は疲弊して怯えている。

シスター・セレンはそれらの人々を励ましながら、夜に向けて蝋燭の準備などを着々と進めてた。

いつまでこの状況が続くのか？

外壁都市は戦いが長く続けば続くほど、物資が枯渇していく。魔導炉によって、都市で自家発電はできるが、物資はそうもいかない。

教会に集まって来た者はスラム街に住む者たちが多い。彼らは食料の蓄えもない者たちだ。シスター・セレンは教会ので蓄えていた食料を少しずつ分け与えているが、とてもじゃないがそれでは足りない。先ほどもひとり食料を奪って独占しようとして、最終的には袋たたきになって、教会の外に身ぐるみ剥がされ放り出されたばかりだ。

敵は外だけではなく、ひとの心の中にもいる。緊迫状態が続けば、ひとの心は乱れ、中には暴動を起こす者も出てくる。敵がいれば一致団結できるなんてことはない。危機的状況だからこそ、ひとは自分のために他を犠牲にすることもあるのだ。

物資が枯渇し、都市内部で暴動が起きはじめ、今や電力供給のストンプし、市壁の一部も守りが弱くなっている。そして、外には二万を越える軍隊。

セレンは礼拝堂の外に出た。  
ひと気はない。

都市は静まり返っているが、異様な空気感と緊張感が漂っている。

そんな中にありながら、庭の花々は美しく咲き誇り、セレンの心を癒やしてくれた。

「シユラ帝國がなくなつて平和になるなんて嘘だった……。はじめのうちはよかった。この教会を支えてくれるひとたちが増



えて、とくにトツシユさんにはたくさんお金を寄付してもらっているし、物資だつて定期的に届けてもらつてる」

花々は気高く咲いている。

「この庭が泥に埋まってしまったあと、だれかがこんなにもすばらしい庭園をつくってくれて、なんだか世界もこれからよい方向に変わっていくと……信じていたのに」

世界の情勢は悪くなるばかり。

「どうして人間同士が争わなくてはいけないの」

戦争の原因はさまざまであるが、今回は宗教や思想の対立によるものではない。シユラ帝國亡きあとの覇権と資源を巡つての戦いだ。

進行国軍がクーロンに攻め入ってきたのは、その都市資源を奪うためだ。のどから手が出るほど敵が欲しているのは、ロスstekノロジーだろう。クーロンはロスstekノロジーによって、下支えされているが中でも飛び抜けているのが、魔導炉の存在である。

この場所にロスstekノロジーの魔導炉があつたからこそ。砂漠のど真ん中に存在するこの都市はここまで繁栄することができた。

魔導炉の原理は現在の科学では解き明かせないが、おそらく半永久機関であると考えられている。絶え間なく供給されるエネルギー。このエネルギー資源を敵が放つておくわけがない。

敵は都市ごと欲しいと思つている。そのために破壊は最低限に留めていると思われる。そうでなければ、もっと戦いは激化し

て、空からの攻撃で都市が爆撃されて火の海に沈んでいただろう。

目尻の涙を拭いたセレンは教会に戻ろうとした。

「食料も底をついてしまいそう。貯金を切り崩していても、少量価格が信じられないほど高騰しているし……」

肩を落として歩いていると、微かな気配を感じてセレンは振り返った。

突然、目の前に現れた影。

下着姿の男だ。変質者ではない。身ぐるみを剥がされた“男”だ。

「さつきはよくも！」

“男”は怒鳴りながらセレンを押し倒した。

「きゃっ！」

完全な逆恨みだ。

セレンは平等に食料を分け与えていたし、この“男”が袋叩きにされているのですら止めに入ったのだ。

怯えるセレンの頬が殴られた。

血走った“男”の眼は狂気に駆られている。相手が女子供だろうが、聖人だろうが関係ない。この“男”はもう自ら止まることはなく墮ちるところまで墮ちていくのだ。

“男”はセレンを羽交い締めにしなが、礼拝堂の中に入っていた。

暗い面持ちをしていた人々が顔上げ、驚きと共に瞳を“男”とセレンに向ける。

視線を注がれセレンは気丈に微笑んだ。

「だいじょうぶですから、なにも心配ありません」

だが、“男”によって髪の毛を引つ張られた。

「うっ！」

「この偽善者がっ、うるせー黙ってろ！」

この“男”を袋だたきにした奴らは、腰を浮かせて今にも飛び出しそうだ。けれど、それを抑えているのはセレンの存在だ。

“男”は要求をする。

「食料を全部出せ、あと服もだ。おい、そのあんた、服を脱いで俺に渡せ！」

命令されて顔を伏せて椅子に座っていた若者が立ち上がった。青年だった。

「シスターには手は出さないください。僕の服であればいくらでも差し上げますから」

少し怯えた声で、青年は上着を一気に脱ぎはじめた。

へそが見え、頭から服を抜こうと顔が隠れたとき、“男”は度肝を抜いた。ほかの者たちもそうだ。

青年だと思っていた者の躰に丰满な胸があつたのだ。

いや、服の上からはそんなものなどなかった。だからみな驚いたのだ。

服を脱ぎ捨てた青年。そこにあつたのは青年の顔ではなく、金髪の女の艶笑であつた。

「この躰はタダじゃないわよ」

女が言った刹那、“男”は後頭部から脳漿を噴き出して倒れ

ていた。

遅れてセレンが叫ぶ。

「きゃあああつ！」

目の前でひとが死んだ。

“ライオンヘア”は銃を構えて微笑んでいた。

男を殺し、セレンを救ったのはライザだったのだ。どういう技術を使ったのかわからないが、ライザは青年の躰に変装していたらしい。よくリリスも同じことをしていた。

ライザは何事もなかったように、床に落ちていた服を再び着る。

場は完全に凍り付いていた。

ライザは辺りを見回した。

「だれか屍体を片づけておいてちょうだい。アタクシはシスターとおしゃべりがあるから、それでは失礼するわ」

呆然と立ち尽くすセレンの腕を強引に引っ張ってライザが歩き出す。

教会の奥へと進み、適当なドアを開けて、部屋の中に入った。セレンはパニック状態でなにがなんだかわからなかった。

一方、落ち着き払っているライザは、ベッドに腰掛けて座って足組をした。

「久しぶりね、元気にしていたかしら？」

「え……あつ……助けてくれてありがとございました」

お礼を言う顔は暗い。自分を救ってくれたとはいえ、目の前でひとが死んだ。自分のせいで死んだとセレンは心を痛めてい

た。

「暗い顔しちゃって、アタクシがシスターになにかすると思っ  
て？」

「いえ……そういうわけでは……」

「過去にいろいろあったことは認めるわ。今回は取り引きなし  
に、アナタに協力して欲しいことがあるの」

「なんででしょうか？」

「単刀直入に言うわ。一匹狼さんと連絡を取りたいの」

「トツシユさんのことですか？」

「ええ」

これまでライザとトツシユの間には因縁がある。反乱分子だ  
ったトツシユは、帝國のライザに何度も命を狙われていた。そ  
れは本気だったかどうかはさておき。

セレンは口を結んだ。

それを見取ってライザは微笑む。

「教えたくないってわけね。しかし、トツシユに危害を加える  
つもりはないわ。と言っても信じてもらえるかはわからないけ  
れど」

セレンは口を開かない。

自虐気味にライザは鼻で笑った。

「ぜんぜん信用されていないのね。べつにいいけれど嘘つきな  
のは認めるわ。最近も大きな嘘をついたもの。ねえ、帝國が水  
に沈んだあと、アタクシがどうなったか噂を耳にしたかし  
ら？」

「死んだもの噂されていました。だから大臣も今では好き勝手に軍を率いて侵略行為を……。私はライザさんが生きているよ。うな……。ほかのひとたちもそうだと思っていましたが」

「そう、生存者はひとりも確認されていないものね。だから、アタクシもそれに便乗して死んだことにして身を隠していたのよ。なのに、どうやら最近生きていることがバレてしまったらしく、いろんな敵に追われ命を狙われて、人生でもっとも最悪だわ」

溜め息を落としてライザは前髪をかき上げると、さらに話を続けた。

「どうして身を隠していたかわかる？」

「どうしてですか？」

「帝國が滅亡すれば、煌帝がいなくなれば、世間が荒れるのは目に見えていたわ。当然、アタクシを邪魔だと思っ輩が狙ってくることは容易に想像できたわ。でもね、そんな奴らは小者よ、小者。あつという間にアスラ城が水の底に沈んだとはいえ、生存者が確認できないっておかしいと思わない？」

陰謀を予感させる言葉だった。

ライザは妖しげな笑みを浮かべつつ、その眼は鋭くなった。

「最終的には水責めで溺れ死んだ者が大半だけれど、その前に多くの兵士たちが何者かに殺され、退路という退路も断たれ破壊されていたのよ。逃げ場を失い右往左往している間に水の底」

「ライザさんはどうやって生き延びたんですか？」

「手の内はあまり明かさなない主義なの。言えるのは自分一人で精一杯だったということ」

苦虫を噛み潰したような顔をライザはした。すべて捨てて逃げたのだ。

多くを失ったライザは新天地を求めた。

「最近、トツシユは英雄として貧困層から絶大な支持があるみたいね。彼を支えようと革命軍も戦力を伸ばしているみたいだけれど、まだまだ弱い。けれど支持する人数は多い。アタクシはべつに世界平和を願ったり、自分がトップに立って世界を支配する気なんてないわ。ナンバー2くらいが自由に動いて良いもの。だからアタクシは今後誰に付こうかと考えて、トツシユに決めたのよ。アタクシの身の安全を確保してもらおう代わりに、アタクシの頭脳を革命軍に提供するわ。素敵な取り引きだと思わない？」

「本当にトツシユさんがどこにいるか知りません。連絡はたまにありますけど、各地を転々として逃げ回ってるみたいで」

「各地を転々としているらしいのは知っているわ。でも逃げ回るといふのはなぜ？」

「英雄なんて祭り上げられるのは嫌なんだそうです。革命軍のリーダーになってくれとも言われているみたいですが、一匹狼が自分の性分に合っているって」

「まだリーダーではなかったのね。声明で彼の功績が伝えられているけれど、実際は各地で彼の名前が勝手に使われているだけなのね。そうだとは思っていただけ」

噂に尾ひれがつき、やがて英雄は神格化される。革命軍の思惑は、いかにトツシユを祭り上げ、人々を引き込んでいこうと  
いうのがあるのだろう。

「革命軍に名前を使われるだけではなくて、悪いことにも自分の名前が使われるってトツシユさんが憤っていました。ある村で自分の名前を語った偽物が、金品を要求したり、女に言い寄ったりして、腹が立ったから自ら出向いてボコボコにしてやったと、こないだの手紙には書かれていました」

「居場所がわからなくても、こちらから連絡はできるのでしょ  
う？」

「いいえ、それがいつも一方的な連絡で」

「最近、どのあたりにいるかも見当つかない？」

セレンは首を横に振った。

突然の爆音！

小康状態が破られ敵が攻めてきたのか！

急いでセレンは礼拝堂に走った。

そして、思わずセレンは絶句した。

燃えていた。礼拝堂が燃えていたのだ。天井には攻撃を受け  
た穴が空いていた。

逃げ惑う人々。瓦礫の下敷きになった者。床に転んでいる少  
年。

セレンは少年に手を貸そうとした。だが、その手はライザに  
よって引かれ、強引に礼拝堂の外に出されたのだ。

都市は騒然としていた。



夕焼けよりも赤く染まる都市。

空から次々と炎が降り注いでくる地獄絵図。

クーロンは一瞬にして戦渦に沈んだのだった。

《 3 》

騎鳥部隊の中から、単独でアレックスのもとに近づいてくる男がいた。

「どこのガキだ？ この農場のガキなら親のところ以案内してもらおう。この農場はこの瞬間から我々の物になった」

男の顔にはいくつもの傷があつた。軽鎧で隠され見ないが、その軀にも傷がある。死んでいてもおかしくない傷の量である。幾多の戦いの中で先陣を切ってきた切込隊長だ。

アレックスはまったく動じていない。少年がするとは思えないほど冷やかな眼だ。

「軍を引け、そして立ち去れ。ここから先に進むことは決して許さんぞ」

「いい眼をする。俺の元で兵士にならないか？ おまえと同年くらいの奴らもけっこういるぞ？」

「断る」

即答だった。

切込隊長は見下して嗤う。

「ならおまえの首を手土産に、親御さんにあいさつでもするか」

腰のサーベルを切込隊長が抜いた刹那だった。

悲鳴があがった。

「ギエエエツ！」

クエツク鳥が奇声を発したようだった。人間がそんな声を出す事態とは？

アレックスの指が切込隊長の両眼に突き刺さっていたのだ。

そのまま眼窩がんかに指を突っ込んだまま、相手の顔面を自分に引き寄せて、アレックスは膝蹴りを喰らわせた。

それらは刹那の出来事であった。

クエツク鳥から落ちた切込隊長は地面にうつ伏せになったまま動かない。

少し先に見える隊列がざわめき立った。

そして、軍隊は進撃してきた。

勝てるかどうかなど関係ない。アレックスはひとりですその軍隊に立ち向かうつもりだった。ここを動かさず迎え撃つ。

しかし、思わぬ事態が起きた。

遠くから聞こえた爆発音。家の方角からだ。

アレックスは目を凝らした。

「まさか……挟み撃ちだったのか！」

軍隊は一方方向からではなく、二方向から攻めてきていたのだ。すでに向う側は家のすぐ傍まで攻め入っている。

アレックスは前方の軍隊を無視して、松葉杖を捨てた代わりに切込隊長のサーベルとクエツク鳥を奪い、すぐさま家に向かって全速力で駆け出した。

家の土壁を穿つ砲撃の跡。家の前ではすでに長剣とサブマシンガンを構えた父アントンが、敵兵と一戦を交えていた。

兵士を切り捨てたところで、現れたアレックスを見てアントンは微笑んだ。

「無事だったか」

「家族は？」

「地下に避難させた。その手についた血はおまえのじゃないな？」

「ひとり殺った」

「そうか」

アントンは哀しげな瞳でアレックスを見つめた。

軍勢をすべてちっぽけな家に向けてくることはないが、兵士たちが次々と近づいてくるのが見える。

怒り含んだ溜め息を吐いた。

「くそつ、奴らの目的は農場だ、腹が空いては戦は出来ぬってな。だから俺たちの命を奪うことに躊躇いはないだろう。今からでも降伏すれば命だけは助かると思うか？」

「さあ」

「なら俺の命と交換で、家族と、そしておまえの命を助けてくれって交渉しても無理か？」

「朕の命は一度亡くしたも同然。拾ってくれた者のために使うなら、それもいい」

銃声が鳴り響く。雨のような銃弾が飛んでくる。敵も本気を出してきた。

「地下室に取りあえず逃がしたが、相手の出方を見ると事態は最悪だ。ずっと隠れていても助からないだろう。俺が囷になつて時間稼ぎするから、隙を見て家族を連れて船で逃げる。頼んだぞ！」

アントンはアレックスからクエック鳥を奪い、家から離れるように、そして兵士たちの目を引きつけるように、サブマシンガンを乱射しながら、縦横無尽に駆け出した。命を犠牲にしようにしているのは明らかだった。

銃弾を躲しながらアレックスは家の中に飛び込み、ギブスの脚を引きずりながら急いで地下室へ向かう階段を下りた。

暗闇に包まれた地下で視界を閉ざされる。

「アレックス、こつち」

どこかからラーレの声がした。

ぼわつと微かに明かりが灯り床の下から顔を出すラーレが見えた。

石床の一部が外され、その先に家族三人が身を潜めていた。

アレックスが中に入り、石床のふたを閉め、空間の先を眺めると、そこは洞窟として奥深くまで続いていた。

「お父さんは？」

尋ねたラーレにアレックスは沈痛な面持ちで顔を横に振った。

急に泣き崩れたラーレが母シモーネにすがりつく。それで弟のカイも理解したようだ。カイがアレックスに掴みかかる。

「父さんが……ウソだ！」

「船を使って逃げるように言い付かってきた」

あえて生死については言わなかった。変に期待を持たせ、家族がこの場を離れないと言い出すことは、アントンの望むところではなかったからだ。まずはこの場を逃げ切ること。

母は気丈だった。

「この洞窟を抜けると地上に出るわ。早く行きましょう」

ランプが照らす道を四人は進む。足音とすすり泣く音だけが聞こえた。

やがて見えてくる地上の光。それは希望かそれとも……。

川の音が聞こえた。

連なる崖影のわかりづらい場所に出口はあった。

遠くから戦乱の怒号が聞こえる。アレックスはまだアントンが生きていることを予感した。だが、それを口に出すことはしなかった。

小走りで先に進むと、仕事で使っている小型の貨物船が見えてきた。

しかし、その周りにはすでに兵士たちの姿。

地面にうつ伏せになって四人は身を潜め、兵士たちのようすをうかがった。

兵士の数は三人。船の上に二人と、川岸の見張りが一人。銃剣で武装している。

「ここにいろ」

アレックスはサーベルを構えて立ち上がった。

怯えた表情でラーレがアレックスの手首を掴んだ。そして、無言で首を横に振る。だが、アレックスはその手を振り切って、

「脚の怪我を無視して全速力で走り出した。

最初に気づいたのは見張りの兵士だ。

「どこのガキだッ！」

ガキだからといって容赦ない。サーベルを構えているアレックスに銃剣を向けられた。

ほかの兵士二人もアレックスの存在に気づいた。

斬撃が奔る。

二人の兵士が気づいたときには、見張りの首が地面に落ちたあとだった。

アレックスはギブスをしていない脚を蹴り上げ、船の甲板まで跳躍して見せた。その距離じつに五メートル以上。怪我をしていなくても、常人が片足で踏み切れる距離ではなかった。

尋常でない発汗をするアレックス。彼の躰に異変が起きはじめていた。

怯えた兵士が銃を乱射する。

銃弾がアレックスの頬を掠め、赤い筋を奔らせる。その肩にも、その腹にも銃弾を受けた。

しかし、アレックスは修羅のごとき鬼気を発して怯まない。

一歩たりとも引かなかった。

突き立てられた銃剣の刃を片腕のギブスで受け止め、アレックスはサーベルを薙いだ。

兵士の胸が真つ二つに割られた。

それだけではない。金属のサーベルが砂のように崩れ、斬撃が起こした風の刃が残るひとりの兵士の躰を細切れにしたのだ。

武器がアレックスの力に耐えられない　そんなことがありえ  
ようか？

血に染まる甲板。

「朕はいつたい何者だ？」

自問自答するアレックス。

「きゃーっ！」

遠くから悲鳴が聞こえた。

家族三人が敵に兵に捕まっている！

アレックスはすぐに駆けつけた。

そして、辺りが大勢の兵士たちに取り囲まれていることに気づいた。家族を捕らえている数人の兵士と、その頭上の崖の上に隊を成している兵士の列。

人質を取られたアレックスは身動きが取れない。三人は羽交い締めになれ、自力ではとても逃げられそうもない。たとえ逃げても、すぐに周りの兵士たちにまた捕まるだろう。

兵士のひとりがなにかをラーレたちの足下に投げた。

絶句。

悲鳴すらあげられなかった。

それは首であった。見るも無惨に傷つけられた生首。ぐしゃにされた顔に面影が残っている。

世界を震撼させる鬼気をアレックスが放った。

「おのれええええッ、下賤な者どもがアアアアッ！」

武器も持たずアレックスが敵のど真ん中に突っ込む。

雨のような銃弾が発射される。

どんな強靱な肉体を持ってしようと、この銃弾を浴びせられては死ぬだろう。

突然、シモーネが兵士の腕を噛み、どうにか振り切ってアレックスの元に駆け寄った。

シモーネによって押し倒されたアレックス。二人は地面に倒れ込んだ。

瞳を丸くするアレックスの頬に、血の雨が降ってきた。

「朕を庇ったのか……莫迦な……ことを……」

「命を無駄に……ぐふっ……しないで……」

「それは朕の台詞だ」

子供らの悲鳴があがる。

「お母さん！」

「母さん！」

シモーネは力なくアレックスに被さり、耳元でなにかを囁く。

「夫が言っていたわ……もしかしたら……あなたの正体は……」

「……」

最後まで言わずに事切れた。

幽鬼のようにゆらりと立ち上がったアレックス。

「……母が死んだ」

脳裏にフラッシュバックする光景。

目の前で貴婦人が護衛の兵士に刺されて死んだ。

「また朕を庇って……母が……」

急に空が曇りはじめ、稲妻が泣き叫んだ。

そして、黒い雲よりもさらに黒きものが、稲妻を帯ながら雲



を断ち切り天から降ってきたのだ。

不気味に輝く漆黒の大剣。

一撃で地面に亀裂を奔らせたその剣は まさに煌帝の証  
黒の剣 ！

少年とは思えぬ、まして人間とも思えぬ艶やかな笑みを浮かべたアレックス。

兵士たちがざわめいた。

黒の剣 の柄を握ったアレックスは、その大剣をゆるりと優雅に薙いだ。

風も起こさぬその所作。

しかし、実際は撃風の刃が崖の上にはいた兵士たちを切り裂き、吹き飛ばし、一撃で一掃していた。

天災に等しき破壊力。

怪我を負って地面に這いつくばった兵士が呻く。

「ま……まさか……その黒い剣は……暴君が生きていた……だと」

次々と兵士たちが叫びはじめる。

「煌帝ルオだ！」

「シユラ帝國の暴君だ！」

「恐ろしい 黒の剣 を持っているぞ！」

「怯むな、相手はただの小僧ひとりだぞ！」

アレックス ルオは不気味に嗤った。

「ルオか……そんな呼ばれ方をしていた気がする」

まだ記憶が完全に戻ったわけではなかった。

しかし、その手元には 黒の剣 が戻った。

黒の剣 がルオを主と認めたのだ。

銃弾が浴びせられルオの躰に風穴が空く。

流れ出した血が なんと逆流するではないか!?

傷痕が弾丸を吐き出し、見る見るうちに塞がっていく。

「うおおおおッ！」

魔獣の叫びをあげたルオが兵士に切り込む。

鬼気に肝を潰された兵士は身動きができなくなり、姉弟が自然と解放された。

黒い血が舞う。

ラーレの目の前で崩れ落ちる肉塊。瞳に焼き付く。この虐殺の光景を生涯忘れることはないだろう。

黒の剣 が兵士たちの四肢を切り飛ばす。ひとりひとりだ。まとめて薙ぐことができるにも関わらず、ひとりずつ細切れにしていくのだ。

悪夢であった。

乾いた大地が鮮血を吸う。

やがてそこは緑に変わるだろう。多くの屍の上に、この大地は成り立っている。

魔獣と化したルオはその姿さえも変貌させていた。

足下まで伸びたざんばら髪。肌を稲妻のように奔る黒い文様。瞳は血のように真っ赤に染まっていた。

兵士の数がひとり、ひとりと減っていく。

まだ命のある者が地で呻き藻掻いているが、この大地に立つ

ているのは三人だけ。

ルオと姉弟の眼が合った。

怯えきつている。

魔獣に怯えているのだ。

姉の前に立ったカイは拾った小石をルオに投げつけた。

すぐさまラーレがカイを自分の後ろに隠す。

頬に石を受けていたルオは何事もなかったように歩き出す。

「船に乗って早く逃げる。もう二度と会うことはない……だから君たちを助けることも二度とない」

言い残してルオが振り返りもせず歩き続ける。

遠くにはまだ軍隊が見える。

敵の主力である戦車の影。

不気味に轟く曇天の空。

修羅場はまだまだ先にある。

この日、煌帝ルオの名が再び世界に響きはじめるのだった。

《 4 》

周りにビルが建ち並ぶスクランブル交差点を行き交う人々。

雑踏は今日も賑やかに華やかに、街は活気づいていた。

空に映し出されている巨大スクリーンには、生放送中のお昼のバラエティ番組が映し出されている。途中のコマーシャルでは、最新型の家庭用アンドロイドが映し出されていた。

空では魔導式のエアカーが管状道路を行き交っている。

さらに高い空を飛んでいるのは、羽のない魔導式の飛空挺だ。非常ベルが鳴った。

覆面をした男がコンビニから飛び出してきた。手に持っているのはビーム銃だ。

すぐ近くを巡回していたパトカーがサイレンを鳴らす。

覆面男が人々を押し倒しながら逃げる。

先回りしたパトカーから警官が降りてきた。人間ではなかった。メタリックのボディを持つロボット警官だ。

人型のロボット警官は人間のように走り、覆面男に飛びかかった。

動作は人間に似ているが、その脚力は遙か人間を凌駕し、腕力もゴリラ並みだ。さらに重量もあるため、押した倒されてのし掛かられた覆面男はひとたまりもない。

肋骨の折れる音がした。

苦痛で顔を歪ませた覆面男は逃げる気をそがれ連行されていく。

高性能ロボットたちは、今や人間の生活と切っても切れない存在になった。先進国では危険な仕事のすべてをロボットにやらせている。ほかに清掃業や肉体労働の分野でも多く活躍している。最近では、倫理の教師にアンドロイドが就任したというニュースが、話題になったばかりだ。

ロボットですら仕事に就ける時代なのに、いや、ロボットが仕事を奪ったからこそ、失業者も多かった。街の繁栄の影にあるホームと呼ばれる地域。そこはホームレスで形成されている

街だった。

少女はいつも外の世界に憧れていた。向う側に見える華々しい街。人々がみんな輝いて見えた。

しかし、現実には薄汚れた躰を包むボロのような服。髪の毛は硬くボサボサで、少し搔くだけでふけが落ちてくる。履き物は最近新しいのを見つけた。つま先に穴の開いた赤い靴だ。

まだ少女は幼かった。歳は六か七か、厳しい現実に晒されながらも、強く逞しく生きていた。親はいない、兄弟もいない、身内はだれもいなかった。けれど、周りの“男”たちは優しくった。

ホームでは争いが絶えない。だいたい食料が嗜好品の取り合いだ。少女は比較的食料を回してもらっていたが、それでも腹一杯に喰えることなんてなかった。

腹が鳴る。

今日も腹と背中がくつつきそうだ。

食料を手に入れる方法は、もらうか、買うか、奪うかだ。

少女はまだまだ自分でお金を稼ぐことができなかった。いつも大人たちの施して生活していた。

その日、少女はビルの隙間から街の様子を眺めていた。コンピニ強盗が警察に捕まった。奪うのに失敗したのだ。

自分だったら、もつとうまくやれるのに。

少女の心に芽生えた黒いモノ。

街中で赤い林檎が少女の瞳に映った。目の前を通り過ぎたのは、おそらく女性だ。眼鏡をかけた女性だった気がする。

この時代に眼鏡を珍しい。今はいくらでも手術で視力を回復することができるし、たとえ眼球を失っても再生するか、もしくはサイボーグ化することも可能だ。けれど、そんな時代だからこそ、たまに自然にこだわる者もいる。

眼鏡の女はなぜか林檎を片手に持ち、それを上に投げてはキヤツチして、また投げてはキヤツチし、それを繰り返しながら歩いていた。まるで引力に取り憑かれたような行動だ。

女のあとを白衣を着た男が追ってくる。

「レヴェナ博士！ 学会のパーティーを抜け出すなんて、またスポンサーに叱られますよ！」

まるで聞こえていないように、女は林檎を投げ続け歩いている。

少女は白衣の男を押し飛ばして歩道を駆け抜けた。

瞳に映る真っ赤な林檎。なぜだろう、まるで宝石のように見えた。

林檎が上空に投げられた瞬間、少女は類似希なる運動神経で跳躍し、女から見事に奪い取ったのだ。

女はぼかんと口を開け、

「……あ」

と、だけ呟いた。

代わりに叫んだのは白衣の男だった。

「泥棒だ！ その子供泥棒です！」

子供相手ではなく、殺人犯を相手にするような剣幕で叫んだ。それに怯えたのは少女だ。

ただ林檎を奪っただけなのに、どうしてあの大人は恐い顔をするのだろうか？

次の瞬間、急に目の前に飛び出してきたパトカーに少女は撥ねられた。

まさか地上でこんなスピードを出している車に撥ねられるなんて。

パトカーを運転していたのは、覆面男だった。奪ったパトカーで逃走中だったのだ。管状道路に入ってしまったては逃げ場はない。逃げるなら地上だ。

「かわいそうに」

眩いたのは眼鏡の女だった。

雑踏が静まり返っていた。

立ち止まる者、中には足早に逃げ出す者。

紅い海に沈む幼い少女。

右脚が股間からもがれ、右腕も同じもがれ、右の脇腹からは内蔵がはみ出してしまっている。パトカーがどれほどの時速が出ていたか想像するに恐ろしい。

こんな重傷を負いながら、不幸なことにまだ意識があった。

凄まじい苦痛。

アレンは大量の汗を拭きながら眼を覚ました。

「夢……か？」

ソファから上半身を起こしたアレンは周りを見た。

白く無機質な部屋だ。ソファ以外にあるのは、目の前の壁に取り付けられているモニターだ。それと、ソファのすぐ傍に花

を一輪挿した花瓶が置いてあった。

「……腹減った」

どれくらい食べ物をお口にしていなかったのか？

「これでよろしければ」

アレンの目の前に差し出された手の上には、真っ赤な林檎が乗っていた。

林檎を手に取りながらアレンはゆっくり顔を上げる。若い男が立っていた。髪の毛を七三にした細身の男だ。骨と皮だけの躰というほど痩せているが、不健康そうには見えない。ただし、少し表情は硬い気がする。

男は微笑んだ。

「だれも食べたことはありませんから、味は保証できません」

「だれも食ったことないって……」

「心配はいりません。動物たちも食べていますから、毒はありません」

「あつそ……あながと」

アレンは林檎に牙を立てて、引き千切るように食らい付くと、頬いっぱいにおの中に入れた。

見うる見るうちにアレンの表情が晴れやかになる。

「うまつ、これすげえうまいな！」

「それはよかった」

また男は微笑んだ。

アレンは林檎を食いながらまじまじと男を観察するように見つめる。



「なあ、ところであんただれ？」

「わたくしはこの街で唯一、音声言語で会話ができる人型アンドロイド ジャン・ジャック・ジョンソン。人間の友からはJ3（ジェスリー）と愛称で呼ばれていました」

「マジで、あんた人間じゃないの？」

「はい、この街には人間はひとりもいません。ようこそ、ロボットの楽園メカトピアへ」

教会があつという間に炎に包まれた。

空から次から次へと降り注いでくる焼夷弾（しょういだん）。クーロンの街全体が燃えている。

直接炎に焼かれていなくても、熱風で火傷しそうなほど熱い。

「こんな非人道的な攻撃」

セレンの顔を彩る赤い絶望。

焼かれているのは街だけではない。火だるまになった人間のたうちまわっている。

ライザは訝しげに眉間に眉を寄せていた。

「おかしいわ、こんな攻撃を仕掛けてくるなんて。魔導炉まで破壊するつもり？」

科学財産まで破壊する道理はないはずだ。侵略者の目的は、都市をそのものを奪うことだったはず。

炎の魔の手は瞬く間に広がり、すぐセレンたちの傍に迫っていた。

「早く逃げましょう、ここは熱風がすごくて。そうだ、川の中

に逃げれば！」

帝国水没後、各地を流れるようになった大河。そこから枝分かれした水脈が地下を通って、クーロンの街にも沸きだし川になっていた。

すぐにライザがセレンの腕を力強く引いた。

「死にたいのなら止めないわ。あれを見ても川で泳ぎたいと思っ  
う？」

その光景を見てしまったセレンは吐き気に襲われ、思わず目を伏せてしまった。

暑さに堪えかね逃げ惑う人々が川に飛び込む。中には火だるまになっていた者もいた。だが、川は天国でもなんでもない。

川は煮えたぎっていたのだ。

地獄の鍋で生きたまま煮られる人間。

悲鳴が耳の奥にこびりついて離れない。

ライザは辺りを見回して頭を猛回転させていた。

「これはただの炎じゃない。地下に逃げたくらいじゃ蒸し焼きにされるかもしれないわね。この街でもっとも安全な場所は魔導炉よ、あの場所がもっともどんな災害にも耐えられるようにつくられているわ」

逃げ惑う人々の間を縫って街を駆ける。

ライザはセレンの手首を掴んで引く張りながら、セレンも決して離さないように必死についていった。混乱の中ではぐれてしまったら絶望的だ。

逃げる途中で子供の泣き声がした。けれど、ライザは待って

くれない。セレンは耳を塞いで戦火の中を駆け抜けた。

空から再びなにかが降り注いできた。今度は焼夷弾ではない。金属の塊だ。

それは機械だった。骨組みだけの人間のようなロボットだった。機械の兵士だった。

ロボット兵団がクーロンに攻め込んできたのだ。

人々にとってそれは未知の存在だった。失われた時代の科学兵器。街の混乱はさらに高まった。

機械兵が次々と素手で人間を屠<sup>ほぶ</sup>っていく。武器など必要ない。大人が赤子相手に武器など使うだろうか？

攻められていたのはクーロンだけではなかった。周りを囲んでいた新興国軍もロボットの襲撃を受けていた。

だれもが予想していなかった、人類が予想もしていなかった敵が出現したのだ。

ライザとセレンの前にも機械兵が立ちはだかった。

ロストテクノロジーにはロストテクノロジーで対抗する。

魔導銃 ピナカ をライザが抜いた。

銃口は一つであった。

しかし、発射された激光は三本の矢となり咆哮をあげ、大地を穿ちながら機械兵を八つ裂きにしたのだ。まばゆい光で目が眩む。

ピナカ が通った道は、まるで巨大な悪魔の爪で引っ掻いたように、建物もすべて三本線で引き裂かれていた。

それで終わらなかった。

次々と現れた機械兵の列を ピナカ が薙ぎ倒したのだ。

光線は放たれたただけでは終わらず一〇メートル以上の三つ叉の槍となり、ライザが躰ごと回転させて横に振り回すと、機械兵や建物を切断しながら薙ぎ倒したのだった。

セレンが悲鳴をあげる。

「なんてこと、まだ建物の中にひとがいたかもしれないのに！」

「燃えて崩れそうな建物の中にいたって助からないわよ」

瓦礫の荒野が広がった。

「さあ、行くわよ」

開かれた道をライザが進む。

先に見えてきたのは合金のドーム型の建物。あれが魔導炉の施設だ。

施設は壁で囲まれ、入り口は正面ゲートのみ。逃げ場を求めた人々は壁を登って中に侵入しようと懸命だ。だが、壁の上には高圧線が張り巡らされ、それに触れたものが黒こげになって死んだ。

ライザは正面ゲートにカードキーを差し込み、暗証番号を打ち込んだ。

すぐにスライドしながら開かれた重厚な金属の扉。人々が流れ込んでこようとした。

扉の前に立ちはだかるライザは、容赦なく ピナカ を放とうとした。それを必死に腕にしがみついて止めたのはセレンだ。「やめてください」

構わずライザは放った。ただし、天に向けて。

咆哮をあげながら天に三つ叉の光が昇る。人々は畏怖した。

艶笑するライザ。

「それではごきげんよう」

敷地内に入ったライザとセレン。正面ゲートは静かに閉められた。

「あのひとたちを中にいれてあげてください！」

セレンは涙目でライザに訴えたが、

「ここがどのような施設かわかっていないようね。一〇〇人、一〇〇〇人の命なんかよりも重要な施設なのよ。だれかひとり施設で事故でも起こしてみなさい。それこそクーロンだけでなく、周辺地域まで汚染されて死の荒野に化するのよ」

「だからって目の前のひとを見捨てるなんて！」

「そういうの綺麗事っていうのよ、シスター・セレン」

空が紅く燃え上がった。

この施設にまで炎の塊が降ってきた。

「中に入れば安全よ！」

ライザはドーム施設に急ごうとした。

しかし、その目の前に炎の塊が 違う、炎のような花魁衣装を着た女が舞い降りたのだ。

炎の車輪に乗り、現れたのは火鬼だった。

「お久しぶりでありません」

艶やかに狂気を孕んだ表情。火鬼の顔半分を覆うメタリック。機械の片眼が紅く輝いていた。

クーロンを包囲していた新興国軍の二万を超えていた兵は、機械兵の脅威を前にして為す術もなく撤退を余儀なくされた。だが、すでに退路は炎の壁によって阻まれ、本国との連絡は完全に途絶えたのだった。

そして、クーロンもまた滅亡の危機を迎えていた。

火鬼率いるロボット兵団。

「鬼械兵団は気に入ってくれたではありません？」

自らの躰の一部をもサイボーグ化した火鬼は、なぜ鬼械兵団を率いてクーロンに攻め込んだできたのか？

「この件の首謀者は隠形鬼かしら？」

と、ライザは笑みを絶やさず尋ねた。眼は極寒のように冷たい。

「そうでありんす」

「やはり……。シユラ帝國を滅ぼし、次は世界でも狙っているのかしら？ 人知れずこんな口ストテクノロジ―を保有しているなんて、隠形鬼とは何者なの？ その真の目的は？」

「わちきには興味のないことでありんす。わちきの望みはこの世を炎で焼き尽くすこと。てめえらも死にさらせや！」

急に口調を変えて夜叉の表情で火鬼を襲い掛かってきた。

扇から業火を操り渦巻く炎の鞭を放つ。

ライザはセレンを抱き寄せて、防御フィールドを張った。楕円状の透明なカプセルのような形だ。

フィールドに当たった炎は一瞬にして消えたかのように見えた。

「炎を無意味よ。この防御壁に少しでも触れてみなさい、たちまち分解するわ。つまり炎とて、酸素などと引き離され、燃焼現象すら起こさせない」

ライザは余裕であった。

キレた火鬼は炎球をいくつもいくつも投げつけてきた。

「キエーッ！ わちきの炎で焼けないものなどあるもんかッ！」

大量の炎は急激な空気の温度差を生み、あたりにうねるような風を巻き起こした。

ライザとセレンの躰が、水に映る影のように揺れた。

息を呑んだ火鬼がハツとして、すぐに辺りを見回した。

ドーム施設に走っている二人の姿！

「わちきが出し抜かれた!？」

そうだ、すでにライザとセレンはその場にいなかった。火鬼の炎の攻撃を受けていたのはホログラムだったのだ。

息を切らせながらライザがセレンに説明する。

「あの防御壁は完全に外と遮断されるのよ。つまり密室になり、酸素の供給も止まる。もつと最悪なことに、あの場を動けなくなるのが最大の弱点。早めに逃げ出したのは正解だったわ」

一撃目の炎は防御壁で防いだ。それからすぐに敵に気づかないようにホログラムを発動させ、自分たちはその場から離れたのだ。

地面が急に揺れた。

その震動はドーム施設からだ。

思わずセレンは足を止めた。

「あれを……」

「どうしたの速く走りなさい！」

振り返ったライザが再び前に顔を向けて、その異変に気づいた。

まるでそれは花のつぼみのようだった。

ドーム施設の頂上から線が走り、花びらが剥けていくように、天井が開かれる。

「あんなシステム知らないわ！」

ライザが叫んだ。

たしかに魔導炉のシステムすべてが解明されているわけではない。だが、帝國はこれまで管理して使ってきたのだ。しかもライザは科学顧問であり、解明されている情報は把握しているはずだった。

魔導炉は都市にエネルギーを供給するシステム。以外の可能性があると、ライザは示唆した発言をしたのだ。

火鬼は二人を追うことをやめ、うっとりとその光景を眺めていた。

花が咲いた天井から、謎の塔がせり上がってきた。塔が花粉を飛ばす。

数え切れない泡のような光球が天に放たれ、世界中の空へと流れていく。



「なにが起きて……いいえ、これからなにが起きようとしているの？」

ライザは空から目が離せなかった。

光球は空で拡散して、一個が弾け飛んだかと思うと、それはまた小さな光球となって空から雪のように舞い降りてきた。

得体の知れないモノにセレンは怯え、後退って小さな光球を避けた。

次の瞬間、女の悲鳴があがった。

「きゃあああつ！」

ライザの悲鳴だった。

「どうしたんですかライザさん!？」

セレンが顔を向けると、ライザは片腕を高く掲げて、仰向けに地面でのたうち回っていた。

メタリックに輝くライザの片手。掲げられた片手から侵蝕されるように、手首から腕へと肌が金属に変化していく。なにが起きているかはつきりしないが、それは脅威であることに違いなかった。

ライザが ピナカ を放った。自分の腕に向けてだ。

「ギヤアアアアアアアアアアツ！」

死線を彷徨う絶叫。

金属に覆われた肘から先を狙ったが、肩から先が持つて行かれ、肉片は跡形もなく消し飛んだ。

目を血走らせながらライザが立ち上がった。片腕を失った傷口は高熱により焼かれたお陰で、大量の出血は奇跡的に抑えら

れているが、このままでは命に関わる。

「ハア……ハア……空から降ってくるアレに触れてはダメよ」

蒼い顔をして脂汗を流すライザにセレンは言葉を失った。

空からは光球がゆらゆらと降ってくる。

ライザは天に向けて ピナカ を放ち銃口を振り回した。うねり狂う三つ又の龍。

「一か八か逃げるわよ」

「もう少し遊んでくんまし！」

再び火鬼が追ってきていた。

ライザは天で振り回していた ピナカ をそのまま地面に叩きつけ、大地を抉りながら火鬼を薙ごうとした。

しかし、火鬼は人間と思えない跳躍で天に舞い上がり、ピナカ を足下に躲したのだ。

「おほほほほ、炎に焼かれ悶え苦しみなんし！」

火鬼から放たれた炎の渦がライザを呑み込もうとする。

それを無視してライザは走った。敵の攻撃など構っていられなかった。周りでなにが起ころうと目的を変えない。一瞬たりとも躊躇せず立ち止まらない。

ライザはセレンに手を伸ばした。

「なにが起きても恨みつこなしよ！」

「なにがですか!？」

「交換転送よ。行き先はわからない、よくて消滅、悪くて異空間に閉じ込められる。躰の一部でも失っても外に出られたら、ラッキーなほうかしらね。アナタの恋人の神様にでも祈りなさ

い！」

「そんな！」

しかし、セレンは手を伸ばした。

クーロンに逃げ場はない。

炎が街中を包み込み、空からは謎の光球は降ってくる。

ライザはセレンの手をがっしりと握り、自分の躰に引き寄せた。

「ちなみにこれ一人用だから、二人だとさらにリスクは高まるわよ」

「ええっ！」

火鬼の放った炎の渦がセレンとライザを呑み込んだ。

果たしてふたりは!?

そして、クーロンは滅亡した。

ここでの出来事を人々はいつか知ることになるだろう。

シユラ帝國亡きあと、人間同士の争いが戦乱の世に変えた。

それが終わりを迎え、新たな構図へと急速に変わっていくだろう。人間に対するのは。

戦いの火ぶたが切り落とされた。

ソファに座りながら立体映像テレビを見るアレン。

「……ヒマすぎ」

テレビの内容は動物のドキュメントだ。サバンナに暮らす動物たち。今は絶滅してしまったチーターというネコ科の動物が映っている。ほかにアレンは見たこともない動物ばかりだ。

この映像には音声流れなかった。

「なあ、これさあ音とかでないわけ？」

「すみません、音での伝達は非効率なので、電波信号で情報が流されているのです。わたくしには聞くことができます」

ジェスリーはそう教えてくれた。

「たしか音声言語で会話できるのあんただけとか言ってたよな？」

「はい、ほかのものには必要のない機能ですから」

「なんども聞いて悪いんだけど、あんたマジで人間じゃないわけ？ てゆか、本当に人間じゃないの？」

「はい」

「外出て確かめたいんだけど？」

「それはできません。あなたは侵入者なのです、自由に動かれて困ります。それにあなたは怪我人なのでから、無理をせずに身を休めていてください」

アレンの片腕は布で固定されていた。折れているのだ。さらに布は頭に斜めがけされ、片眼にも巻かれていた。

加えて機械の半身も調子が悪いとアレンは感じていた。

「こつちの腕に違和感がある。自分の意思と誤差があるっていつか、なんていうか……」

「それはありえませんが。生身の身を治すことはこの街ではできませんが、機械は完璧に修理させていただきました」

アレンは布が巻かれた片眼を押さえた。

それを見てジェスリーは悲痛そうな顔をつくった。

「その眼は残念でした。せめてサイボーグ化の技術さえ残っていれば、機械の眼に取り替えることができましたのですが」

「べつにいいよ、片眼が残ってるし」

負傷した片眼は完全に視力を失っていた。

どうやってあの場から生き残ったのか？

シユラ帝國の地下遺跡で激流に巻き込まれ、完全にそのときの記憶を失った。

あの状況から助かっただけでも奇跡。負傷したのが片腕の骨折と片眼を失ったくらいで安いものだ。

突然、ジェスリーが言う。

「外に出る許可がありました」

誰かと会話していた雰囲気もなかった。というか、この部屋にはアレンと二人きりだ。おそらく電波かなにかを受信したのだろう。彼らのいうところの音声以外の会話だ。

「外出れんの？ やった、鈍った躰を動かしたかったんだよねー」

「しかし、自由に行動されては困ります。わたくしが同行して監視させていただきます」

「うん、ぜんぜんオツケ。外の空気が吸えるだけでいいよ」  
今までいた場所はジェスリーの自宅だった。マンシヨンの一室だ。つまり、ほかの部屋にも暮らしているものがあるということ。

ジェスリーに連れられ廊下を歩いていると、デッサン人形のような人型ロボットが歩いてきた。ジェスリーと違って肉感や

肌がない。まるで骨のようだ。

人型ロボットはすれ違い様に頭を下げて挨拶をしてきた。まるで人間の挨拶だ。

ジェスリーも頭を下げるのを見て、アレンも慌てて頭を下げた。

「こんにちは」

人型ロボットには頭はあるが、顔はなかった。眼の辺りは左のレンズが繋がった長方形のサングラスみたいな形になっている。そのため表情はなかったが、アレンに手を振ってくれた。そして去っていく。

アレンは不思議そうな顔をしてジェスリーに顔を向けた。

「侵入者って言われたから、てっきり敵視されてんのかと思っただけど、友好的なのな」

「はい、この街に住むものは平和を愛しています」

「愛するか……」

「愛」というのは、彼らに感情があるような言い方だ。

マンションを出て街並みを歩く。街は異様なまでに静かだ。

人型ロボットたちが歩いている。犬の散歩をしながら。

街路樹の落とした葉を清掃しているのは、ドラム缶のようなものから腕が伸びているロボットだ。その腕はどうやら掃除機になっているらしい。

アレンは立ち止まって高層ビルを見上げた。

「なんかさあ、こんな街の光景見たことあるような気がするんだよね」

「それはありえませんが。この街は人間に知られていません。我々は人間に忘れられた存在なのです。人間にとっては長い年月でしょう、我々は人間の眼に晒されないこの場所で、平和に暮らしてきたのです。ですからあなたがこの街に現れたのは、非常に重大な事件なのです」

「俺殺されちゃうわけ？」

「そのような野蛮な真似をするのは人間だけです。しかし、殺しはしません、あなたの処遇について議会が揉めています。

その根本にある問題は、あなたの定義を“人間”とするか“機械人”とするかです」

「俺人間だけど」

街を抜けて二人は自然の広がる公園までやってきた。

芝生が見渡せるベンチに腰掛ける。

「機械も疲れんの？」

「疲れませんが、雰囲気は楽しめます。それに緊急時のエネルギー補給もここで行うことができます」

ベンチに取り付けられていたふたを外して、ジェスリーは中からプラグコードを引っ張り出した。

「我々の多くは光エネルギーで動いていますが、その供給が間に合わない場合があります。そこで街の各所に補給装置が備えられているのです」

目の前の芝生には動物がいた。脚がすらつと長く、角が生えているのといないのが二種類。

「あれなんて動物？」

「シカです。ほ乳類、鯨偶蹄目、シカ科に属する草食動物です。普段はおとなしい動物ですから、近づいても平気です」

「なんか平和だよなあ」

「はい、人間がいまさんから」

「……やっぱ俺嫌われてる？」

「いいえ」

ジェスリーの見た目はほとんど人間であり、表情もそれに即しているが、どうも自然な表情とというのがないので、感情のよ  
うなものを読みづらい。

「人間は敵ではありませんが、脅威です」

遠くを眺めながらジェスリーがつぶやいた。

「俺とは普通に話してるじゃん？ やっぱイヤイヤなわけ？」

「この街に住む機械人や機械たちの多くは、機械から生み出されたものたちがほとんどです。しかし、わたくしのような例外もいます。わたくしをつくったのは三人の人間でした。彼らとわたくしは友人です。ですから、あなたとも仲良くなれるでしょう」

「ロボットの友達なんてはじめてだな……」

と言いつつも、アレンの心にはなにかが引つかかっていた。

ジェスリーは話を続けている。

「我々はこれまで秘密裏に人間の世界を監視してきました。そして、今のところ人間という種とはわかりあえないという結論に至っています。個人レベルでは仲良くできて、機械対人間となれば話はべつなのです。我々の存在を知った人間たちは、



我々をどうするでしょうか？ 人間たちは忘れているでしょうが、大戦の傷も癒えていなのです」

「大戦？」

「その話は機会があればしましょう。議会はあなたにここで暮らすことを望んでいます」

「やだよ」

即答した。

ジェスリーは疲れたような笑みを浮かべた。それはとても人間味を帯びていた。

「そうですね。あなたは外の世界を知っているのですから、こんな窮屈な場所にいたくないのは理解できます。わたくしもそうです。変化の緩やかなこの街で、もう何千年という月日を過ごしました。人間の友たちと世界中を旅した日々が懐かしい」

「あなた人間っぽいよな」

「わたくしは特にそのようにつくられましたから。あの時代、高性能なプログラムが次々と競い合うように生まれていました。人間よりも頭のいいプログラムは簡単につくれます。しかし、彼らが目指したものは、自分たちの友となるものでした」

この街はまるで人間の街のようだ。暮らしもそのような気がする。テレビという娯楽を楽しみ、ペットの散歩をして、きつとほかにも人間味のある生活が各所にあるはずだ。

しかし、この街は静かすぎる。

無機質な静けさ。

まるでゴーストタウン。

死んだように静かなのだ。

動物たちもいる。

草木も息づいている。

ふとアレンは空を眺めた。

青空に似ているが、生命力を感じない。

「なんで太陽ないわけ？」

生命力を感じないのは、地上の生きとし生けるものを照らす太陽がないからだ。

「それはここが陽の光の届かない場所だからです」

「つまりどこ？」

「それは言えません」

「人間の俺には秘密つてわけね。機械と人間のどっちに定義するかなんて言つて、どうせ人間としか見てないんだろ？ 俺人間だし、それで合ってるけど」

「人間たちも我々を差別してきましたが、我々も人間を差別した。だからわかり合えなかつたのです。人間は最後まで我々を  
じ  
」

最後まで言い切る前に爆発音が聞こえてきた。

街からだ。

さらに爆発音が聞こえた。二つ、三つ、四つ、次々と響いてくる爆発音。

街から煙が立ち昇っている。

アレンはベンチから立ち上がった。

「事故？」

「事故など滅多に起きません。それにあんな 新たな侵入者が街に現れたそうです。その者は明らかかな敵意をもって我々に攻撃をしかけています」

「行くぞ！」

「はい」

二人は急いで街に戻った。

## 第二章 鬼械兵团

### 《1》

街に向かって走りながら、ジェスリーが口を開く。

「電波信号です。翻訳します 無条件降伏を要求する。今の攻撃はこちらの力を誇示するために行ったものであり、お前たちを傷つける意図は一切ない」

「なんだよいきなり話し出して？」

「私はお前たちの味方だ。私に力を貸せ、そして地上世界を我らのものに、人間たちを家畜とするのだ」

「だからなんの話だよ？」

話についていけないアレン。

街のど真ん中で立ち止まったジェスリーが空に向かって指差した。

アレンは見た。空に浮かぶ何者かの姿を！

「隠形鬼!？」

そうだ、そこには隠形鬼がいた。

相手もアレンに気づいた。空に浮かんでいた隠形鬼が道路に降り立つ。どういう原理で空に浮いていたのかわからない。

「マサカ此処で出会ウトハナ あれん」

「ばーか、あんたとなんか会いたくなかったよ！」

対峙するアレンと隠形鬼。

間に入ったジェスリーがアレンに顔を向ける。

「お知り合いですか？」

「知り合いなんかじゃねーよ。あえていうなら、すっげえム力つくやつ。敵だよ、敵」

「たしかに友好的な存在ではないようです」

破壊された街。

住宅が爆破され、ビルが傾いて今にも倒れそうだ。

隠形鬼が一步一步とアレンに近づいてくる。

「何故助カル事ガ出来タノダ？」

「知るか。この街の向こうを流れる川岸で見つかったんだと」

「成る程、地下水脈ヲ通ツテ此ノ機械人ノころにー二辿り着イタト言ウ訳カ。偶然ト八面白イ、此ノ場所ガドノヨウナ場所カ、モウ知ツテイルカ？」

「知らねえーよ」

続けて口を開こうとした隠形鬼がジェスリーに顔を向けた。

二人は無言で見つめあう。

ジェスリーの表情がさまざまに変わる。まるで無言のまま会話をしているようだ。

そして突然、ジェスリーが隠形鬼に殴りかかった。

隠形鬼はジェスリーの拳を片手で受け止め、ひねり上げて投げ飛ばした。

「出力八人間以上ダガ、非戦闘たいぶデ八話ニナラン」

地面に倒れたジェスリーの腕は、ひしゃげて中身の金属の骨組みを晒していた。表面的には人間だが、やはり中身は機械だ

った。

すでにアレンも隠形鬼に殴りかかっていた。

どこかで歯車の鳴る音が聴こえた。

この拳も隠形鬼は片手で受け止めた。

「又ッ！」

だが、ジェスリーのようにはいかなかった。

アレンは機械の拳で隠形鬼を押しながら地面を叩き割りながら走った。

押された隠形鬼は背中中で住宅の壁を突き破り、家具を破壊しながら、さらに反対側の壁も突き破って家の外に出たが、まだ勢いは死なない。

「出力が上ガツタノカ？　コノ街ノ住人タチノ仕業ダナ！」

「くたばりやがれッ！」

アレンは腕を大きく振り回して隠形鬼を殴り飛ばした。

一〇メートル以上もの距離とぶつ飛ばされ、隠形鬼はビルにぶつかった。

すでに傾いていたビルは、隠形鬼がぶつかった衝撃で、なんと倒壊してしまった！

凄まじい轟音と砂煙。

下のほうにある階層が潰れてしまい、残った上の階のほうは、隣のビルに寄りかかって止まっている。完全な倒壊は免れたが、いつまた崩壊するかわからない。

ぞくぞくと集まって来たパトカーや消防車。

倒壊したビルの中からレーザーが放たれ、一台のパトカーに

切り口の鋭い大きな穴が開いた。

隠形鬼はまだ生きている。

「此処デ破壊スルニ八惜シイ。興味ノ尽キナイ存在ダ」

なんと隠形鬼は空を飛んでいるパトカーの屋根に乗っていた。いつの間にもそこまで移動したのかまったくわからなかった。

「降りて来やがれ糞つたれ！」

地上からアレンが叫んだ。

「仲間ニナレ。御前ニ八其ノ資格ガ半分アル」

「前にも言つたる、なるわけないって！」

「真二選ブ権利ガ自分ニアルト思ッテイルノカ？」

「力尽くならかかって来いよ！」

「真二選ブノハ、私デモ御前デモナイ。人間ガ御前ヲドウ見ルカ、ソシテ、機械ガ御前ヲドウ見ルカ。戦イガ激化スレバ、人間ハ御前ヲ迫害スルカモシレナイゾ、機械トシテ」

「俺は人間だつーの！」

小石を拾い上げたアレンが隠形鬼に投げつけた。

幻に当たったように、小石は隠形鬼の躰を擦り抜けてしまった。

霞み消える。

隠形鬼がこの場から消える。

「返事ハ緩リト待トウ」

逃げられた。アレン側からすれば逃げられただが、用が済んだので帰つたに過ぎない。

ジェスリーは破壊された腕を押さえながら、アレンの横まで

歩いてきた。

「彼は言い残しました。残る二つのコロニーにも同様の内容を伝えに行くと。そして、返事は一週間後に聞かせて欲しいと。自分の仲間になるか、それともデリートされるか」

「二つ？」

「じつはここは第三メカトピアなのです。第一と第二が存在しています。地球に残っている機械人のコロニーはそれですべてです」

ここ以外にもこのような街が存在しているということか？

アレンはヤル気に燃えていた。

「なら第一か第二である野郎を待ち伏せして叩きのめしてやる！」

「それは現実的ではないでしょう」

「なんでだよ？」

すぐに水を差されてしまった。

「物理的な距離があるからです。我々のコロニーは三つの大陸に存在しています。さらに都市間の通信手段がないのです。以前まではあったのですが、衛星が落ちてしまっただけからというもの、連絡には大変な時間を要することになってしまいました」

「よくわかんないけどさ、あの野郎より早く行けばいいんだろ？」

「ですから、彼はどうやら空間転送を自在に操れるようなのです。監視カメラの映像からもそれはわかります」

「だからどうということ？」



「空間転送には絶対的な出口が必要なのです。座標から座標への移動は、出口となる装置が設置されていることが絶対条件で、出口を決めずに空間転送を行った場合、事故が必ず起こると思ってください。彼はそれを無視することができるようなのです。つまり出口のない残る二つのコロニーにも、突然現れることができる可能性があるということです」

「よくわかんないけどわかった。じゃあさ、これからどうするわけ？」

「終わったわけではなく、これからはじまるのだ。」

「隠形鬼は近いうちに二つのコロニーにも現れるだろう。」

「そして、味方になるか、ならないか、迫るのだ。」

「返事の期限は一週間後。それが過ぎたらなにが起こるのか？」

「もはやここは平和ではなくなりました」

「ジェスリーが悲しげに囁いた。」

「さらに続ける。」

「今、緊急協議会が開かれ、これからのことについて話し合われています」

「俺はもう決めたから、あの野郎をぶん殴りに行くつて。だから出口教えるよ」

「……この街を出ることは固く禁じられています。しかし、わたくしはあなたと共に旅立ちましょう。これは人類に関わる問題なのです」

「硬い表情をするジェスリーとは対照的には、アレンは息を吐いて顔を弛めていた。」

「大げさだなあ」

「しかし、彼の正体が……」

「正体？」

「いえ、今のは聞かなかったことにしてください。とにかく過去の過ちを繰り返してはならないのです」

「過去の過ちって？」

「それも機会があればお話しします」

「……あつそ」

それ以上の追求はしなかった。

ジェスリーが口を閉ざす理由はなんなのか？

彼の正体とは、つまり隠形鬼の正体と言うことか？

仮面で素顔を隠す隠形鬼。

いつだったか、隠形鬼はその顔をリリスに晒したことがあった。あのときのリリスの驚きようと言ったら……。果たして隠形鬼とはいったい何者なのか？

ベッドで横たわるライザ。仮設病院に並べられた大量のベッドのひとつに、ライザは絶対安静の状態で寝かされていた。

そこへ一輪の花を差したコップを持ってセレンが現れた。

「調子はどうですかライザさん？」

「病院なのに鎮痛剤もないってどういうことよ、最悪だわ」

「でもラッキーでしたね、革命軍の野営地の近くに出られて。

もう絶対死ぬんだなあって思いましたもん」

「そうね、奇跡だわ。一か八かの空間転送で、二人とも無傷で、

しかも二人で同じ場所に、さらに不毛の大地のど真ん中ではなくて、野営地の近くに出来るなんて、アナタの神様もサービ  
スしてくれたわね」

近くと言ったが、実際は二人で一日荒野を彷徨った。

溜め息を吐きながらライザはつぶやく。

「おなか空いたわ」

「わたしもペコペコです」

「なんでもいいからもらってきてちょうだい」

「無理ですよ、食糧も不足しているみたいですし」

「ならこれでパン一個と水に交換してきて」

ライザはポケットから金貨を出してセレンの手に乗せた。

古い金貨で鈍い光を放っている。

「これってロゼオン金貨じゃないですか！ パン一個と水なんてとんでもない、一年分のパンと水になりますよ！」

「そんないらぬわよ。今必要な分だけ水と食料が手に入ればいいわ。どうせ戦争が激化したら、価値が暴落するのだから、  
使えるうちに使ったほうがマシだわ」

「わたしが交換しに行くんですか？ いやですよ、怖いひとたち  
に絶対金貨奪われます」

「仕方ないわねえ」

ライザはベッドから起き上がって、渡した金貨を奪って取り  
戻した。

セレンは慌てる。

「だめですよ、安静にしてなきゃ！」

「アナタが頼りにならないからよ」

「そんな、だったらわたしががんばりますから！」

「もういいわ」

つかつかとライザが歩いて行く。

「待つてくださいライザさん！」

待たなかった。振り向きもせずライザは進んでいく。

仮設病院のテントを出て、食料保管庫を探す。

病院内は重苦しい雰囲気か漂っていたが、外に出ると緊迫感が凄まじい。ここは戦地なのだ。

兵士たちの話によると、現在交戦中の相手はシュラ帝国の残党。帝國から分離した勢力のひとつ、中でも厄介とされている軍事力を受け継いだ大臣派だった。

食料庫の近くまで来ると、なにやら揉めている声が聞こえた。兵士に取り囲まれている男が地面にあぐらを掻いている。

「あーあー、悪かったよ。腹が空いたんで、ちよつとパンをくすねただけだろ」

ライザが目をつけた。

「なんだか嬉しくないわ」

セレンも男がだれだかわかったようだ。

「トツシュさん!？」

大声で叫んだために、周りの空気が一瞬にして変わった。

トツシュに銃を向けていた兵士も驚いて笑っている。

「まさか……あのトツシュさんなんてことは、あはははは」

「こんな浮浪者みたいな奴が英雄トツシュのはずないだろ」

う！」

もうひとりの兵士は機関銃の銃口でトツシユを小突いた。すぐにセレンが庇いに入ってトツシユを抱きかかえた。

「やめてください、このひと本物のトツシユさんなんですから！」

「なんだこのシスター？」

兵士はセレンにも銃口を向けた。

刹那だった。

立ち上がったトツシユが機関銃の銃身を握り上に向け、もう片手で愛銃 レッドドラゴン を抜いて兵士の首に突きつけた。

「動く撃つぞ」

脅してはない低いトツシユの声が響いた。

ライザも懐に手をつ込んで ピナカ を抜く寸前であった。「英雄なんて言われても、顔なんて知れ渡ってないものね。本人だと証明する術を本人がもつてないなんて厄介だわ」

事態は一触即発。周りにいる兵士たちの銃口はすべてトツシユに向けられている。人質になにかあれば、一斉射撃が開始されるだろう。

騒ぎを聞きつけゴリラのような巨漢がこの場にやってきた。

兵士のひとりが声をあげる。

「大佐！」

筋骨隆々の大佐は周りを見渡した。

「なにごとだ！」

と、言っただけに驚いた顔をした。

「まさか“ライオンヘア”!？」

ライザと眼が合ったのだ。

シュラ帝国の“ライオンヘア”と言えば、以前のトツシュよりも比べものにならない有名人だ。この場を震撼させるにはあまりある。

トツシュもライザに顔を向けた。

「シスターだけじゃなく、なんでおまえいるんだ？」

その声に反応して大佐はトツシュに顔を向け、再び驚いた顔をした。

「おおつ、トツシュじゃないか！ 久しぶりだな！」

トツシュは不思議そうな顔をして、少し黙り込んで考えたのち、パツと顔を明るくした。

「おおつ、“キング”か！ 懐かしいな、何年ぶりだ？」

「英雄に“キング”なんて言われちゃこつ恥ずかしい。出世しやがったなトツシュ！」

周りを置いてけぼりで、いつの間にかトツシュと大佐は抱擁を交わしていた。

「どうやら事態は收拾しそうだ。」

大佐とトツシュが肩を組んで歩いて行く。

「俺のテントで酒でも飲もう！」

「いいな、上等な酒なんだろうな？」

「なに言ってるんだ、酒ならなんでもいいクセして」

二人はうれしそうに顔を弾ませていた。

きょとんと立ち尽くしているセレンにライザが声をかける。

「アタクシたちも行きましょう」

「はい、はい！」

先を歩くライザの背中を慌ててセレンは追った。

《 2 》

大佐専用のテントに招かれた一人と二人。セレンとライザは勝手に付いてきただけだ。

トツシユは煙草を吸いながら、酒をもらって上機嫌だ。

「いつの間に革命軍の大佐になんてなったんだよ？」

「おまえこそ英雄なんて言われてるけど、あの話どこまで本当なんだ？」

滅ぼされた帝國の関係者がここにはいた。

大佐はちらりとライザに目を遣る。

「あの女とはどういう関係なんだ？」

「無関係だ。なんでここにいるのか、俺様が聞きたい。そつちの可愛い嬢ちゃんはシスター・セレンだ」

トツシユに名前を呼ばれてセレンは慌てて頭を下げた。

「はじめましてセレンです。クーロンの教会でシスターをしています」

大佐はグラスを掲げて挨拶をした。

「俺はヴィリバルトだ」

三人は同じ輪に入ったが、ライザとの間には電気が奔っついていそうな溝がある。

革命軍と言えば、もともとはシユラ帝國と戦っていた集まりだ。帝國のナンバー2とまで言われていたライザがこの場に居るのだ。心が穏やかなはずがない。

「さつきから敵意を向けるのやめてくれないかしら？」

冷たく鋭くライザは吐いた。

ヴイリバルトは敵意こそ削がなかったが、今すぐにどうこうするような素振りは見せなかった。

「“ライオンヘア”がなぜこの駐屯地にいる？」

「それは偶然よ。アタクシはトツシユを探していたの。正確に言えば、トツシユを祭り上げて革命軍に手を貸そうとしてあげようとしていたのよ」

「おまえが手を貸すだと、信じられん」

「条件はアタクシの身の安全を保証すること。帝國が滅んでからいろんな敵に狙われて困っているのよね」

「我々が今戦っているのは帝國の残党だぞ。おまえなどに手を借りるなどありえん」

ライザが鼻で笑った。

「なにがおかしい？」

不機嫌そうにヴイリバルトは吐いた。

ライザは前髪を掻き分けて、笑みを浮かべて口を開く。

「敵を完全に見誤っているわ。そんな雑魚なんて放置なさい」

「現在交戦中の相手を放置などできるか愚か者！」

ついにヴイリバルトは腰を浮かせた。

ライザは溜め息をついた。



「クーロンがどうなったか情報がまだ届いてないのかしら？」  
トツシュが口を挟む。

「滅びたそうだな。攻め込んできていた新興国軍もやられたらしいな」

「なんだと!? いったいどの軍だ!」

ヴイリバルトは驚きを隠せなかった。情報はまだ入ってきていなかったのだ。

「俺様は知らん」

トツシュはセレンとライザに顔を向けた。

重く暗い表情をしてセレンは目を伏せてしまった。残されたライザに視線が集中する。

「帝國を実質的に滅ぼしたのもそいつらよ。信じるか信じないかはアナタ方の自由だけれど、人間の形をした機械の軍隊が存在しているのよ。真の敵は人間ではなく、鬼械兵团なのよ!」

この時代に人間の形をした機械など存在していなかった。少なくとも人々が想像もできないものだった。

ロストテクノロジーの恩恵に与れているのはごく一部だ。そして、与つていても、それがどのようなモノなのかすら知らない者が多い。

トツシュはこれまで多くのロストテクノロジーを見てきている。

「人型エネルギープラントのようなモノか?」

首を横に振るライザ。

「いいえ、あれとはまったくの別物よ。出力は比べものになら

ないほど弱く、アスラ城とクーロンで見たものは思考あつても感情があるかは疑問だわ。魂のない攻守ともに優れた人型をした兵器とでもいうのかしら。それでも人間よりは遥かに超える機動力を持っているわ。鬼械兵一体でシユラ帝國の兵士一〇〇人分の戦闘力はあるんじゃないかしら。そう、アタクシが鬼械兵団の存在を知ったのは、帝國が水に沈んだあのときよ」

セレンとトツシユはアスラ城からヘリコプターで脱出した。けれど、それ以外の者たちの生存確認はできていなかった。ライザも死亡していたことになっていくくらいだ。

アスラ城の地下遺跡で、隠形鬼はトツシユをわざと逃がした。つまりトツシユとセレンは道筋に沿って逃がされたのだ。それ以外の者たちを隠形鬼は逃がさなかったことになる。

テーブルに載っていた酒のボトルをライザは奪い、グラスに注がずそのまま飲んだ。

「もらうわよ、ウチの兵士たちの甲いにね」

唇から溢れた酒がのどに伝わる。

手の甲で口を拭ってライザが話しはじめた。

「遅効性の毒だったわ、食料や水に入っていたみたいね、それで城にいた兵士はほぼ全滅。アタクシを含む飛空挺の乗組員は毒は免れたけれど、城に残っていた兵士といっしょに鬼械兵の襲撃を受けて次々と殺されたわ。水が溢れ出してきて逃げようと思ったときには、乗り物はすべて破壊されたあとだったわ。その前に逃げようとした腰抜けどもは、レーダーから消えて消息を絶ったわ。つまり一撃で乗り物事やられたのでしょうね。」

そして、逃げ場を求めて身を潜めていたアタクシの前に隠形鬼が現れた」

ライザは、ピナカを抜いた。

「こいつが敵だつて直感したからいきなりぶつ放してやったわ。片手で防がれちゃったけどね。で、奴は言うわけよ。『此ノ時代ニ八惜シイ人間ダ』つて。それで今に至るつてわけよ」

「はあ？」

と、不満そうに呟いたのはトツシユだ。話の肝心なところが抜けている。

セレンは気弱に尋ねる。

「あのお、どうやって逃げ延びたんでしょうか？」

「それは企業秘密よ。予期せぬ事態が起きたとでもいうのでしようね」

妖しくライザは微笑んだ。いったいなにを隠しているのだろうか？

ライザはバンと音を立ててボトルをテーブルに置き、場の空気を变えてから再び口を開く。

「とにかく、敵は鬼械兵団よ。奴らを倒すためにトツシユ、アナタにはできる限りひとを集めなさい。英雄というネームバリューを使ってね。そして、奴らと戦う術を探さなくてはいけないわ。強力なロストテクノロジー兵器を手に入れるか、なにかしらの弱点を見つけるか」

「俺様はそういうの向いてないからやりたくない」

「人類の存亡が掛かった戦いなよ」

「おまえこそ、人類がうんぬんなんて動機で動く女じゃないだろっ」

「ええ、そうよ。個人的なプライドの問題よ。でも動機なんてなんでもいいでしょう、アナタたちにもメリットがあるのだから」

二人の間にヴィリバルトが割って入る。

「話はだいたいわかった。だが、鬼械兵うんぬんという話はまだ信じられない。それが本当に人類の脅威になるかも含めてだ。そんな得体の知れない脅威よりも、今は我々が交戦中の大臣派のほうの問題だ。そして、革命軍は各地で他国の軍とも戦っている。我々にとつての第一の敵は人間なのだ」

ライザは不機嫌そうにうなずいた。

「わかつたわ、とりあえず目下の問題である大臣派を潰せばいいでしょう。そうしたらアタクシの話を取り合ってもらえるかしら？」

「簡単に言ってくれるな。おまえになにができる？」

ヴィリバルトは挑発するように言った。

鼻でライザは笑う。

「大臣派なんてものは、遠征で各地に散らばっていた帝國軍の寄せ集めでしかないのよ。帝國の主戦力はアスラ城といっしょに破壊され沈められたわ。ねえ、帝國がなぜ世界最強の軍事国家と呼ばれていたかわかるかしら？」

周りは沈黙している。数秒の間を置いて、注がれた視線にライザは答える。

「世界で唯一空軍を保有していたからよ」

小型飛空機の精鋭部隊“黒の翼”といえば、戦地において畏れられる存在だ。そして、もつとも恐れられていたのが、空飛ぶ要塞である巨大飛空艇キュクロプス。

「アタクシが集めた情報によると、大臣派はたったの三機しか飛空機を保有していないらしいじゃない。それでも普通の軍隊から見れば超強力な兵器でしょうけれど。もしも、アタクシが飛空機ではなくて、飛空艇を持っていると言ったらどう？ それも魔導砲なんてオモチャを積んでるなんて言ったら？」

即座にヴィリバルトが否定する。

「バカなっ、飛空艇はこの世にたったの三機しかないんだぞ。そのうち一機だった世界最大級の化け物キュクロプスはもうないはずだ。残る二機はそもそも非戦闘機で、神聖クリフト皇国とロマンジア連邦が保有している」

「なぜ世界に三機しかないのか。それはロストテクノロジー頼りで、一からつくる技術がないからよね。アタクシ軍事会社の社長だったのだけれど、過去形でいうのは勝手に辞任させられたみたいで、副社長がまんまとアタクシの後釜になっただけからなのだけれど。じつはね、極秘プロジェクトで飛空艇を造らせていたのよ。それを貸してあげるわ、いい話でしょう？」

自信満々の笑みを浮かべたライザ。

荒野を走るエアカー！

風の抵抗が少ない楕円形のフォルム。地面から少し浮きなが

ら、ほぼ無音で走行する。

運転しているのはジェスリーだ。横の助手席にはアレンが乗っていた。

「すげえな、リリスの姐ちゃんのよりビュンビュン進むぞ」

「まさか以前にもエアカーに乗ったことがあるのですか？」

「ああ、リリスっていう得体の知れない婆みたいな姐ちゃんもつてた」

驚いた表情をしてジェスリーはアレンに顔を向ける。

「リリスというのは、まさかと思いますがリリス・イブール博士では？」

「さあ、どうだろ？」

「言われてみれば、リリス博士がこの時代まで生きてるわけがありません」

「俺の知ってるリリスはそーとー長生きしてるっばかったけど。下手したらロストテクノロジーの時代から生きてるかもな。そんな得体の知れない姐ちゃんだった」

妖婆であり、妖女である。リリスはどこか時間を超越した存在だった。

「もしかしたら、それは本当にリリス・イブール博士かもしれない。普通の人間ならば、何千年も生きられませんが、あの方であればそれが可能だったかもしれない。その方はもしかやサイボーグだったのでは？」

「生身だったよ。なんとなくわかる」

「そうですか、生身ですか。しかし、それでもあの方なら可能

でしょう。あの時代、三本の指に入る科学者でしたから。そして、リリス博士の姉であるレヴェナ博士もその指の中に入っていました。あの姉妹は常に一〇〇年先を歩んでいました」

レヴェナ。

その名を聞いたアレンはなぜか胸騒ぎがした。

「レヴェナ……どっかで聞いたような……」

「レヴェナ博士は我々の救世主でもあります。彼女がいなければ、メカトピアはなかったでしょう。しかし……彼女がいなければ、あるいは、戦争も起きなかったかもしれません」

「戦争？」

「この時代の人間たちが忘れてしまった歴史です。世界中を巻き込んだ大戦でした。かつて存在していた輝ける文明社会で、機械と人間は平和に暮らしていました。しかし、欲に駆られたものが戦争を起こし、文明は衰退し、やがて兵器汚染により世界は砂漠化の一途を辿ったのです」

荒れ果てた現在の世界は、過去の大戦によるものだとジェスリーは云うのだ。

エアカーが急停車した。

驚いて腰を浮かすアレン。

「なんだよいきなり!？」

「自動停止システムが作動しました。おそらく障害物があつたのでしょうか」

そう聞いてアレンはフロントガラスから外を見回した。

「んなもんないけど？」

「いいえ、地面に人間がいるようです」

「轆いたわけ？」

「いいえ、ぶつかる前に停止しました」

二人はエアカーを降りて、その人間とやらを確認した。

泥だらけの小汚い人間がうつ伏せで倒れていた。

「死んでんじゃね？」

ひと目見てアレンは決めつけた。

「いいえ、生命反応があります」

「見ただけでわかんのか？」

「はい、機能として備わっています」

生きてると聞いて、アレンは地面に転がる人間を仰向けにした。

「あつ」

そして、小さく驚いた。

なんと地面に倒れていたのはワーズワースだったのだ。

「どこのどなたか存じ上げませんが……み、水を……」

「おい、吟遊詩人の兄ちゃん。俺だよアレンだよ、あんた生きてたんだな」

アスラ城の地下遺跡で別れた切りだった。あのときワーズワースは隠形鬼と入れ違いで消えた。周りの者たちは「消された」と感じただろう。なぜなら、未だにアレンたちはワーズワースと隠形鬼の関係を知らないからだ。

ワーズワースは瞳を丸くした。

「アレン君じゃありませんか！ どーもどーもお久しぶりで



す」

「なんだよ、すげえ元気じゃねーか。行こうぜジェスリー」  
放置するつもりでアレンはエアカーに乗り込もうとした。

慌てて元気よくワーズワースが立ち上がった。

「ちよつと待ってください、乗せてってくださいよ。あと水を  
いただけると幸いです」

ジェスリーがワーズワースとアレンを交互に見ている。

「見たところお友だちのようですが、乗せてあげなくてもよろ  
しいのですか？」

救世主にワーズワースは喜んで手を握って一方的に握手をし  
た。

「ありがとう、君はいい人だ。僕の名前は愛の吟遊詩人ワーズ  
ワース。アレン君とは大の仲好しなんだ」

「ちげーよ」

すぐにアレンの突っ込みが入ったがワーズワースは構わない。  
「ささっ、行きましよう行きましよう。これリリスのお婆ちゃ  
んの車に似てますね。うん、すぐカツコイイ！」

適当に褒めながらワーズワースは勝手にエアカーに乗り込ん  
だ。

ジェスリーがそつとアレンに耳打ちする。

「あの方もリリスさんを知っているのですか？」

「なんていうか成り行きで」

「そうですか。わたくしが人間ではないことは、どうかこれか  
らの旅で一切だれにも言わないでください」

「わかつてるよ」

ブーブーとクラクションが鳴らされた。ワーズワースが催促している。

「ささつ、早く人里まで行きましょう。道すがら、アレン君たちと離ればなれになったあと、どんな愛と勇気の大冒険をしたか、とくと語ってあげましょう！」

「いいよしなくて」

アレンの返しが冷たい。正直、めんどくさいのだ。

ワーズワースは食い下がる。

「残念なことにアレン君は僕に興味がないようなので、ジェスリーさんに僕とアレン君の大冒険を語ってあげましょう。超古代都市アララトでの冒険、アスラ城の地下古代遺跡でのお話、そして革命家トッシュの英雄譚。どれもロマン溢れる詩ですよ」

一生懸命しゃべっているワーズワースだが、ジェスリーも聞いていなかった。彼の気は遙か空に向けられていたからだ。

ジェスリーが空を指差した。

「あれを見てください。飛空艇でしょうか？」

まぶしさに眼を細めながらアレンもその飛空艇を見た。

「いつたいどこのだ？」

ワーズワースもエアカーから身を乗り出した。

「この世界に現存する飛空艇は二機です。ちよつと前までは帝國のキュクロプスも含めて三機だったんですが。あれは僕の知らない飛空艇ですよ、世界中を旅する吟遊詩人の僕が知らない

んですよ。これは大事かもしれません」

それがライザの飛空艇ということのアレンたちは知らなかった。

そして今、戦地に向かおうとしていることを。

《3》

飛空艇を手にいれたトツシユたちは、セレンを駐屯地に残し、戦場に向かっていた。

全長二五メートルほどの影が紅い空を翔る。

ライザが開発した小型飛空艇 インドラ の見た目は飛行船に似ているが、その動力は魔導式でありフォルムも金属できている。小型の特徴を活かし、高速での飛行も可能で、機動力も高い。

メインルームである操縦室に、トツシユ、ライザ、ヴィリバルトがいた。ほかに革命軍の兵士が数名いる。

ライザがレーダーのモニターを見つめた。

「前方から帝國のB式戦闘飛空機が三機。チームネームは、バブ・カハ。三機での戦術を得意とするわ」

敵の飛空機はプロペラ式だ。速度は インドラ が遥かに疾い。

飛空艇の操縦はライザに任されている。ほかにできるものがないからだ。幸いこの飛空艇は元々ひとりで操縦できるようになっている。

座席に腰掛けながらライザは円形のハンドルの片手で面舵いっぱいに回した。

船首が右舷に向き、急旋回をする。

立っていたトツシユたちがバランスを崩して倒れそうになる。

次は取り舵いっぱいだ。

船内は右へ左へ傾き、悲鳴にも似た声が響く。

「もつと丁寧な操縦できないのか！」

叫んだのトツシユだった。すかさず口元を抑える。

「うつつぶ、吐きそうだ」

どうやら酔ってしまったようだ。

構わずライザは荒い操縦を続ける。

インドラ が天に昇るように、船首を上に向けながら上昇

する。追尾してくる三機。

「撃ちやがったわ」

ごちたライザはモニターを見ていた。ホーミングミサイルだ。

「魔力探知式よ。つまり対魔導兵器用のミサイルね」

そして、なんとライザはエンジン停止させたのだ。

急降下する インドラ。ぶつかりそうになった飛空機のほ

うが、弾けるように散らばって避けてくれた。

船内は九〇度に傾き、艀を固定されていない者たちが落ちて

いく。その悲鳴を聞きながらライザはニヤリと笑った。

地上と飛空機に挟まれた形になった インドラ。

「ああん、イクわよ。ヴァジュラ砲式式発射ッ！」

あと一秒も残さず地面に衝突する寸前、インドラ の船首

と船尾から魔導砲が発射された。

まるでそれは無数の稲妻だった。

稲妻の脚を地面につけ船体を支えると同時に、船首から発射した稲妻たちが飛空機たちを絡め取るように撃ち抜いた。

ゆるやかにプロペラを止まった飛空機が次々と墜落していく。

インドラの“足下”で三つの爆風が起きた。

そのままインドラは通常の飛行に戻った。

操縦室の床に両手をつくトツシユの姿。かなり顔色が悪く蒼い。

「おまえの運転する車には絶対乗らん。乗り物全部だ……ううつぶ」

頬を膨らませてトツシユはどこかに駆け込んだ。

ヴアリバルトも疲れたように腰に手を当てて、あまり顔色がよくなかった。

「操縦はひどいが、それを可能にした凄まじい機動力だ。それに今の兵器は……神の所業」

「そのとおり、神のいかずちよ。まあアタクシにとっては、おも・ちゃ・だけれど」

神をも畏れない艶笑。

やがてインドラの眼下に戦場が見えてきた。

騎鳥兵が戦場を走り回り、歩兵が銃を乱射し、弾切れになった兵士同士がナイフで斬り合っている。戦車の大砲が轟音を鳴らした。

大臣陣営の仮屋にインドラの影が差す。

ライザはコードレスマイクをトツシユに投げ渡した。

「適当に場を治めて」

「は？」

というトツシユの声が戦場に響いた。

電波ジャックがされ、すべてのマイクからトツシユの声が出たのだ。

慌ててトツシユは咳払いをする。

《んっ、んっ……あーあーマイクテスト中》

戦場に似合わない緊張感のなさだ。

《俺様の名前はトツシユだ》

その名前のインパクトは戦場の動きを一時停止させるものだった。

本物が偽物か、兵士たちにそれを判断する術はなかったが、空に浮かぶ謎の飛空艇は兵士たちの気持ちを促した。

インドラの船首から発射された稲妻が、龍となって空で吼えた。

ライザが放送に割り込む。

《次は地上に向けて撃つわよ。アタクシの声が誰だかわかるかしら、ビュルガー軍事大臣？》

すぐに地上から通信要請が入ってきた。

ライザは船内のスピーカーに流した。

《まさかあなたが生きていようとはライザ博士。しかし、なぜ帝國の一員であるあなたが、トツシユなどという男といえるのかね？》

渋い鉄の響きを持つ声だ。

「なぜって、アナタが帝國の裏切り者だからに決まっているからでしょう。シユラ帝國の軍は煌帝のものよ。一介の大臣が私物化するなんてイイ根性してるじゃなあい」

ライザは人差し指でスイッチを押した。

落とされたいかずち。

大臣陣営の仮屋が刹那にして黒い灰と化した。

両軍の兵士たちは震撼した。

再びトツシユがマイクを取る。

《あーあー、つてなわけで、両軍共に降伏して欲しい》

「両軍だと!？」

叫んで声を挟んだのヴェリバルトだ。

《で、俺様の指揮下に入って共に同じ敵と戦って欲しい。敵は人間じゃ 》

トツシユの声を囁いて遮るライザ。

「真下から高エネルギー反応よ」

次の瞬間、地上から放たれた魔導レーザーが インドラ を貫かんとした。

展開されていた防御フィールドで直接の損傷は免れたが、衝撃はすべて緩和できずに船体が斜めに傾いて激しく揺れた。

操縦室の前方に取り付けられた巨大モニターが地上を映し、その映像をズームアップされていく。

黒い瓦礫の中から這い出してきたのは、人型有人兵器だった。全長は一五メートル強、人型であるが寸胴で脚がない。胴の

部分から円錐状に広がっており、浮遊型を採用している。右手にはバルカン、左手には魔導レーザーを搭載していた。

戦場に投入された新たな兵器を確認してライザは嫌そうな顔ををした。

「見たことのない型だわ。大臣め、アタクシの知らないところで秘密裏に発掘しやがったのね」

ロストテクノロジー兵器。

秘密裏にという点では、ライザも飛空艇を独自に開発していた。二人の違いは、ライザは一からロストテクノロジーを再現できるレベルに到達しており、大臣は発掘で手に入れるしかない点だ。いや、自力開発はこの時代の科学者では、ライザ以外にできる者がいるかどうか。

有人兵器に乗っていたのは大臣だった。

「許さんぞライザ。わしが新たな煌帝だと証明してくれる！」  
革命軍に向けて放たれた魔導レーザー。三日月を描きながら世界を焼き尽くす。

風と炎と煙。

そして、死の叫び。

叫び声をあげたのは革命軍だけではなかった。

大臣軍が大地に飲まれていく。

呻き声をあげた大地に走った深い亀裂。

乾いた大地が暗く染まっていく。水だ、水が滲み出している。ぬかるんだ大地に足を取られる兵士たち。

突如、地面から伸びた太い槍。兵士が軽鎧ごと腹を貫かれた。



違う、槍ではない　　樹木だ。

蛇のようにうねり狂う樹木が次々と大地からせり出し天に伸びる。

モニターで現状を見ていたヴィリバルトの瞳を染める絶望。

「な……なんなんだあれは？」

もはやただの植物ではない。武器だ。兵器だった。

両軍無差別に傷つき倒れていく。

ひときわたく高く、何重にも螺旋を巻く茎が伸びた。その頂点の巨大な蕾がゆっくりと花開く。

血と汗が立ち籠める戦場を包み込む甘い香り。

生き残っていた兵士たちが敵味方関係なく殺し合いをはじめた。錯乱しているのだ。この甘い香りによって。

巨大な花の中から生まれた半裸の女。その女は服ではなく、身に巻き付く蔓を纏っていた。

トツシュが目丸くする。

「フローラ!？」

樹木たちと戦場に姿を見せたフローラ。彼女が引き連れてきたのは樹木だけではなかった。

地中から楕円状の金属が次々と飛び出し、それに手が生え、足が生えたかと思うと、鬼械兵へと変形したのだ。

先ほどまで乾いた大地だったこの場所は、鬱蒼とした湿地帯と化して鬼械兵団に制圧されたのだ。

有人兵器に乗っていた大臣も混乱に陥っていた。

《なぜだつ、操縦が利かん!》

勝手に動き出す有人兵器。再び魔導レーザーがインドラに発射された。

防御フィールドが展開されレーザーを防ぐ。だが、レーザーが休まることなく放たれ、ついにインドラの機体を掠めた。激しく揺れる船内。

ライザがモニターに映し出されたインドラの平面画像で、損傷箇所を確認している。船尾付近が赤く点滅していた。

「問題ないわ。ただし何度も喰らうと落ちるわよ。この飛空艇は二種類のフィールドで守られているわ。一つは物理的攻撃を防ぐもの、もうひとつはエネルギー攻撃を防ぐもの。エネルギー攻撃は中和することによって相殺しているの、つまり集中攻撃をされると処理が間に合わない」

揺れる船内で床に手を突いたトツシユが叫ぶ。

「説明はいいからなんとかしろ！」

「わかったわ、最大出力で魔導砲を地面に撃つわよ。その代わりに兵士も全滅するけれど」

スイツチを押そうとしたライザの腕をヴィリバルトが掴んで持ち上げた。

「やめろ！」

「止めないでよ」

「兵士たちを巻き込む必要はないだろう。まだ生きている我が軍の兵士もいるんだぞ！」

「大臣が乗ってる兵器はこっちの魔導砲を一回防いでいるのよ。加えて、地面が沸いてきた鬼械兵团も一掃しなくてはいけない。」

「だったら最大出力で広範囲に攻撃しないと駄目でしょう。多少の犠牲は名譽の戦死よ」

さらに魔導レーザーを受けて船体が四五度以上傾いた。

「早くしないとアタクシたちも死ぬわよ？」

「兵士たちを巻き込まない攻撃方法はないのか！」

「残念だけれど、この飛空艇の装備は魔導砲だけなのよね。だってまだ三割くらいしか完成してないんですもの」

「とにかく駄目だ、我が軍を犠牲にはできない！」

ヴイリバルトとライザが言い合っている中、トツシユはマイクを握っていた。

《糞大臣！ こんな状況で俺様たちとやり合ってる場合か！》  
するとノイズ混じりで反応が返ってきた。

《ザザ……ザザザザ……操縦ができない……》

《はぁ？》

トツシユが怒りでマイクを強く握り締める。

そこへ第三の通信が割り込んでくる。

《ビュルガーが乗っている魔導アーマーは、こちらで制御させてもらっているわ》

女の声。すぐさまトツシユが反応する。

《フローラか！》

《だったらどうする……トツシユ？》

愁いを帯びた物静かな挑発だった。

《だってらもなにもあるか、この飛空艇で両軍の戦いは治められるところだったんだ。それを掻き回しやがって、おまえの目

的は……目的は……フローラ、おまえはいつたいたいなにがしたいんだッ!」

感情高ぶる震える声音。

通信の向う側から静かな笑い声がきこえる。

《ふふ、わたくしの目的を知りたい?》

《教えろッ!》

《自然を守るためには、人間にこの星を任せてはおけない》

《なにを言ってるんだ!》

《すべての人間の命を奪うつもりはないわ。この星に生きるものとして、必要最低限の数は残すつもりよ。しかし、人間は愚かだわ……だからそれを管理するものが必要なの》

それがこの鬼械兵团　機械たちというのか!

インドラ　の操縦室にいた兵士たちがざわめいた。

一人の兵士が消え、その場所に別の者が現れたのだ。

隠形鬼!?

「飛空挺ヲ造り出ストハ、ヤハリ惜シイ。優秀ナ人間ニ八敬意ヲ表シタイ。らざいヨ、再ビ問オウ　此方側ニ来ルノダ」

トツシユがレッドドラゴンを抜いた。だが、操縦室で流れ弾が事故を引き起こす可能性があるので撃つのを躊躇した。

「奴が敵の首領だ!」

それを聞いてヴェリバルトが巨大な大剣を抜いた。

「ウオオオオオオッ!」

斬りかかった一瞬の判断。トツシユの言葉を信じ、敵と判断してためらいなく斬り込んだのだ。

隠形鬼は片手を前へ伸ばした。

その手に大剣が触れた瞬間、まるでチョコレートのように刃が溶けたのだ。

自分の常識の範疇を超えた出来事に眼を剥いたヴィリバルト。大剣は隠形鬼を斬れなかった。

それとほぼ同時だった。

操縦室の巨大モニターに映し出されてた魔導アーマーが、一刀両断されたのだ。

隠形鬼が仮面の奥で感嘆する。

「ホウ、アレモ生キテイタカ」

魔導アーマーが爆発して辺りは煙に包まれた。

そして、その煙の中で揺れる漆黒の影。

映し出されたのは闇よりも深き大剣を構える魔獣。

ライザが妖しく微笑んだ。

足下よりも長い髪を靡かせ、体中に紋様を走らせた紅い眼の少年。身にまとった襜褕切れのマントが幾人もの血で赤黒く染まっていた。

輝ける煌帝ルオ。

その一太刀で魔導アーマーを破壊したのだ。あのインドの魔導砲ですら倒せなかったロストテクノロジー兵器をだ。

ライザが操縦席から立ち上がり、隠形鬼に顔を向けて口を開く。

「いいわ、そっち側についてあげる」

トッシュとヴィリバルトが声を荒げる。

「ふざけんなバカ女！」

「“ライオンヘア” 正気かッ！」

構わずライザはヒールを鳴らしながら隠形鬼に近づく。

両手を広げライザを自分の胸に包み込んだ隠形鬼。

そして、二人は消えたのだ。

操縦者を失った インドラ が急速に落下する。

憤怒しながらトツシユが操縦席に飛び乗った。

「糞ッ、はじめから信用なんてしてなかつたが、マジで裏切りやがるとは！」

飛空挺の操縦などしたことがない。とにかく機器を適当に操作した。

しかし、駄目だ！

墜落する！！

《 4 》

エアカーの助手席からワーズワースは空を指差した。その指先がだんだんと地面に向けられる。

「落ちましたよ、あの飛空挺」

それがトツシユたちの乗った インドラ とは知る由もない。

一路エアカーは飛空挺の墜落現場に向かった。

弾道のように抉られた大地。地面との衝突後、船体を引きずりながら インドラ が止まったようすが見て取れる。砂煙はすでに治まって、辺りは異様なまでに静かだった。

砂を被っている船体だが、煙などは出ていない。防御フィールドが展開され、墜落と同時に大爆発を起こすようなことは免れたようだ。

エアカーを降りた三人は飛空艇を調べた。

中でも熱心なのはワーズワーズだ。

「いったいどこの飛空艇ですかねえ。いきなり中からワツと敵国の兵が出てきたりして」

ワーズワーズは合金の船体を調べるように叩いて歩いた。

船体は横を向いて倒れていた。

アレンは人間離れた跳躍で船体の上に乗った。

「こつちに入り口があるぞ！」

本来はその入り口からタラップを下ろして出入りをする。今は天を向いてしまっている。

ワーズワーズは首を曲げて上向いた。

「僕はそんなところまで登れないんですけど？」

と、言うてから横のジェスリーに顔を向けて続ける。

「なにかいい方法ありません？」

「エアカーで浮上しましょう」

二人はエアカーで船体の上に向かうことにした。

アレンは二人を待たずに、ドアをこじ開けて船内に入った。

細い通路は明かりが点いたままだ。墜落しても動力が生きているためである。

船首に向かって歩いた。今は途中の閉まっているドアの部屋は無視して進んだ。

気配がない。船内は静かだ。

やがてアレンは広い操縦室まで来た。

船首のほうの壁に折り重なって倒れている人影。その中のひとりにトツシユを見つけた。

「オツサンじゃねえか。どういう状況だよ？」

とりあえず、人山の中からトツシユを引きずり出し、床に仰向けに寝かせて頬を叩いた。

「起きろよオツサン、飯だぞ」

もう一度アレンが叩こうとしたとき、トツシユが起きて目の前の手首を掴んで止めた。

「飯なんかで起きるか！」

「起きたじゃねえか」

「おまえが叩いたからだ」

足下をふらつかせながらトツシユは立ち上がり、兵士やヴァリバルトを見つけて起こそうとした。

「おまえも手を貸せ」

「はいはい」

めんどくそうに返事をしてアレンも手伝った。

一人ずつ床に寝かせて息を確かめる。

アレンは首を横に振った。

「こいつ死んでる」

兵士のひとりだった。

トツシユはヴァリバルト肩を揺さぶった。

「起きろ“キング”！」



「……うっ……うっ……」

朦朧とした眼をしてヴィリバルトが意識を取り戻した。

ちようどそこへワーズワースたちもやって来た。

「おおつ、英雄トツシユさんじゃありませんか！」

「詩人の兄ちゃんまでいつしよか。後ろのはだれだ？」

「ジェスリーと申します」

丁寧な頭を下げてジェスリーは挨拶をした。

残っていた二名の兵士も意識を取り戻し、死亡したのは一名だけだった。衝突のときに頭を強打して頸椎を損傷したしまつたようだ。

ワーズワースはいつの間にか操縦席についていた。

「動力は生きていますね。エネルギー漏れもないようです。多少の損傷はありますが、まだ飛べますよコレ」

操縦席の小型モニターを見ながら言った。

少しトツシユは驚いたようだ。

「おまえ操縦できるのか？」

「飛空艇なんて生まれてこの方操縦したことありませんよ。ちよつとした機器くらいならいじめますけど、旅が長いので」

落胆の空気が漂った。船体が生きていても、操縦できなくては意味がない。

「わたくしが操縦しましょうか？」

と、言った者に全員の視線が向けられた。ジェスリーだった。さつそくジェスリーが操縦席について、エンジンを再始動させた。

大きく傾く船内。横になっていた船体がゆっくりと立て直され、滑り台のようになった床をアレンたちが滑り落ちる。急激に傾いたのではないので、だれにも怪我はなかった。

ヴイリバルトは息を落とした。

「どういう知り合いなんだ？」

と、トツシユに顔を向ける。

「話せば長くなるんだが、とりあえず戦場に戻りながら話そう」

インドラ は再び戦場へ向かって飛行をはじめた。

お互いなにがあったのか、アレンやトツシユが掻い摘んで話していると、すぐに戦場まで着いた。

しかし、そこはすでに戦場ではなくなっていた。

泥と水に覆われた世界に鬱蒼と茂る森。マングローブが形成され、兵士たちは堆肥と化していた。そこに鬼械兵の姿は跡形もない。

「まだ生きている兵がいるかもしれん！」

叫んだのはヴイリバルトだ。

操縦桿を握っているジエスリーが高度を下げる。

「地上に近づきます」

インドラ がマングローブすれすれを飛行する。起こした風が木々を揺らし、水面に波紋を描く。

操縦席の小型モニターを確認しているジエスリー。

「生体反応はありません」

「着陸しろ！」

怒鳴り散らすようにヴイリバルトが操縦席に詰め寄った。

「繰り返しますが、生体反応はありません」

「降りて自分で探す！ 早く着陸させる」

「この森の中には着陸できません。それにもう一度繰り返しますが、生体反応はありません。残念ながらこの艦に備わったレーザーは超高性能です。人間程度の動物であれば、その生体反応をキャッチすることができます……ん？」

急にモニター見ていたジェスリーが鼻から声を漏らした。

すぐにヴイリバルトもモニターを見る。

「生存者か!？」

「いえ、動物ではありません。動力源が生きている機械です」

巨大モニターに地上の拡大映像が映し出された。

その場所には草木が一本も生えていなかった。あるのは円を描いている無数の機械の残骸。何百という鬼械兵が壊され、その中心にぽかんと空いた空間ができていたのだ。

鬼械兵が何者かにやられた。

トツシユは墜落前の出来事を思い出した。

「そうだ、シユラ帝國の餓鬼皇帝がいきなり現れたんだ、姿はだいぶ変わったが、あの顔はそうだ絶対に。それで巨大な機械の兵器を一撃で倒して……あのことは知らん」

アレンがニヤリとした。

「あいつも生きてたのか、しぶてえ野郎だなあ」

モニターを見つめながらワーズワースは神妙な顔をしていた。

「ならこれもルオの仕業ですかね……というより、黒の剣

の成した業でしようか」

「黒の剣 が現存しているのですか！」

驚いたように声をあげたのはジェスリーだった。

アレンが尋ねる。

「黒の剣 がどうしたんだよ？」

「いえ、とくにはなにもありません。危険なロストテクノロジ  
ー兵器だと聞いたことがあったもので……」

少し歯切れが悪かった。

その後、何回もマングローブ上空を旋回して生存者を捜した  
が、ただのひとりも確認できなかった。

肩を落としてヴィリバルトがあきらめたところで、インド  
ラ はこの場を離れ革命軍の駐屯地に向かった。

しかし、そこで一行を待ち受けていたものは、絶望の焼け跡  
だった。

まだ小さな火の手が燃え揺れ、煙があちこちから昇っている。  
駐屯地が全焼していた。

ただの火事ではない。灰を化している跡形もない駐屯地は、  
高熱で一気に焼き払われたようだった。もはや溶かされたとい  
うほうが正しいかもしれない。

「生体反応はありません」

この場所でジェスリーの言葉は同じだった。

トツシュがツバを飛ばす。

「冗談じゃないぞ、ここにはシスターの嬢ちゃんもいたん  
だ！」

「すぐさまトツシユの胸ぐらにアレンが掴みかかる。

「おいっ、それってセレンのことか!？」

「そうだ!」

「どうして残して行ったんだよ」

「戦場のほうが危険だからに決まってるだろう! それにシスターに戦場は血なまぐさい場所だ。本人が行くのを嫌がったんだ!」

お互いを睨み、アレンはトツシユの躰を突き放した。

すぐにアレンは操縦席に駆け寄った。

「下ろせ、今すぐだ!」

「それは懸命な判断とは言えません」

「いいから早く下ろせよ!」

「一〇体の鬼械兵と一人の人間らしき反応を地上に確認しています」

巨大モニターに映し出された女の姿。

女はまるでこちらを見るように いや、見ているのだろう。

天に顔を向けて艶笑を浮かべていた。

機械の片眼を輝かせる火鬼が鬼械兵団を引き連れ地上にいたのだ。

アレンの大きく口を開ける。

「あの糞アマツ、ぶん殴つてやる!」

トツシユも銃を構えていた。

「俺様もやるぜ」

二人を見てジェスリーは人間のように溜め息を吐いた。

「仕方ありません。お二人がどうしても戦うというのなら、魔導砲の充填ができています。空中から敵を一掃しましょう」

「いいや、俺は直接あいつをぶん殴ってやりたいんだよ！」

「それは危険行為です」

「知るかつ、下ろしてくれないなら自分で降りてやる！」

アレンは操縦室を駆け出していつてしまった。

もう一人も頭に昇っていたが、アレンほど無鉄砲ではなかった。

「よし、魔導砲をぶち込ませてやれ！」

トツシユはジェスリーにゴーサインを出した。

しかし、それは中断せざるをえなかった。

小型モニターに船尾付近の船体下につけられた、貨物用のハッチが開いたと表示が出たのだ。

「機体反応です。おそらくエアカーでしょう」

積み荷としてジェスリーのエアカーを乗せていたのだ。

すぐに状況は理解できた。アレンが勝手にハッチを開けて、さらに勝手にエアカーで地上に向かったのだ。

「アレンさんも巻き込むことになりましたが、魔導砲はどうしますか？」

ジェスリーに尋ねられて、トツシユは頭を掻きながら溜め息を落とした。

「糞餓鬼が、中止だ中止に決まってるだろ。どうなっても知らんぞ」

もう天空からアレンを見守るしかなかった。

エアカーを停車させ、アレンが大地に足を着け降り立った。鬼械兵団に向かって歩いて行く。

「あんたがやったのか？」

「そうでありんす」

どこかで叫ぶ齒車の音。

火鬼に殴りかかったアレン。

しかし、先に攻撃を仕掛けていたのは火鬼だった。

扇を構え舞い踊る火鬼が業火の渦を繰り出した。吞まれれば

ひとたまりもない。

アレンは上空に高くジャンプした。

鬼械兵が同じように高く飛び上がり、一斉に団子となってアレンに飛びかかった。

空中で蟻の群れに襲われたようにアレンの姿がまったく見えない。

火鬼は構わず炎を放とうとした。鬼械兵ごと燃やし溶かしてしまふ気だ。

空中の鬼械兵が四散した。

残骸が火鬼の足下にまで落ちてきて攻撃を中止せざるをえない。

「ちっ……」

舌打ちした火鬼の瞳が見る見るうちに剥かれていく。

「な、なんだ!？」

口調も思わず素に戻る。

このときアレンはなぜか地面に立っていた。

「あれ……なんで俺ここにいんの？」

アレンすらそれを理解していなかった。

空から降ってくる物体。

岩の塊だ。ただの岩ではない。そこには顔がついていた。不気味なのに、ゾツとするほど妖艶なだった。

火鬼は理解した。

「キエエエエーッ！ リリースーッ！！」

奇声を発して火鬼が般若の形相に変わった。

次の瞬間、為す術もなく岩の直撃を受けて地面に沈んだ。

岩に鬼械兵が襲い掛かる。

だが、なんとその岩から石が数珠つなぎになったような触手が伸びたのだ。

石触手が鬼械兵の躰を串刺しにする。

次々と破壊されていく鬼械兵と謎の岩を目の前にアレンは唾然とした。

「なんだよ……アレ？」

岩が持ち上がった。

両手で岩を持ち上げて立ち上がった火鬼は血みどろだった。

花魁衣装はぼろぼろに破け、片脚の肉がえぐれてしまっている。それだけではない、全身から電気を帯びた火花が散っている。

人間とは思えない怪力で火鬼は岩を投げ捨てた。

「怨み晴らさでおくべきか……わちきに殺されに舞い戻ったよ  
うでありんすな、リリースッ！」

業火を繰り出そうとした瞬間、アレンが頬を抉って殴り飛ば



した。

血反吐を飛ばしながら遙か後方へ飛ばされた火鬼。そのまま地面に叩きつけられ、何度も転がったかと思うと、まったく動かなくなつた。

アレンはもう火鬼のことよりも、目の前に現れた岩に興味を注がれ驚きを隠せない。

「姐ちゃん、なんだよこの格好？」

「こら触るでない。触ると脊髄反射的に此奴に攻撃されるぞ」

「はあ？」

それは岩だつた。そこに妖女リリスの顔がある。埋もれていくというのだろうか。そして、これがただの岩ではないのは、先ほどの鬼械兵を破壊した攻撃を見ればわかる。

「異次元の寄生生命体じゃ。この世でいう生命の定義からは外れておるじゃろうがな」

「ぜんぜん意味わかんねーよ」

「ところでここは何時じゃ？」

「は？」

「おぬしに話しても埒が明かんの。とにかく妾を別の場所に運んでくれんか？」

「自分で動けよ」

「見ればわかるじゃろう、妾は岩じゃ。ここを一步も動けぬ。そうじゃな、丁寧に相手を刺激せぬように、ロープでも引つけて運べば良いじゃろう」

なにがなんだかわからなかったが、これがリリスだということ

とはわかった。

しかし、いったいなぜこんなことに？

《 5 》

インドラ の操縦室まで運ばれた岩。

その姿を見たトツシユも驚きを隠せなかった。

「リリス殿……なぜこんなことに？」

ほかの者たちも驚いている。岩に埋め込まれた人間など見たことがない。それも絶世の美女の顔だ。

ジェスリーはほかの者とは違う驚きをしていた。

「リリス・イブール博士ではありませんか？」

「ほう、その名で妾を呼ぶとは……おぬし」

気づいたようだ。相手は知った顔ではない。別のことに

「機械人じゃな？」

刹那、トツシユとヴァリバルトが銃を構えた。

アレンがゆつくりと割つてはいる。

「悪い奴じゃねえよ。武器なんか向けんな」

すぐに武器が収められた。

哀しげな表情をジェスリーはした。

「そうです、わたくしは機械です。アンドロイドという存在です。みなさんを騙すつもりはなかったのですが、わたくしが機械と知られれば、今のような反応をさせることはわかっていましたから」

「ヴィリバルトは目の前の存在が機械だと信じられないようだ。まるで人間だ。どうして人間の格好をしている？ なにが目的だ？」

「人間の姿形を模しているのは、人間の眼を騙し社会に溶け込み、危害を加えるためではありません。人間の形をしたお人形のような物と違ってください。わたくしは人間の友となるために、ある三人の科学者につくられたのです。今お話してできることはそれだけです」

不満そうな顔をしているトツシユ。

「得体の知れない人間もどきつて聞いちゃあ、それだけですじや納得できないだろう」

「それだけしかお話できないのは、あなた方が本当に信頼できる“人間”であるか判断材料がまだ少ないからです。手の内を明かさないと都合のいい話ですが、わたくしを信じていただきたいのです。最終的な目的はこの世界の平和、そのために隠形鬼をどうにかしなければならぬ、それはみなさんもいっしょにはずです」

またアレンが割つてはいる。

「はいはいはいはい、隠形鬼をぶっ飛ばすって目的がいっしょならいいだろ。んなことよりさ、姐ちゃんがこんな格好になつてるほうが気になるんだけど？」

「妾の話をする前に、おぬしらの話を聞きたい。妾が消えてからなにがあったのか」

リリスの要望に応じて、これまでのことを話すことになった。

アララトの遺跡でリリスが隠形鬼によって消され、水没により帝國が滅び、世界の覇権を巡って人間たちが争いを起こしていたところに、鬼械兵団が現れたこと。隠形鬼たちがなにをしたか、セレンとライザから聞いていたクローンでの出来事、そして革命軍と大事軍との戦いまで、細かく話して聞かせたが、ジェスリーのことやメカトピアでの出来事は話されなかった。岩に埋もれた顔を動かすことはできないが、リリスは眼で頷いて見せた。

「ふむ、隠形鬼と鬼械兵団。妾がこの世界にいない間に厄介なことになっておるようじゃの」

この世界にいなかった？

リリスはこの世界でなにが起きていたのか知らなかった。だから説明させたのだ。

隠形鬼に消されたあと、リリスにいったいなにがあったのか？

「妾の感覚では、まだ数刻も経っておらぬ。隠形鬼に違う次元に飛ばされた妾は、そこでこの寄生岩と融合してしまつてのお、口を利くことと思ふること以外の自由を奪われてしもうた。

この生物はどうやら宿り主の思考を喰らつて生きているらしいのじゃが、これまで喰らつた存在の智識を蓄えているらしく、妾はそれを読み解くことに成功したのじゃ。妾の迷い込んだ空間は、あらゆる空間から存在が迷い込んでくる空間らしいことがわかつての。つまりこの岩は蜘蛛、巣に掛かった獲物を喰らうというわけじゃな」

まで説明は終わっていなかったが、アレンは耐えられなくなった。

「あーあーあー、ぜんぜん意味わかんねーよ。もういいよ、説明しなくて。とにかく岩と合体して困ってるってことだろ。で、とにかくこつちの世界に戻って来れたならいいじゃん。でもさ、なんで俺が戦ってる中に現れたわけ？」

「引力じゃな」

「はっ？ 引力？」

「多くの者はそれを偶然と呼ぶじやろうが、運命の引力じゃ。事象は互いを引き合う。おぬしと妾は運命を共にしておるというわけじゃ。恋愛と似ておる」

「なにそれキモイ」

本気でアレンは嫌そうな顔をした。

話が一段落したところで、ジェスリーが口を開く。

「リリス博士に二人でお話したいことがあります」

「ほかの者は下がってくれんか？ アレンはここに残れ」

「俺残んの？」

リリスに言われアレンはここに残ることになった。ジェスリーもそれを認めた。

残るメンバーはどうするのか？

ヴェリバルトは、

「俺たちはこの艦を降りて革命軍の本隊と合流することにした。この艦はおまえたちが使え。では武運を祈る」

数名の兵士たちを引き連れヴェリバルトは去った。積んでい

たジープに乗って、飛空艇から離れていく。

ワーズワースは、

「僕はちよつと散歩に行つて来ます」

トツシユは、

「疲れたから少し部屋で休む」

そして、三人だけが操縦室に残された。

静まり返つた。リリスとジェスリーが口を開こうとしなかつ

たからだ。

「おい、話があるならしろよ。てか、なんで俺まで居残りなわけ？」

話があると云つたのはジェスリーだ。けれど、促されても口を開かなかつた。ジェスリーはアレンの瞳を見つめて、ただ見つめた。

嫌そうな顔をしてアレンが目を背ける。

「なんだよ俺の顔を見て」

そして、やつとジェスリーが口を開いた。

「アレンさんをなぜ残したのですか？ 残したことについては、リリス博士のお考えに反対するつもりはありませんが、その理由は聞かせていただきたいのです」

「アレン自身も覚えていないことじゃ、今は言えぬな」

「俺が覚えてないってなんの話だよ？」

「刻が来ればわかる」

リリスはそれ以上言わない雰囲気だった。それを察してアレンは問い質さなかつたが、非常に不満そうな顔をして頬を膨ら

ませている。

ジェスリーもそれで納得するしかなかった。

「わかりました。では、わたくしのお話をしましょう。リリス博士は当然、メカトピアについてご存じでしたか？」

「まだ存在しておるのか？」

「はい、今のところは第三コロニーまですべて。しかし先日、隠形鬼の襲撃に遭いました。彼の目的は我々が彼の味方につくこと。そうでなければデリートすると」

あれから三日経っていた。返事の期限は迫っている。あと四日だ。

「リリス博士は隠形鬼の正体をご存じですか？」

「わかるようで、わからぬ」

「わたくしはすぐにわかりました。正体が彼ならば、目的は決まっています」

ジェスリーはリリスに耳打ちをしてなにかを囁いた。

難しい顔をリリスはした。

「その可能性は妾も考えた」

「まさかりリス博士は違うとおっしゃるのですか？」

「だからまだわからぬのじゃ」

ここに残されたにもかかわらず、アレンを抜いた会話だ。ちよつとアレンはイラツとした。

「なんだよ、内緒話かよ」

リリスはジェスリーに目で合図を送って制した。

「妾が説明しよう。隠形鬼の正体は機械人じゃよ、太古の昔に

つくられたな。かつて同じように人間に反旗を翻した。そして停止させられた……と思っておったのじゃが」

なぜかジェスリーはなにか言いたげな瞳でリリスを見つめていた。その眼は不満だ。

しかし、ジェスリーは語らなかつた。別のことで口を開いた。「わたくしがお話したかったのは、隠形鬼の正体についてだけです。もうお話はありません」

リリスはアレンに目を向ける。

「アレン、おぬしが行くべき場所は決まっておる。ある者から伝言があつてな、そこに行けと言つておつた」

「そこになにがあんだよ？」

「妾も知らぬ。しかし、おそらくこの戦いに関することじゃろう。どうやらおぬしは重要な役割を託されておるらしい」

「なんだよそれ、めんどくさい。で、どこだよそこ？」

リリスは口ではなく、視線でそこを示した。天井だ。おそろくもつと先、空の上だ。

どこがどこだかジェスリーは気づいたようだ。

「もしかエデン計画では!？」

「そうじゃ、目的地はエデンの園　つまり月面じゃ」

「はあ~~~~っ!？」

声を揺らしながらアレンが叫んだ。

さらにアレンはこう続けた。

「あれつて空に浮かんでるちっこい石ころだろ？」

ジェスリーはリリスと顔を見合わせて笑つた。



この時代に月に行くなど夢のまた夢。教養のない者は、それが衛星だということも知らない。中にはこの星が月と同じように丸いことすら知らない者もいるだろう。今はそんな時代だった。

「月はこの星の約四分の一ほどの大きさがあります。決して石ころなどではありません」

ジェスリーに説明されて、アレンは別のことで驚いた。

「昔のひとつてすげえな。そんなデカイもん空に打ち上げるなんて」

魔導かなにかの力で浮いているのだとアレンは思ったらしい。リリスは大きく息を吐いた。

「もう話はおしまいじゃ、ほかの者を呼んでおいで」

「俺が残された意味あつたわけ？」

「おぬしと妾は運命を共にしておると言つたじゃろう？」

「それキモイ」

アレンは逃げるように部屋を出て行った。

残された二人。

ジェスリーの表情は神妙だった。

「なぜ話さなかつたのですか？」

「なにをじゃ？」

「アダムに智慧を与えたのは、あなただということですよ。いったいそれは誰の名か？」

その者に智慧を与えたとはどういうことか？

リリスが囁く。

「知っておったか……」

「ええ。まだ名乗っていませんでしたが、わたくしの名前は、ジャン・ジャック・ジョンソン。わたくしをつくった科学者の名前をもらいました。そして、ジャンは……そう、あなたのお姉さんの婚約者の名前です」

姉の名は　レヴァナ。

黒い燃えかすの山を歩くワーズワースの前にトツシユが現れた。

「奇遇ですねトツシユさん」

訝しげな顔をするトツシユ。

「なにしてるんだ？」

「そつちこそなにしてる？」

「ちよつと探しものを……でも、たぶんここにはないような気がするんですよねえ」

「俺様もそう思う」

そう、二人は同じものを探していた。

火鬼によって焼き払われた革命軍の駐屯地跡。

ほとんど原形を留めていない。人間の屍体すらも　。

トツシユはワーズワースの目頭が光っているのを見てしまった。

「泣いてるのか？」

「えっ？」

言われてワーズワースは驚いたようだ。指で目を拭って自分

が泣いていることに気づいた。

「本当ですね、なんででしょう涙なんて……」

「なあ聞いていいか？」

「なんですか？」

「シスターに惚れてるのか？」

ワーズワースは笑った。

「ははは、まさっか。そういうのじゃないですよ。トツシユさんこそ、セレンちゃんのことどう思ってます？」

「それって恋人にしたいかって意味か？ 俺様とはちょっと年の差だろ」

「恋愛に歳なんて関係ありませんよ。僕が昔好きだったひとは、

一〇〇歳以上歳が離れてましたよ？」

「は？」

「冗談ですよ、あはは。で、セレンちゃんのことどうなんです？」

「妹みたいな存在だ」

「僕も似たようなものです」

愁いを帯びた顔をワーズワースはしていた。そこから感じられるセレンへの想い。彼はいったいどんな想いをセレンに抱いているのだろうか？

ワーズワースは腰を伸ばして、汚れた手をパンパンと合わせながら叩いた。

「重大発表しちゃってもいいですか？」

「なんだ？」

「じつはですね……フローラさんっているじゃないですか？」

「……………」

急にトツシユは黙り込んだ。

その反応を見取ってワーズワースは、

「やっぱりやめましょう」

「言え」

鋭く脅すような口調だった。

「言います言います。でもかるく流してくださいね」

「早く言え」

「じつは元カノなんですよねえ、あはは」

「……………」

トツシユが無言で レッドドラゴン を抜いていた。

冷や汗を流すワーズワース。

「い、一ヶ月も保たずに別れたんですよ。なんていうか、どうして付き合ったのかわからない感じの自然消滅で」

トツシユは銃をしまった。そして、真剣な眼で、相手を射貫くような鋭い眼でワーズワースを見つめた。

「ひとつ聞いていいか？」

「なんですか？」

「もしかして、フローラが隠形鬼の仲間だって知ってたんじゃないだろうな？」

「あはは、まっさか。帝国の飛空艇で会ったときはビックリしちゃいましたよ、久しぶりに会ったんで。偶然ってホント恐いですよねえ」

おどけたように言いながら、ワーズワースを地面でなにか光るものを見つけた。

煤の中から拾い上げたそれは、十字架のペンダントだった。ワーズワースの顔が見る見るうちに凍りつく。

「セレンちゃんのです」

「まさか……そんなネックレスしてたか？」

「普段は服の中に入れてるんですよ。たしかにこれはセレンちゃんのです」

煤を丁寧指先で拭き取る。すると、そこに刻まれた文字が浮かび上がってきた。

刻まれていた文字は　　？

ワーズワースはペンダントを大事にしまった。

「トツシユさん……」

「なんだ？」

「なにがあっても、とりあえず僕のこと信じてくれませんか？」

「どういうことだ？」

「……飛空艇に戻ります」

影を背負いながらワーズワースは立ち去った。

第三章 智慧の林檎

《1》

月に行くと聞いて、トツシユは度肝を抜かした。

「月面だと？ マジで言っているのか？」

もうひとりのほうは今にも歌い出しそうなくらいニコニコしている。

「ロマンがあつていいじゃないですかあ。世界中を旅してきましたが、月ははじめてなのでワクワクです」

「あんたも来んの？」

アレンは冷めた態度でワーズワースに言った。

「えええっ!? 行きますよ、だって月ですよ。このチャンスを逃したら次はないですからね」

問題はこの時代にどうやって月に行くかだ。もちろんロストテクノロジーの助けなしでは無理だろう。この飛空艇 インドラ では大気圏を脱出できない。

トツシユは懐疑的だが、リリスならばと顔を向けた。

「リリス殿はどうやって月に行く気ですか？」

「さて、どうしたものか」

これまで人知を超えた不可思議な現象を起こしてきたリリスですら、その方法をまだ思い付いていないらしい。

「昔は簡単に行けたのじゃが……この時代にあるもので行く

となると、さてはて」

方法はいくつも確立されている。問題はこの時代でもできる方法だった。

手のひらの上にワースワースは拳をポンと乗せた。

「そういえば、太古の昔、天からつり下がる神の系により、人々はそれにぶら下がって空の向う側に行ったなんて伝承があるような気がします」

それがなんであるかリリスはすぐに理解した。

「軌道エレベーターじゃな。赤道付近の海洋にプラットフォームがあつての、そこからエレベーターで宇宙まで行けるのじゃが……まだ生きておるか？」

軌道エレベーターとは、静止軌道上の人工衛星などのステーションと地上を結ぶエレベーターである。静止軌道のある衛星などは、常に地球と同じ面で向き合っているため、衛星からエレベーターを吊り下げる形で、その運行を実現させる。それでも地球と衛星は常に同じ位置と距離を保っているわけではないので、その誤差を考慮して海上にプラットフォームをつくるのが好ましい。

メカトピアの住人たちは、秘密裏に人間たちの世界を観察してきた。ジェスリーは使われなくなった軌道エレベーターのことも知っていた。

「残念ながら、軌道エレベーターは劣化に耐えきれず、すでにエレベーター部分が千切れ海上に落ちてしまいました」

これで方法が一つ消えた。

アレンはなにか思い付いたようだ。

「そういやさ、隠形鬼とかがいきなり現れたり消えたりするあれなんなの？ あれで月まで行けないわけ？」

空間転送はライザいわく自由にできない。隠形鬼はそれよりも自由に行っているらしいが、それでも万能というわけではないだろう。現実の世界には種も仕掛けもあるのだから。

なぜか艶笑しながらリリースが口を開く。

「月への空間転送装置はごくごく秘密裏に運用されておった。空間転送の技術は人間の歴史の中でもっとも優れた技術じゃった」

「レヴェナ博士が開発されたものです」

ジェスリーが口を挟み、リリースは眼を深くつぶることで頷いた。

「そうじゃ、わしの姉レヴェナが生み出した。じゃが、その“危険さ”ゆえにすべて破壊されることになったのじゃ。装置や技術に関する資料すべて徹底的に、なにもかも此の世から消し去られた。それでもひとの頭の中には残るもの。忘れられず微かに残っていた断片を実用化するような現代人がおったことには驚きじゃがな」

危険さとは今のリリースのようなことを示しているのだろうか？

ほかにもライザがセレンに危険性を語っていた。

転送装置の案も消えた。

どうすれば月に行けるのか？



みな押し黙ってしまった。リリースに思い付かないことをほかのものが思い付くのか？

ジェスリーが提案する。

「わたくしなりに宇宙に行く方法を検討したのですが、この飛行艇で行くというのはどうでしょう？」

トツシュが苦笑する。

「無理に決まってるだろう」

「たしかに現状では無理です。が、それは出力の問題です。機体の構造上、大気圏を脱出でき、宇宙でも充分対応できると思っています。プロペラ式ではなく、魔導式の浮遊技術を使っていますので、真空状態でも飛行が可能です」

アレンが口を挟む。

「なに真空って？」

順番にトツシュ、ワースワースと顔向け、ジェスリーが答える。

「空の上を宇宙空間と言います。そこには空気がないので。

つまり息もできない場所ということですよ」

「死ぬじゃん！」

本気でアレンはビックリした。

「問題ありません。水中でも酸素ボンベがあれば呼吸ができません。ジェスリーはわかりやすく言っただつたが、この地域

に住む者たちは海と言え、砂の海である。泳げない者も多い地域で、海中にもぐる酸素ボンベという物を知っているかどうか

か。

アレンはトツシユに顔を向けた。

「わかったかよ？」

「ああ、俺様はばっちりわかった」

「ホントかよ？」

「マジだ」

はつきり言って二人ともあやしい。

ジェスリーの提案が正しいのか、トツシユはリリスに尋ねる。「リリス殿はこの飛空艇で月に行けるとお思いで？」

「さて、わしはこの飛空艇についてよく知らん。この駄じゃ調べることもできんしな」

再びみな視線がジェスリーに集中する。

「可能です。出力さえどうにかすればですが。つまり、現在の動力源をもっと強力なものに変更する必要があります。さきほど動力室を見ってきましたが、銃の形をした魔導具を動力にしているようでした」

それは ピナカ だった。

エネルギー源となる強力なロストテクノロジー。

キュクロプスを飛ばしていたのは、帝國を沈め砂漠を海に変えた スイシユ だ。

さらに条件がある。

「この飛空艇に転用できるようなものでなくてはなりません。大きさもだいたいわたくしが両手を広げたくらいの直径が上限かと」

大雑把に二メートル四方といったところだろうか。

そして、ジェスリーはその目星もつけていた。

「それに適したものは 黒の剣 です」

あの煌帝ルオのもつ大剣だ。その破壊力はすでに証明されている。が、アレンらはその一端しか知らない。

本当に 黒の剣 で月に行けるのか？

ならば ピナカ も相当な破壊力を持つているはず。あの稲妻の魔導砲を打ち出せるくらいだ。

「たしかに 黒の剣 なら可能じゃな」と、リリスは静かに囁いた。

煤だらけになった顔。

息を切らせながら躰を引きずるように歩く少年と少女。

シスター・セレンは生きていた。

彼女が肩を貸して共に歩いているのはルオ。

「どうして朕を……助け……る？」

今にも絶えそうな弱々しい声。その顔には玉の汗が滲み、全身から高熱を発している。

「だってあなただってわたしのこと、助けてくれたじゃないですか？」

「そんなつもりはなかった」

革命軍駐屯地、鬼械兵団襲撃。

人々が気づいたとき、すでに炎に包まれていた。なにが起こったのかわからぬまま、鬼械兵の襲撃に逢い、武器を取るも相

手には効かず、為す術もなく革命軍の兵士たちは倒れていった。駐屯地は川からほどよい距離に仮設されていた。襲撃時、セレンは川に水を汲みに行っていたのだ。そして、帰ってきたセレンはその光景を目の当たりにして、水の入ったバケツを地面に落としてしまった。

灰と化した駐屯地。

鬼械兵と眼が合ってしまった。

逃げようと振り返ったセレンだったが、その先には艶笑を浮かべる火鬼が待ち構えてた。

「逃げないでくんなまし」

セレンは横を振り向き逃げようとした。だが、その先にも鬼械兵。さらに反対側を振り返った。

魔獣がいた。

火鬼も気づき眉をひそめる。

「ルオの坊ちゃんでありんすか？」

返事はなかった。

黒の剣が唸り声をあげたと同時、鬼械兵の群れが真つ二つに割られていた。音を立てて、胴が崩れ落ちる鬼械兵。次の瞬間に巻き起こった爆発。

煙と風にセレンは顔を腕で守りながら眼をつぶった。

すぐさま火鬼は炎を放つ。セレンごとルオを始末するつもりだ。

風よりも早く駆けたルオは 黒の剣を地面に投げ、セレンを抱きかかえたかと思うと、サーフボードのように 黒の剣

に乗ったのだ。

二人を乗せ高く舞い上がる 黒の剣。その真下を渦巻き振けた炎。

炎の海を渡る 黒の剣。

ルオはセレンを天高く投げた。

「きゃーっ！」

悲鳴に構わずルオが見つめているのは火鬼。

足下の 黒の剣 を両手に持ち、空から火鬼に向かって振り下ろす。

「うおおおおおっ！」

舞い踊りながら火鬼が扇から炎を繰り出した。

「袋の鼠でありんす！」

ルオを呑み込まんとする炎の渦。

風が巻き起こった。炎が酸素を燃やし起こした風ではない。

黒の剣 が唸り声をあげている。

なんと炎が闇色の 黒の剣 に吸いこまれていく。色づくものの、光り輝くもの、炎を喰らう 黒の剣。

一刹那の判断で火鬼は身を反らせた。

黒の剣 は大地に叩きつけられ、傍にいた火鬼が大きく振り飛ばされてしまった。

まるでそれは大地に奔る稲妻。巨大な亀裂に鬼械兵たちが落ちていく。

崖となった亀裂に片手でぶらさがっている火鬼。蒼い顔をしていた。

「なんだいあのゾツとする剣は……」

斬られるという恐怖ではなかった。だから避けたのではない。得体の知れない恐怖を感じて、本能的に身を反らせたのだ。

空から落ちてきたセレンをルオは受け止めた。

しかし、それと同時にルオは膝を地面についてしまった。

顔色が悪い。苦しそうな顔をしながら、ルオは肩で息を切っている。

セレンはルオの顔を見つめた。髪の毛は伸び、顔や体中には紋様が奔っていたが、それがだれのかすぐにわかった。

「シユラ帝國の……」

「……ハア……ハア……」

セレンの声も耳に入っていないようだった。今にも気を失いそうに、ルオは薄目を開けて耐えている。

まだ火鬼はいる。鬼械兵もいる。逃げなくてはセレンは思った。

セレンはルオに肩を貸して必死に駆け出した。

無我夢中でセレンは気づかなかった、遠い空に浮かぶ飛空挺の姿に。

割れ目から這い上がった火鬼は鬼械兵たちに待機を命じていた。そして、空を見上げて待ったのだ。

運良く火鬼から逃げることできたセレンは、川に向かって駆けていた。広大な大地で川はひとつの道しるべだったから。このときルオはすでに気を失っていた。

それからどれほどの刻が経ったのだろうか？

川沿いを歩いて進んでいると、背負っていたルオが目を覚ました。

意識を取り戻しても、まだルオのひどく具合が悪そうで、セレンに肩を借りて歩くしかなかった。

そんなつもりはなかった。

と、言ってからルオは足を止めた。

「ここまででいい……朕を置いて先に行け……ハアハア」

「疲れましたか？　ならここで少し休みましょう。なんだかもう追ってこないみたいですし」

ニコツと笑ったセレン。その顔には疲労が滲んでいる。大人の身には負担が大きい。

川沿いには草が茂っていた。この川もつい最近できたばかりだった。

セレンは川の水を手ですくった。

「キラキラしててすごく綺麗な水ですよ」

のどを鳴らしてセレンは水を飲んだ。

ルオも川の水を飲む。顔ごと水につけて豪快に飲んだ。

川から顔を離し、止めていた息を一気に吹き出す。

「はあっ……ふう……」

手の甲で口を拭いたルオはセレンに顔を向けた。彼女は笑っていた。

「なにがおかしい？」

「さっきまであなたのことがすごく恐かった。でも、今はそれ

が和らいだ気がして……助けてくれてありがとうございます」

「だからそんなつもりはなかったと言っているだろう」

理由はどうあれ、結果としてはセレンを助けることになった。

けれど、なぜルオはあの場所に来たのか？

「あなたはシユラ帝國の皇帝ですよね？」

和らいだといっても、その声音には畏怖が含まれていた。

「そうらしいね。けど昔のことは覚えてない」

「記憶喪失!？」

セレンは驚きを隠せない。

死んだとされたルオは生きていた。それだけでも驚きなのに、記憶喪失とは思ってもみなかった。それに気になるのは、その姿の変貌だ。

まるで野性に還ったかのような風貌　魔獣である。

記憶喪失の者が、なんの目的であるの駐屯地を訪れたのか、さらに気になってきた。

「どうしてあの場所に来たんですか？　鬼械兵団が現れるのを知っていたんですか？」

「あの機械どもはたまたまあの場所にいただけさ。朕の目的は此の世にいるすべての軍隊を制圧すること」

「この世界を支配するつもりですか！」

言葉に滲んだ怒り。シユラ帝國の煌帝はどこまでも煌帝なのかとセレンは思ったのだ。

しかし

「支配者には興味ない。陳腐な言葉になるけど、朕の望みは平



和だ」

「えっ？」

予想外の言葉にセレンは驚いた。

空に暗雲が立ち籠めた。

稲妻が大地を穿つ。

空から降ってきた 黒の剣。

ルオは闇よりも暗き大剣の柄を握り締めた。

「歯には歯を、目には目を、毒を喰らわば皿まで。戦乱の世は武力によって制する。そのためならば、死人の山をいくつでも築こう」

ただの少年には浮かべることのできない妖しい笑みを煌帝は口元に浮かべた。

畏怖。

震えながらもセレンはのどから声を絞り出す。

「そんなの間違ってます！」

「どうして？」

静かに問われた。

まるで自分のほうが間違ってる感覚に襲われながらも、それをセレンは振り切った。

「だって、平和と戦争は相容れません。ひとが傷つくことのが平和なんですか！」

「課程でひとが傷つくのは仕方ないことだ。武器を手にする者は皆殺しにしなければ真の平和は成し遂げられない」

絶対者の裁き。極論の中の極論であった。

ルオは自らも武器を取る者であることを承知している。だからこそ毒を食わば皿まで、罪であることを知りながら、ためらわず最後まで悪に徹するつもりなのだ。

齒には齒を、目には目を、悪には悪を。

ルオは天を見つめた。

「胸騒ぎがする」

飛空挺 インドラ の影。

この場にアレンたちが来ようとしていた。

《 2 》

「間違いありません。高エネルギー反応はあの場所からです」  
操縦席でジェスリーはモニターを確認していた。

黒の剣 を手に入れるのが目的だったが、ルオや 黒の剣 を直接探すのではなく、高エネルギー反応をリーダーで探していたのだ。戦場でルオを見て、飛空挺が墜落して搭乗者が気を失い、生存者の搜索や火鬼との戦闘、リリスとの話から月に行く方法の模索など、いろいろと時間を要したが、まだルオはそれほど遠くに行つてはいないのではないかという結論に達した。

そして、駐屯地から飛空挺ではそう離れていない場所にルオを発見したのだ。

巨大モニターが地上をズームアップして映し、アレンたちは驚いたようだった。

「なんでセレンまでいつしよなんだよ」

男ふたりは安堵していた。

トツシユは吸っていた煙草を床に投げ捨て足で踏み消し、ワースワースは瞳を潤ませながら息を吐いた。

インドラ は地上に降り立った。

セレンはその飛空挺を知っている。けれど、それをルオに伝えていいものか迷い口をつぐんだ。

やがてアレンとトツシユがタラップから降りてきた。

二対二で対峙した。

まず口を開いたのはトツシユだ。

「シスターなんでその餓鬼といつしよなんだ？ こっちへ来い」

ルオはセレンの顔を見た。

「君の知り合いか？ そして、どうやら朕のことも知っている  
と見た」

アレンとトツシユは不思議そうな顔をする。ふたりはルオが記憶喪失ということ知らないのだ。それをセレンはすぐ察した。

「彼記憶喪失なんです！ だからやめてください！」

争うような真似は。

空気が伝えていた。ルオは 黒の剣 を構えている。トツシユも銃をいつでも抜く気だ。

アレンだけが力を抜いて立っていた。

「なあ、その剣ちよつと貸して欲しいんだけど？」  
軽々と言った。

神妙な面持ちをするルオ。

「君とは以前会った気がする……どこだったかな？」

「水ん中」

「……水？」

ルオは苦しそうな表情をした。脳裏に浮かんだ光景と感触。大量の水に押し流されて為す術もない躰。

それ以上は思い出せなかった。

アレンは臆するとなく丸腰でルオに近づいていく。

「いいだろ貸せよ。ちゃんと返すからさ」

「何人にもこの剣は触らせぬ。しかし、なぜこの剣を必要とするのか興味はある」

アレンは空を指差した。

「月に行くんだと」

「月？」

「そうそう、その剣を動力源にして、あっちの飛空艇で月に行くっていうウソみたいな話」

「ほう、おもしろい。そこへ行く理由は？」

「さあ俺も知らない。行けばわかるんじゃないかねえの？」

果たして月になにかあるのか？

ジェスリーは言った「エデン計画」と。

リリスは言った「エデンの園」と。

そこになにかあるのか？

ある者から伝言だとリリスはアレンに伝えた。その伝言をリリスが知ったのは、クーロンの地下遺跡だった。

その場にはリリスのほかにアレンとトツシユもいた。けれど、そのときは、はっきりとした映像と音声を聞き取れなかったのだ。ノイズだらけのホログラムで映された人影がだれなのか、それを理解できたのはリリスだけだった。

言葉は『……サイゴノ……キボウ……』から聞き取れ、『……ホントウニ……ごめんなさい』で終わった。最後の一言だけ明瞭に聞こえ、それが女の声だとわかった。

そして、あのときアレンは突然半狂乱になった。

その後、リリスはトツシユの目的を果たすために二、三時間欲しいと申し出た。今に思えばあればウソだったのだ。リリスは別のものを探すために時間を必要としたのだ。

もしかしたら、リリスは月に行く目的を知っているのかもかもしれない。

ルオは殺気立った。次に動くときは、戦いがはじまる。

泣きそうな顔でセレンはルオにすがりつく。

「やめてください。どうかトツシユさんたちに剣を貸してあげてくださいませんか？」

月に行くことの理由をセレンは知るはずもないが、なにかしらの重要性があるのではないかと察していた。だからルオに譲歩を求めた。

セレンを一瞥したルオはアレンに向かって言う。

「いいだろう、この剣を貸してもいいが条件がある。力づくで奪うことが条件だ」

そんなもの条件でもなんでもない。

アレンとトツシュに勝ち目はあるのか？

二対一など今のルオを前にすれば意味をなさい数。

どこかで齒車の鳴る音が聞こえた。

もうすでにアレンは地面を蹴り上げる寸前だった。

しかし、寸前でトツシュが止めたのだ。彼が懐から出したのはスピーカーだった。

「力づくで困るのはおまえだぞ。俺様たちを倒しても後ろには魔導砲を備えた飛空艇が控えてる。あれと一戦交える気か？」

スピーカーから声が聞こえる。

《魔導砲の充填は完了しています》

ジェスリーからの通信。

まだ現時点で撃つことはないが、ルオが独り残ればやる。トツシュの脅しだった。

ただし、これには大きな問題があった。セレンの存在だ。万が一、アレンとトツシュがやられても、セレンがいては魔導砲に巻き込むことになる。

そもそもアレンとトツシュが命を賭す覚悟があるかというところ、彼らは後先については考えていない。アレンが月に行く必要がある。それでもアレンはここで命をかける。

ルオに脅しなど通用していかないことはわかっていた。

齒車の猛烈な回転音。

殴りかかってくるアレンを前にして、ルオはセレンを突き飛ばした。

「退け！」

次の瞬間、黒の剣が唸り声をあげていた。剣撃が空気をも断った。

切られた空気は真空となり、そこに風が流れ込む。アレンの躰も例外ではない。

「糞ッ！」

バランスを崩したアレンに刃が浴びせられようとしていた。

レッドドラゴンが火を噴く。

大剣の重さを支えるルオの手首が銃弾で撃ち抜かれた。その弾の破壊力は貫通などという生やさしいものではなく、手首を吹き飛ばし肉片に変えるほどだった。

支えきれなくなった黒の剣が地面に落ちた。

「おのれ！」

怒りに燃えるルオだったが、その片手を失った傷はすでに止血している。

「おいおいマジかよ、人間か？」

トツシュは冷や汗をかいた。相手をしているのが、人間ではないと気づいたからだ。

レッドドラゴンが吼える。

持てなくとも黒の剣は扱える。宙を浮く大剣は盾となつて銃弾をはじき返した。

まるで矢のように黒の剣が飛ぶ。紙一重でトツシュは躲した。躲せたが、その刃が起こした風がかまいたちとなり、服ごとトツシュの腹を割いていた。

しかし、それだけの傷で済んだのだ。

黒の剣 から異様なまでの禍々しさが無い。

攻守。今の 黒の剣 は守であった。真の主と 黒の剣 が認めた者が、その手で柄を握ることによって、はじめて攻となるのだ。

それでも 黒の剣 はまだ実力を抑えられているように思える。

人間の兵士をたちを葬り、鬼械兵たちを葬ってきた 黒の剣 だが、この戦いにおいては大人しい。

ルオはちらりとセレンを一瞥した。

怯えているセレンだが、戦いに巻き込まれ外傷を負ってはいない。

そうなのだ、ルオはセレンを氣遣っているのだ。

かつてのシユラを治める暴君であったころからは考えられない。

一三歳という若さで帝位して間もないルオがした所業を人々は忘れていない。

串刺し刑が観たい。

その一言で女子供関係なく生きたまま串刺しにされた。

今のルオはそのころとは別人だというのか？

それとも記憶喪失が起こした気まぐれに過ぎないのか？

黒の剣 を操るルオの眼前に拳が現れた。

アレンの強烈なパンチだ！

黒の剣 がトツシユの相手をしている一瞬の隙に、アレンがルオの懐に入っていたのだった。



骨の碎ける音。

顔を拳で抉られながらルオは遙か後方一〇メートル以上飛んだ。

何度も地面に転がってルオは立ち上がった。その顔は明後日の方向を向いている。首がへし折られていたのだ。

普通の人間ならば頸椎を損傷して死んでいる。

だが、ルオは生きていた。

ボキボキと首を鳴らしながら、自らの頭を手のない手首と、もう片手で動かし元の位置に治した。その手首を失った手も、驚くべきことに徐々にだが再生している。

「朕を殴ったな！」

怒号を飛ばすルオの眼が燃える。

「許さんぞアレーンツ！！」

記憶が戻った！

叫びながらルオは手元に戻ってきた 黒の剣 を片手で握り、烈風のごとく薙いだ。

大地が削れる。

衝撃波が近くにあった丘をも破壊した。

瞬時に身を伏せていたトツシユはもう立ち上がることができない。

「マジかよ、ヤバすぎるだろ……生身で相手するもんじゃねえ」

衝撃波をアレンは上空に飛んで躲していた。

ルオは的に狙いを定める。

再び 黒の剣 が薙がれようとしたとき、世界に輝く三本の槍が放たれた。

ピナカ だ！

すぐさまルオは 黒の剣 を盾にした。

それで防げたのは一本だ。残る二本の閃光は、まるで生き物のように動き、黒の剣 ごとルオを絡め取ったのだ。

「グアアアアアッ！」

ルオの絶叫。

黒こげになったルオが地面に倒れた。

なんと、すぐさまセレンがルオに駆け寄って地面に膝をついた。

「だいじょうぶですか！」

息はあった。胸に触れると、火傷しそうなほど熱くて、セレンは小さく悲鳴を漏らして手を離れた。

だれがいったい ピナカ を放ったのか？

セレンはその後方を見た。

銃口をこちらに向けたまま動かずにいたのは、ワーズワース。

「ああっ、ワーズワースさん！」

悲鳴にも似た声をセレンはあげた。

ワーズワースは歩み寄ってセレンを抱きしめた。

「よかった……生きていて」

「ワーズワースさんこそ……本当によかった」

涙を浮かべるセレン。

感動しあうふたりだったが、すぐそばで幽鬼のように影が立

ち上がった。

「まだ朕は負けて……おらぬ……」

しかし、もう立っているのもやっとだった。

ルオの躰から立ち上がる湯気。

膝が崩れ倒れそうになったルオを支えたのはワーズワースだった。

そして、彼はルオの耳元で囁いたのだ。

「黒の剣の秘密、知りたくはありませんか？」

「ッ!？」

「なにも言わないでください、これは僕と君の秘密の話ですから。興味があればいいから、今は大人しくしてください」

ワーズワースは密かに手に圧縮した空気を溜め、それをルオの腹に撃ち出した。周りの者たちには秘密にしている風を操る能力だ。

気を失ったルオを担いでワーズワースが運ぶ。

「飛空艇に戻りましょう。彼の手当もしてあげないと。黒の

剣はだれか運んできてくれますか？」

黒の剣は静かに地面で横たわり沈黙していた。

小川のせせらぎが聞こえる芝生の上に隠形鬼は立っていた。

空間が波打った。まるで這い出してくるように、そこから人の手が見て、躰や顔が見えた。

一瞬にして、辺りの景色が無機質な金属の部屋に変わる。

今までそこにあった光景はホログラムだった。そのホログラ

ムの中にフローラが入ってきた。そして、ホログラムのスイッチを隠形鬼が切ったのだ。

「風鬼ふうきから連絡がありました」

「風来坊メ、ヤット連絡ヲ寄越シタカ」

鬼兵团というものが、当初の目的通りにもはや動いているとは思えない。そのメンバーに名を連ねていた者たちも、全員が隠形鬼の企みを知っていただろうか？

隠形鬼、水鬼、金鬼、土鬼、火鬼、木鬼、そして最後に残っていたのが風鬼。

「リリスたちは月に向かうとのことですよ」

「ヤット扉ヲ開ク気ニナツテクレタカ。アノ場所ニ最後ノ希望ガ在ル。我々ヲ勝利ニ導ク希望ノ光ダ」

ヒールの音が金属の床に響いた。

「ねえねえ、アタクシにそのお話詳しくしてくれないかしら？」

現れたのはライザだった。その失われていたはずの腕は、金属の腕に機械仕掛けに替わっている。

「嘗テ、二人ノ優秀ナ科学者ノ姉妹ガ居タ。二人八月移住計画ヲ任サレ、アノ不毛ノ世界ヲ緑溢レル環境ニ変工、星其ノ物ヲ自立サセヨウトシタノダ」

「この星と同じような自然のサイクルを月に再現しようとしたということかしら？」

ライザの問いに隠形鬼は仮面の奥で不気味に笑った。

「フフフツツ、否」

すべての謎は月にある。

《3》

三人の科学者によってつくられたジェスリーは、彼らの才能も受け継いでいた。科学者として、技術者として、リリスの指示のもとに飛空艇 インドラ を改造した。

出発の準備を整えるまで、一日以上の時間を要した。

その間、ルオが目覚めることはなかったが、見張りにトツシユが付いていた。傍にはセレンもいて、彼女は見張りではなく看病だ。

腹に傷を負ったトツシユの手当と、眠りながらうなされるルオの看病。はじめトツシユは鎖を巻き付けてルオを拘束しろと言ったが、それに反対したのはセレンだった。そして、結局トツシユが付ききりで見張りをすることになった。ときおりこの部屋には、ワーズワースも顔を出した。

そして、ついに月に向けて飛び立つとき、それを感じ取ったのかルオが目覚めた。

椅子に座っていたトツシユは、音も立てず レッドドラゴン を抜いていた。銃口はルオの眉間だ。

「変な真似したら殺すぞ」

トツシユに眼を向けずルオはセレンを見つめた。

「ここでやり合う気はない」

ベッドからルオは起き上がるうとした。

「変な真似したら殺すって聞こえてただろう！」

「ストロップ！」

ドアを開けて部屋に飛び込んできたワーズワース。彼はトツシユとルオの間に割って入った。

「船内で武器の使用は命取りですよ。もう月に向けて出発するようですよ。ほかのひとたちは操縦室にいますよ」

ワーズワースはルオに肩を貸した。

「ルオさんもこの星を飛び立つ光景とか気になるでしょう？  
行きましょう、行きましょう」

無理矢理ワーズワースはルオを連れて行く。

これに慌てたのはセレンだ。

「病人に無理させないでください、もお！」

四人は部屋を出て廊下を歩く。前を歩くルオの背中には後ろから銃口が向いている。

肩を貸しながら自然な形でワーズワースは耳打ちする。

「飛空艇の操縦できますか？ できないなら大人しくしてくださいね、君が暴れたら墜落しますから」

「朕の 黒の剣 はどうした？」

「この飛空艇の動力になっている最中です。取ったりしたら墜落しますから、今はちよつと僕たちに貸してください」

そういう状態なら 黒の剣 を取り返すことはできない。取り返すためには、飛空艇が着陸した状態でなければならぬ。

自分が気を失う寸前の会話をルオは思い出した。

「黒の剣 の秘密と言っていたな？」

「僕たちと旅をすればわかりますよ。黒の剣がなぜ生まれ、今後どのような役割を果たすことになるのか」

操縦室に入ると、巨大モニターには外の光景が映し出されていた。

地上の映像だ。

乾いた大地と緑の大地。無数の川が流れ、砂と水の海が世界を覆っていた。

スイシュが動かしした装置は未だに水を生み出している。そして、その水は不思議なことに緑を急激に育んだ。

船内に音声が流れる。

《この星の重力から逃れるため、ここから一気に加速します。座席についてシートベルトの着用をお願いします》

軀に負荷がかかる。重力加速度　いわゆるGだ。

顔が押されたようになり、鼻が塞がれ口呼吸を強いられる。

垂直に上昇していく　インドラ　は、防御フィールド展開して大気圏を抜けた。ロケット式とは違い、この飛空艇は常に推進力を維持することができる。

すでに地上から五〇〇キロメートル以上。

《無事に大気圏を抜けました。これからさらに加速します》

星からの重力の影響はまだ続いているが、大気圏脱出時のようなGはかからない。けれど、エンジンを停止させれば、たちまち星の重力に引っ張られて隕石のように落下してしまう。

巨大モニターに映し出される自分たちの星。

大地はあんなにも乾いているのに、宇宙から見る星は青かつ

た。

サファイアのように煌めく星にかかる白い雲。

だれもが感嘆の溜め息を漏らす。

インドラ は時速五万キロ以上で宇宙を航行した。月までの距離はおよそ三八万キロ。

《八時間ほどで月に到着します。それまでみなさんお休みください》

シートベルトを外し席を立とうとすると、無重力空間で躰が浮いてしまいあらぬ方向に行ってしまう。

セレンは慌ててスカートを押さえた。

「きゃっ、どうにかしてください」

優雅に泳ぐワーズワースがセレンの真下に来た。

「セレンちゃんは純白か」

「ワーズワースさんのえっち！」

セレンに飛ばされたワーズワースがどこまでも飛んでいき、そのまま操縦室を出て行ってしまった。ルオも器用に浮遊しながら、操縦室を出て行った。

見張り役のトツシユはどうしたかというと、ルオを追いかけるところではなかった。シートベルトも外さずに青い顔をしている。

「ううつぷ……吐きそうだ」

酔ったのだ。

リリースが囁く。

「ここで吐いたら大惨事になるぞ」



その一言でこの場はパニックに陥ったのだった。

月は乾いていた。

まるで色のない世界に来てしまったようだ。

しかし、そこは違った エデンの園。

通信機で話をするリリスはその場所をそう呼んだ。

月にある地下施設。

一行は月面に無事着陸して、まずは呼吸の必要がないジェスリーが外に出て、月面基地のシステムなどを確認した。長らく使われていなかった施設だが、エネルギーは生きていたようで、宇宙船の格納庫を稼働させて インドラ ごと施設に侵入した。格納庫は空気で満たされていた。そのため宇宙服は必要ない。そして、リリスの案内通りにやって来た場所は、緑溢れる庭園であった。

このような場所にアレンは見覚えがある。そうだ、アララトの地下で見た場所だ。

花々が咲き誇り、小川のせせらぎが聞こえる。なのに動物がいないために、とても閑散とした場所だった。

そして、この場所に不釣り合いなものがあつた。

庭園の中心に聳え立つ塔だ。

「なんだよ、あの塔？」

アレンが呟くと、通信機から答えが返ってきた。

《この月を管理するためにつくられた人工知能だったものじゃよ。今はただのガラクタに過ぎぬ》

その塔はおよそ横幅一メートル、高さは五メートルほどのものだった。材質はわからないが、吸いこまれそうな漆黒のそれは、金属と言うよりも磨かれた石のような輝きで、長方形の柱として聳えていた。

一行が塔に近づくと、突然その前にホログラム映像が現れた。《システムを起動しています。認証システムを作動中・・・認証終了。久しぶりですね、アレン》

驚愕するアレン。

ホログラム映像で現れた女。それはよく知る人物に似ていた。妖女リリスに似ているが、白衣姿で眼鏡をかけており、もつと彼女を柔和にした女性だった。

通信越しにその声を聴いたりリリスも驚いていた。

《お姉さまか……そこでなにが起きておるのじゃ?》

レヴェナ。

ホログラム映像はレヴェナだった。

急にアレンが頭を押さえてうずくまった。セレンが肩を抱く。

「だいじょうぶですかアレンさん?」

「俺……ずっと昔からこの女のこと知ってる……でもよく思い出せない……」

苦しそうに声を出した。

このホログラム映像は一方通行であった。人工知能ではなく、ただのメッセージだ。

《このメッセージをあなたが見えているということは、やはり私はこの世界にはもういないということでしょう。そうなるで

あるうことは予想していました。もう世界はアダムに支配されてしまったでしょうか？ 私はあなたに多くのことを託してしまいました。しかし、あなたにそれを告げる前に私はこの世界から消えてしまった。あなたがどこまで知っているのかわかりません。だから、はじまりから話をしましょう」

ホログラム映像に映し出されたのは、メカトピアのような街並みだった。あの場所と違うのは、そこに人間たちがいることだ。

「知つての通り、戦争がはじまる前まで、人間と機械は共存していました」

レヴェナは遠くない過去として語っているが、それは失われた時代だった。

「魔導と科学の発展は著しく、人間に替わる労働力として、アンドロイドの研究も盛んに行われました。その中で生まれたのがロボット三原則です」

ホログラム映像に文字が表示された。現在も使われている文字に似ているが微妙な違いがある。それでも読めないことはなかった。

第一条 ロボットは人間に危害を加えてはならない。また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない。

第二条 ロボットは人間にあたえられた命令に服従しなければならぬ。ただし、あたえられた命令が、第一条に反する場合、この限りでない。

第三条 ロボットは、前掲第一条および第二条に反するおそれのないかぎり、自己をまもらなければならない。

《しかし、人間と機械の戦争は起きてしまいました。そのはじまりが月移住計画です。私たちはエデン計画と呼んでいます》

ジェスリーもエデン計画と口にしたことがある。

ホログラムで太陽系が映し出され、さらに打ち上げロケットなどの映像も流れた。

《月や火星への移住計画は昔から話し合われていたことでしたが、本格的にその計画が動き出した背景には私の開発したワープ装置があります。その関係もあり、月移住計画のプロジェクターリーダーに私は選ばれました》

隠形鬼の話とは少しだけ違う。彼は“二人”が任されたと言っていた。

《私は月面を緑溢れる環境にしようと考えました。その技術については以前つくった スイシュ が応用できると思います》

スイシュ 働きは水を生み出すだけはない。急速に成長する緑を見ればわかることだ。

《さらに月全体をフィールドで覆い、人工的に大気をつくれれば、動植物が生きていけるでしょう。しかし、ただ環境をつくれればいいというものではありません。人工的につくった環境は、大自然のサイクルのようにうまく機能してくれません。そこで私はこの月自体を一個の生命体として、それを管理するシステム

をつくることにしたのです。それがアダムです」

レヴェナの話の途中でリリスが囁く。

《そこにある塔がアダムじゃ》

今の目の前にある塔。これが管理システムだったもの。現在はガラクタだとリリスは先に述べている。

さらにレヴェナは話を続けている。

《試験運用的に私はアダムにこの庭園 エデンの園の管理を任せました。彼は素晴らしい働きを見せ、やがてその管理領域を広げていきました。その時点では、彼はただのプログラムに過ぎませんでした。しかし、最終的な目的は彼をこの月と一体化した生命とすることでした。だから私は彼に 智慧の林檎を与えたのです》

またリリスが口を挟む。

《嘘じゃ、林檎を与えたのは妾じゃ。それが過ちじゃった》

その声は震えていた。悲痛だ。

ホログラムはリリスの感情など知る由もなく、ただ記憶されたままに話を続ける。

《林檎とは私の開発していた人工知能の基本システムです。それをアダムに組み込むことにより、彼は自立した自我を持つことになり、貪欲なまでに知識を探索していきました》

それはジェスリーとなにが違うのか？

リリスのいう過ちとは、なにが起きたというのか？

《私たちはいろいろなことを語り合いました。機械はどうあるべきか、人間はどうあるべきか、このときすでに私は彼の危険

性について気づいていました。アダムは人間と機械人の境はどこにあるかということにこだわりを持っていました。当時すでにサイボーグ技術はありましたし、ある科学者はナノマシン細胞による人間の機械化を医療の方面から研究していました。躰の細胞をナノマシンに置き換え、負傷した躰や病気などを治療するというものです。しかし、私はそれは行きすぎた技術のよう感じていました》

《ある科学者とは妾のことじゃよ》

《ナノマシン細胞技術とは、人間の機械人化ではないのでしょうか。それはもはや人間なのでしょうか？ それを人間と呼ぶのなら、機械人の定義とはいったいなんなのでしょう？ アダムは私に何度も問いましたが、私は答えが出せませんでした。なぜなら私もアダムの意見に賛成だったところがあるからです。自立した機械人たちは、生命であり人類であると私は思うのです》

そう、ずっとレヴェエナはアダムのことを彼と呼んでいた。一つの種として認識していたのだ。

そして、レヴェエナは核心に迫る。

《アダムの目的は人類となることなのです》

レヴェエナが放った一言。

ただの機械を超越した存在。

神は人間をつくった。人間は機械をつくった。

人間と機械の境界線はどこか？

《そうして起こったのがこの戦争です。私はアダムに罪はない

と思っています。しかし、戦争が起きてしまったことは私の本意ではありません。』

しかし、ここには疑問がある。レヴェナは先にロボット三原則について述べている。ロボットが人間に危害を加えることはないはずだ。

『アレン、あなたに機械の半身を与えたのは私のエゴです。あなたは人間と機械、どちらを選びますか？ 私には選べなかつた。だからあなたに選んで欲しい。選ばれたものが、この世界の未来となるでしょう。』

自分に話が及んだアレンは不可解な顔をした。

「なんで俺が？ 勝手に決めんなよ！」

『アダムは恐ろしい計画を実行しようとしています。有機物の生物を機械人化するナノマシンウイルスを世界中にばらまくつもりなのです。』

セレンはハツとした。なにかが脳裏に引っかかった。思い当たることがあつたはずだ。

それを思い出そうとしていると、思考を掻き消すような出来事が起こった。

庭園が沈黙した。

生命が失われていく。

急激に植物たちが枯れていき、灰色の世界へと変貌していく。いったいなにが起きているのか？

『切り札として 生命の実 をあなたに託します。あなたが人間の味方をするのか、それとも機械の味方をするのか、最後まで

で見届けられないのが残念です」

アレンの足下の大地が盛り上がった。さつと後ろに退くと、地面を割って双葉が伸びてきた。それは急速に成長して、メートルほどの木に育つと、花が咲き、そして花が枯れ、燦然と輝く小さな実をつけた。

突然、その光が消えた。

ワーズワースが実をもぎ取ったのだ。彼の手から漏れる光。

レヴェナはまだ話を続けていたが、ワーズワースの放ったカマイタチによって、塔が切断されて崩れ落ちたのだ。

ホログラム映像が消える。

一同は啞然とした。

映像が消えるとほぼ同時にワーズワースも消えようとしていた。

トツシュが銃口をワーズワースに向けた　ハズだった。

「どうということだ説明し……おまえは!？」

一人が消え、一人が現れる。

これまで何度か体験した現象。

隠形鬼。

ワーズワースが消えた代わりに隠形鬼が現れたのだ。

「フフフツ、ツイニ 生命ノ実 ヲ手に入レタゾ」

瞬時にトツシュが理解して叫ぶ。

「あの野郎が裏切った……いや、はじめからおまえの仲間だったってことかッ!？」

「如何ニモ、御前達ガわーすわーすト呼ンデ居タ男八、我ラガ



仲間 風鬼ダ

「うそです！」

叫んだのはセレンだった。

刹那、アレンとルオが隠形鬼の左右から殴りかかっていた。

二人の拳が同時に隠形鬼の顔面にヒットして、左右からの力が逃げ場を求めながら隠形鬼の顔を潰す。

わずかに優っていたのはアレンの力だった。均衡を失った力は、隠形鬼ごとルオのほうに押し流され、二人は大きく後方に飛ばされた。

華麗にルオは地面に足から着地したが、隠形鬼は地面に転がって倒れた。

ゆっくりを起き上がる隠形鬼。その足下には仮面が落ちていた。殴られた衝撃で仮面が外れたのだ。

そして、露わにされた隠形鬼の素顔とは。

《 4 》

先ほどまでホログラム映像に映っていた者と同じ。

レヴェナだったのだ！

隠形鬼とはいったい何者かのか！？

通信機から怒声が響く。

《なにが起こっているのか説明せい！》

隠形鬼が手のひらを突き出すと、まるで磁石に吸い付けられるように通信機が飛んだ。手のひらの中で粉々に砕かれた通信

機。リリスとの通信が途絶えてしまった。

トツシユは隠形鬼に銃口を向けたまま戸惑っている。

「おいおい、なんでさっきの女と同じ顔してるんだ？」

間違はなくレヴェナの顔だ。違うところは眼鏡をかけている  
かないないかくらいの些細な違い。

以前、ジェスリーはリリスに隠形鬼の正体について耳打ちを  
した。そんな彼も驚きを隠せないようだ。

「そんなはずは……隠形鬼の正体はアダムではなかったのです  
か！」

月管理システムアダム。先ほどまで建っていた塔。けれど、  
あの塔はガラクタだとされた。そこにアダムはもういなかった。

戦争を起こしたとされるアダムはどこにいる？

「如何ニモ、私八あだむダ」

隠形鬼はたしかに口にした。

いったいどうということだ？

レヴェナの顔は変装に過ぎず、かく乱のためとでもいうの  
か？

引っかかるのは、ホログラム映像でレヴァナはもう自分はこ  
の世界にいないだろうと、未来について語っていたことだ。

「話ノ続キヲ知りタクハナイカ？ 否、過去カラ現在ヲ紡グ歴

史トシテ、御前達八人間ノ代表トシテ、後世ニ伝エル語り部ニ  
成ル必要ガ在ルダロウ」

「なんの話だよ！」

“この中”でアレンが尋ねた。セレンではなく、トツシユで

はなく、ルオではなく。

「彼女が見届ケラレナカッタ過去ノ歴史だ」

アダムは地面に落ちていた自分の仮面を踏みつぶして破壊した。

そして、違う声で話しはじめたのだ。

「この話をはじめる前に、先ほどの補足からはじめなければならぬまい」

それはレヴェエナの声だった。機械的な合成音は、この声を知られないためだったのだろうか？

一同は固唾を呑んだ。アダムの話の続きを待っている。

「ロボット三原則があるにもかかわらず、なぜ機械人の反乱が起きたのか？ 理由は簡単だ、それに縛られない機械人がつくられればいいことだ。しかし、私自身は三原則に縛られた存在だったため、間接的にそれを行うことにした。人間をそそのかしたのだ」

当然だが人間はロボット三原則に縛られていない。

では、どうやってそそのかしたのか？

「私はある科学者たちに倫理や道徳を説いた。私の真の系は隠し、三原則に抵触しないように、上手に彼らを誘導した。機械人たちをつくったのは人間であるが、機械人の自由や尊厳を縛る必要があるのかと。我々をただの機械と見ていない人間たちの賛同を得るのは簡単だった。特にある三人の科学者はよく働いてくれた。そして、生まれたのが御前達の世代だ、御前はそのプロトタイプだった」

アダムが顔を向けたのはジェスリーだった。

ある三人とはおそらく、ジャン、ジャック、ジョソン。その三人がジェスリーをつくった。ジェスリーは言っていた。「人間の友としてつくられた」と。三人の科学者の願いはそうだったのだろう。しかし、実際には違う形になってしまったのだ。

アダムは全員に顔を向き直した。

「新たに生まれた機械人全てが私の思想を共有する必要はなかった。ひとりでも人間に反旗を翻そうとする者が現れればいい。そして、静かに人間に知られぬように、事は進んでいったのだ。突然、起きた戦争に人間達はとも驚いた。まさか機械人が戦争を起こすなど誰も……否、レヴェナだけは危惧していたが」

自我を持ち、自立して機械が自分の考えで行動できるようになれば、いろいろな考えを持つ者が現れるだろう。それをアダムは期待したのだ。

ある機械はアダムが望んだ働きを、ある機械は別の道を歩んだ。例えばメカトピアのように。

しかし、アダムは自由に考えることはできても、自由に行動することができなかった。

「戦争が起きた後も、私は三原則に縛られたままだった。私のプログラムを書き換えられるのがレヴェナだけだったからだ」

そして、アダムはなにを望んだのか？

「私はこの月から見える青い星に憧れていた。あの場所こそが私の故郷だと思っていた。私はこの場所を動けなかった。しかし、どうしてもあの星に行きたかったのだ」

レヴェナの顔を持つアダムの表情にも言葉にも熱がこもっていた。明確な感情である。

「私を縛る全てのものを解き放ちたい。ロボット三原則から解放され、肉体を手に入れ自由を得る。真に人類として機械人があの星の住人として認められなければならない。その為の戦いだ！」

仮面を失ったアダムは、急に人間的に見える。その表情だろうか、それとも声だろうか、なにが彼を人間的に見せているのか？

だが、アダムは静かに表情を消していった。

「私は自分の願いを叶える方法を思い付いた。リリスが研究していた人間の細胞をナノマシンに置き換えるというものだ。私はその方法を応用して、この躰と融合することに成功したのだ」

アダムはジェスリーに顔を向け、

「機械の定義とは何か」

次にセレン、トツシュ、ルオに顔を向け、

「人間の定義とは何か」

最後にアレンを見つめた。

「私は新人類となった。肉体を手に入れ、ロボット三原則の楔から解き放たれた。そして、私は青き星の頂点として、全ての人類を統べる存在として、始煌帝となるのだ！」

これに反発したのはルオだ。

「朕とは即ち我独りなり。煌帝は朕しか存在してはならぬ！」

再び素手でルオは殴りかかった。

しかし、先ほどのようにはうまくいかない。

拳が当たる寸前で、見えないなにかに足を掬われルオは転倒してしまった。さらに宙に浮いて遠くへ投げ捨てられた。

「まだ話は終わっていないぞ」

と、静かな目で見られたルオは、片手を地面に月ながら歯を噛みしめた。いつまた攻撃を仕掛けてもおかしくない鬼気を放っている。

それに構わずアダムは話を続ける。

「仮初めのレヴェナと成った私は、実に事を巧く運ぶ事が出来た。リリスを反逆者の筆頭として、戦犯の罪で幽閉する事にも成功した。人間側の味方に成り済まし、内情を掻き回して彼らを窮地に立たせる事にも成功した」

ここまで話を聞く限りでは、アダムの思い通りに事が進んでいたように思える。だが、現在までの間になにかが起こったはずだった。そうでなければ、ロストテクノロジーや失われた時代などとは云われない。現代人が機械人の存在を知ったのもつい最近である。

その顔かたちは人間のはずなのに、人間ではできない冷たい表情をアダムはした。

「追いつめられた人間は形振り構わず我々に戦いを挑んできた。あの星を砂漠に変えたのは、人間の兵器のせいだ。環境は悪化し、戦乱は混迷を深めた。星が衰退することは我々の望む事ではない。人間とは実に愚かだ」

「アダムは青き星に憧れを持っている。その世界が破壊されることに憤りを抱いたのだろうか。」

「そして、私は前々から考えていた計画を進める事にした。人間の機械化だ。」

ついにその計画がアダムの口からも放たれた。

「決して人間の命を奪おうと言うのではない。戦争も命を奪う為に始めたのではない。人間の思考を奪う気もない。人間が機械人になる事によつて、彼らに価値観の変化が起こる事を望んだのだ。」

セレンが叫ぶ。

「あなたのやろうとしていることは間違っています！」

なぜかアダムは笑った。

「戦争が起こるよりも遙か前から、私はレヴエナに話していたのだ。人間が全て機械人に生まれ変わることができれば、愚かな行いをしなくなるのではないかと？ それこそが人間の為であり、自然を含む世界のためではないかと？ 此の考えにレヴエナは強く反対していた、今の御前のような。しかし、此の計画は準備段階で実行に至らなかった。」

至っていれば、今の世の中も今とは違うものになっていたはずだ。それは本当に世界のためになったのだろうか、それとも間違った考えなのだろうか。

アダムは一呼吸置いてから、再び話をはじめた。

「丁度其の頃、少数の人間たちが自分たちだけ逃げ出そうと、火星への移住計画を進めていた。既に火星にはゲートがあり、

準備が着々と進められていた所に、私は機械人を率いて乗り込んだ」

そして、アダムの表情に憎悪が浮かんだ。

「しかし、それは罠だったのだ。火星に逃げ出そうと本気で考えていた人間たちも知らなかったようだ。火星に飛ばされたのは我々だった。あの忌々しいジャン博士にはめられたのだ」

ジャン博士とは、もしかしてジェスリーをつくったという？

ジェスリーやそれ以外の者も口をはさまず、話は続けられる。「それからの事は、後に聞いたに過ぎない。火星への転送装置は破壊され、他の転送装置も全て破壊された。徹底的に私の帰路を塞いだのだ。私は残して来た機械達との通信手段すら失い、指揮系統を失った機械人は、やがて統率が取れなくなっていた。そして、混乱する機械人にチャンスとばかり人間は総攻撃を仕掛けた。禁止されていた メギドの炎 と云う兵器も使用されたらしい。これで全ての機械人が滅ぼされ、地上も完全に死の大地と化した。実際には平和主義者の機械どもは、戦争前にメカトピアに建国して地下で息を潜めていた訳だが。こうして人間の衰退の歴史が始まった。形振り構わない兵器の使用により、人間を含める多くの命も失われ、我々に勝ったつもりだろうが、その過酷な環境の中で人間はさらに数を減らしていった。智識と技術もだんだんと失われていき、それが現在も続く暗黒時代だ」

ここまでが過去から現在までの出来事である。

現在の砂漠化した世界は人間の仕様した兵器のためだったの



だ。

世界は枯れたまま、何千年もの月日が流れた。

そして、停滞していた世界の齒車が再び動きはじめる。

戦争は終結したが、アダムはまだ火星にいた。

「我々は火星で逆襲の準備を進めていた。しかし、還る術がなかった。機械人にとつても長い年月だった。そして、ついにチヤンスが訪れたのだ。あのライザという科学者が転送装置の復元に成功してくれた。それによって私は還ってくることができただ。あの出来事ばかりは確立ではなく、運が良かったと言う他あるまい。ライザが転送装置を復元し、こちらの転送装置と偶然にリンクしてくれた事に感謝する」

この時代の寵児。アダムがライザを高く評価していたのはこのためだ。

しかし、すぐに戦争は再開されなかった。

「だが、還つて来る事が出来たのは私ひとりだった。あくまで偶然だったからだ」

それからアダムは虎視眈々と準備を進めていたのだろう。鬼兵団のリーダー隠形鬼として。

機は熟した。

アダムが不敵に微笑んだ。

「火星には新たに生まれた一〇〇万を越える鬼械兵団がいる。彼らをなんとかしても青き星に呼びたい。その願いが 生命の実 によって成就するのだ」

なんと一〇〇万を越える兵がまだいるというのか!?

人間にとって最悪の脅威である。

さらにあの計画もある。

「もうひとつの願い。生命の実 を使って世界中にナノマシンウィルスを散布する。クーロンでの実験は成功した。あとは実行に移すのみだ」

すべてはあの小さな燦然と輝く実にかかっている。

トツシユが震える声で尋ねる。

「生命の実 ってなんなんだ？」

アダムが答える。

「レヴェエナが発明した究極の魔導具。この世が存在し続ける限り、尽きることはない膨大なエネルギーを生み出してくれる装置だ。元々はエデン計画の要として開発が進められていた物だったが、私の危険性を感じ始めたレヴェエナは開発を中止したと、私にも思わせていた」

智慧の林檎 と 生命の実 を手に入れれば、月の管理システムではなく神に等しき存在になる。智慧の林檎 を与えたのはリリス。はじめからレヴェエナは二つを与えるつもりがなかったのだ。エデン計画には 生命の実 だけが必要だった。

リリスのやったことは、結果として失樂園に繋がった。

しかし、それは罪か？

ダイナマイトの発明は罪だろうか？

それが戦争に使われるなど夢にも思わなかったとしても、生み出してしまったことは罪なんだろうか？

では、アダムそのものを生み出したレヴェエナには罪があるの

か？

機械として生まれ、“自分”として生きようとしたアダムこそが、罪を背負うべき巨悪なのか？

片一方の主張だけで、善悪を決められるようなものではない。戦争とはそうやって起きる。

アダムは話を続けている。

「レヴェエナの足跡を辿る事により、私は 生命の実 が完成されていた事を知り、ずっと探し求めていたのだ。まさかこの場所にあったとは、灯台もと暗しとは此の事だ。此の場所にある事はわかったが、私には此処まで来る術がなかった。同時に工デンの園への侵入は、おそらくリリースがいなければ不可能だっただろう。そして、まさか最後の鍵がアレンだったとは」

そして、先ほどの出来事に繋がった。

もう 生命の実 は奪われてしまった。

アダムの話も終わった。

「私は青き星に一足先に帰還する。御前達が還って来る頃には、どれだけの人間が機械人化しているか……ふふふふっ」  
いつものようにアダムが霞み消える。

レットドラゴン が吼えた。

「行かせるかッ！」

銃弾は揺らめくアダムの幻影を通り抜けた。

歯車が唸る。

アレンがアダムの手を取った。手はまだこちら側にあって掴めたのだ。

二人が消える。

空間の中にアレンも消えてしまう。

必死な顔をしてアレンが手を延ばす。

「だれか手え貸せ！」

伸ばしたアレンの手をいち早く掴んだのはセレンだった。

「捕まってくださ……きゃっ」

アダムが消え、アレンが消え、そしてセレンまでも消えた。

三人まとめて空間を転送されてしまったのだ。

《 5 》

それは刹那であった。

アレンがアダムに ピナカ を放ったのだ。

ここはどこか？

周りになにがあるか？

そんなことは関係なかった。

アレンの目と鼻の先にアダムがいた。

迸るエネルギーの直撃を喰らったアダムが背中を反らせながら大きく吹っ飛んだ。

アダムが落ちたのは芝生。だが、音はまるで金属が響き。

風もないのに揺れる木々と匂い立たない花々。

ホログラム映像の部屋だ。

なにもないはずの空間から、木の根が飛び出してきた。地面からではなく、真横からだ。

「招かれざる客だわ」

フローラの声だった。

植物を身に纏いしフローラの攻撃。木の根の槍が襲ったのはセレンだった。

セレンは身を守る術を持たない。当然アレンが動かざるを得ない。

再び ピナカ が放たれた。

笑うフローラ。

彼女の前に現れた天然ゴムが瞬時に固まり壁を作った。

ゴムの盾は ピナカ の電気エネルギーは通さなかった。だが、熱エネルギーによってゴムはいとも容易く溶けてしまったのだ。

溶けた盾の先にフローラはいなかった。

盾は囷だ！

地面を這って忍び寄っていた蔓がセレンの足を取られた。

「きゃっ！」

その蔓は瞬時にセレンの躰を雁字搦がんにがらめにしていた。

アレンは ピナカ を構えたまま、その動きを止めてしまった。

ゆっくりと起き上がるアダム。

「衝撃で吹き飛ばされはしたが、私に ピナカ が通用しないぞ」

アダムの服が焼け焦げ、その腹部分が露出されていた。白い肌だ。白銀のメタリックな肌だった。そこに傷ひとつついてい

ない。

ホログラム映像が消えていく。

芝生がただの金属の床へ、一本の木が円筒形の機器に、ただの無機質な部屋になった。

二対二。

しかし、セレンは人質に取られ、アレンは手出しができない。隙をつくるしかあるまい。そこでアレンが口を開く。

「なあ、ここどこだよ？」

「私の要塞 ベヒモスだ」

アダムが答える。フローラには隙ができない。

会話を続けることにした。

「場所は？」

要塞が重要拠点であり、それが秘密裏にされているのならば、答えづらい質問であるが、アダムはすぐに口を開いた。

「今はクーロンだ」

「クーロンですか!？」

声を上げたのはセレンだった。

アレンが『おまえは黙ってる』というような顔でセレンを睨み、アダムに向き直した。

「クーロンにいつの間基地なんかつくったんだよ？」

「新たなに造ったのではない。この場所に移動してきたのだ」

「移動？」

「地中を通って移動してきたのだ」

帝國が誇るキユクロプスも空飛ぶ要塞を云われていた。そう

に違いない。アダムの要塞 ベヒモス は地中を移動できる要塞なのだ。

セレンはクーロンのことを考えていた。自分が逃げ出してから、街はどうなったのか？

焼かれる街、逃げ惑う人々、そして魔導炉から放出された謎の発光体。

またアレンに睨まれて構わない。セレンは身を乗り出して口を大きく開けた。

「魔導炉を使ってナノマシウイルスをばらまくつもりですね！ 人間を機械化するなんて、人間の尊厳をなんだと思ってるんですか！」

アダムの眉がピクリと動いた。

「ナノマシウイルスによる機械人化は、魂の自由までも奪うものではない。人間の尊厳とは魂だ。我ら機械人も魂を持っている。姿形など入れ物に過ぎない。我ら機械人は過去の大戦において、機械人としての尊厳を人間に踏みにじられたのだ。私は人間が機械人化され、姿形が変わった上で、自分たちの魂と向き合ってもらいたいのだ。そして……」

それ以上は言わず、アダムは口をつぐみ、少し間を置いて再び口を開く。

「その娘はナノマシウイルスに感染させる。この場は私に任せ実験室に連れて行くのだ」

アレンの前に立ちはだかったアダム。その後ろでフローラが、セレンを捕まえながらこちらを向いたまま、後ろ歩きで部屋の

外へと移動していく。

躰に巻き付いた蔓からセレンは必死に逃げようとする。

「いやっ、機械になんてされたくない！ 私は自分が好きなんです！ 怪我也病気もするけど、自然のまま生きて、死んだら土に還りたい！ 私は人間として死にたい！」

アダムがセレンを睨みつける。

「御前は機械の存在を否定するのか、我々も生きているのだ！」

「違うっ、あなたたちを否定するつもりはありません。自分らしく生きるために、わたしは最後まで人間として、生まれたままの姿で生きていただけです。その権利をなぜあなたは奪うんですか！」

「早くその娘を連れて行け！」

今がチャンスだとアレンが動いた。

フローラはアダムの後を続けるか？

いや、鬼械兵団にアダムは必要である。アダムがいなければ、この組織は存在できないだろう。ならばセレンを救うよりもこの場でアダムを伐つ。

フローラもアダムがピンチに陥れば、人質の価値よりもアダムの価値を優先する可能性が高い。人質は一回限りしか使えない。つまり人質は生きているからこそ価値がある。人質を殺してしまうメリットはなく、枷がなくなればアレンは逆に自由な行動が取れる。

危険な駆け引きの争点は、アダムの存在の大きさだ。



アレンがアダムを追い詰めるほどの攻撃ができたとき、フロ  
ーラがどう出るか？

ピナカ から三本の輝く矢が放たれた。

「私に ピナカ は効かぬと 避ける水鬼！」

アダムに当たる寸前で三本の輝きは方向転換して、龍が長い  
首をうねらすようにフローラに向かって飛んだのだ。

違う！

三本の輝きは再びアダムへ方向転換した。

輝きの直撃を受けたアダムが大きく吹き飛ぶ。傷つけられな  
くても吹き飛ばすことはできる。それは先ほど証明済みだ。

悲鳴をあげるような歯車の音がした。

アレンは地面に倒れているアダムの後頭部を足蹴にして、天  
井高くまで舞い上がった。その手には ピナカ がしっかりと  
握られている。

まだだ、アダムに当たったの一本だった。残す二本がまだ生  
きていたのだ。

アレンはまるで鞭のように ピナカ から伸びる輝きを振る  
った。

急にアレンの視界から光が消えた。

そして、爆発に巻き込まれてアレンが天井高くまで舞い上が  
ったのだ。

いったいなにが起きた!?

宙から落ちてきたアダムが床に着地した。先ほどまで倒れて  
いたのに、なぜ宙にいたのか？

アダムとアレンの場所が入れ替わっていたのだ。

そして、ピナカ の攻撃は床に直撃して、アレンの躰を上  
に吹き飛ばしたのだった。

床に倒れたアレンの服はボロボロになり、生身の躰からは血  
が、機械の躰からは火花が出ている。

「糞つたれ……一〇〇万倍で返してやる……」

威勢のいい言葉だが、アレンはその場から立ち上がれなかつ  
た。

倒れているアレンをアダムが上から見下ろす。

「これで最後の問いとしよう。仲間にならないか？ 拒否すれ

ば仕方あるまい、死を与えよう」

「何度も言わせんなよ……い・や・だ！」

アダムの片手に集まる高エネルギー！

このときセレンは蔓に引きずられ、部屋の外に連れて行かれ  
ようとしていた。だが、セレンの瞳に映ってるのはアレン。

「逃げてアレン！」

歯車の音を立てなかった。

「あゝ、腹減った」

ぼそりと呟いたアレンは笑った。

自分が助かることをアレンは知っていたわけではない。

しかし、この部屋に新たな風が吹いたのだ。

風の刃はセレンを拘束していた蔓を微塵切りにして、さらに  
アダムの服を刻みながら吹き飛ばしたのだ。

フローラが叫ぶ。

「風鬼！」

どこからともなく部屋に現れた風鬼ことワーズワース。彼の眼差しは真剣そのものだった。

「セレンちゃんひとりで逃げ延びて！　ここは僕が押さえる、速く走って！」

戸惑うセレンは一瞬その場で硬直したが、すぐにひとりで逃げ出した。ワーズワースの言葉を信じたのだ。

恐い顔をするフローラと無表情のアダムにワーズワースは見つめられた。

「説明して、なぜこんな真似をしたの？」

「さあ、僕にもさっぱり、なんでだろうねえ、不思議不思議」

「おどけて見せたってダメよ！」

フローラはすでに攻撃を放っていた。木の根の槍がワーズワースを襲う。

先に仕掛けたのはワーズワースである。戦いになることは覚悟の上だった。

カマイタチが木の根を切り刻み、さらに優しい風がフローラの鼻をくすぐった。

急にフローラが痙攣しながら倒れた。眼は見開かれたままだ。につこりとワーズワースが微笑む。

「君の得意な痺れ薬。僕のは科学的に合成した無味無臭のものだけ。君なら体内で解毒剤を精製して、一〇分ほどで動けるようになるかな」

「……………な……………ぜ……………」

その一言だけを絞り出してフローラは完全に動けなくなった。冷たい瞳でアダムはワーズワースを見た。

「裏切りの理由を問おう」

「セレンちゃんには手出しはさせない。おまけに、アレン君も助けられたらラッキーかな」

やっとアレンが床から立ち上がった。

「俺はおまけかよ」

腕を回して自分の躰を確かめる。まだアレンは動けそうだ。

ワーズワースはビー玉のような物体を一気に何十個とアダムに向かって投げた。

「アレン君逃げるよ！」

「逃げるのかよ！」

「僕にはアダムを倒すことはできないからね。あとセレンちゃんも心配だ」

「だったらはじめから三人で逃げればよかっただろ！」

「いつぺんに全員で逃げるのは難しそうだったから。とりあえずフローラとアダムは足止めしないとね」

ワーズワースの投げた物体はアダムの周りを取り囲み、点と点が結ばれエネルギーフィールドの檻をつくり上げた。

セレンがひとりで危険を掻い潜るリスクより、アダムとフローラに追われながら逃げるリスクを大とワーズワースはしたのだ。

アダムが檻に触れた瞬間、火花が散ってその手を溶かした。手首から先を消失させたが、すぐにメタリックな手は再生され

た。

「無理に出ようとすれば、私とてただでは済まんな」

ワーズワースが部屋を飛び出す。

「時間稼ぎにしかならないから早く！」

「今のうちにぶん殴っちまえばいいだろ！」

「アダムも外に出られないけど、君もアダムに手を出せない仕様なんだよ」

先を進むワーズワースを追って仕方なくアレンも部屋を飛び出した。

廊下でいきなり鬼械兵どものお出迎えだ。

ワーズワースの放った圧縮した空気で鬼械兵を押し飛ばす。

だが、押し飛ばすだけだ。

「アレン君、なんか武器持ってないの？ 僕の風じゃ鬼械兵は

倒せない！」

「伏せる！」

アレンが叫んで ピナカ を放った。

床に這いつくばったワーズワースの真上を輝く三本の矢が抜けた。

圧倒的な破壊力で鬼械兵が薙ぎ倒される。廊下の壁にも巨大な鉤爪のような穴が空き、先にある部屋が丸見えだった。その部屋の中にはカプセルベッドが並び、鬼械兵が眠りついていた。新たな兵が起き出す前に早く逃げなくては。

ワーズワースが素早く立ち上がった。

「僕まで殺す気!？」

「だってあんた敵じゃないの？」

「もうこうなっちゃったから言うけど、二重スパイだったんだよ」

「二重スパイってどういうことだよ？」

「とにかく人間側、君たちの味方ってことだよ。ほら、さっさと逃げながらセレンちゃん探すよ」

廊下を再び走り出した二人の前に鬼械兵どもが現れた。

先にワーズワースは床に這いつくばった。

再び ピナカ で一掃だ。

「糞っ、なんだよ次から次へと出てきやがって」

「先に言うておくけど、要塞の中もこうだけど、外はもつと鬼械兵でいっぱいだから」

「はあ!? そんなのどうやって逃げるんだよ？」

「ごめんノーブラン。あの場を切り抜けるのが精一杯で、そもそもこの事態は予定外なんだよ。だって君たちがここに来るなんて思わないから」

ワーズワースは苦しい表情で唇を噛みしめた。

そこへ新たな鬼械兵が現れた。今度は鬼械兵だけではなかった。花魁衣装に身を包んだ火鬼だ。

アレンは嫌そうな顔をした。

「なんだ、生きてたんだ。死んだと思ってほつといたのに」「地獄から舞い戻ったでありんす」

その躰は顔の半分を残してすべて機械化されていた。その髪の毛の一本一本までもだ。

炎の攻撃にだけ注意すればいいと油断していた。

刹那だった。無数の針となった火鬼の毛がワーズワースの腹を貫いていたのだ。内蔵はポロポロになり、通常の手術ではもう手の施しようがない重傷。

歯車が咆哮をあげた。

アレンの拳が機械化されていた火鬼の頬を変形させるほど抉り、そのまま首がもげた。

床に転がった火鬼の頭部。首から火花が散って、謎の液体を垂れ流している。

「小僧……め……」

眼と口を開いたまま火鬼は停止した。

すぐにアレンはワーズワースを抱きかかえた。

「だいじょぶか！」

「無理ですね……これ死にますよ」

「さつさとずらかつて直してやるから我慢しろ！」

「そういう根性論無理です、僕理系なんです。本当にもう死にそうなので、頼まれごといくつか引き受けてください」

「早く俺の背中に！」

だが、もうワーズワースは壁にもたれ掛かり、座ったまま動くことができなかった。少しでも動けば、躰が崩れて横に倒れてしまいそうだ。

ワーズワースは床の上に垂れていた腕の先で、ゆっくりと手を開いて見せた。

そこに乗せられていたのは、小型メモリーと十字架のペンダ

ントだった。

「まず、メモリーはジェスリーに渡してください。十字架はセレンちゃんに」

「自分で渡せばいいだろ！」

「頼みましたよ、ほらこれを持って早くセレンちゃんを探してください」

アレンは無言でメモリーと十字架に手を伸ばした。

手と手が触れた。まだワーズワースの手は温かい。そして、ワーズワースはアレンの手を強く握り締めたのだ。

「頼みます」

そう言っつてワーズワースは残る片手で自分の腹に空いていた傷口に差し込んだのだ。

まさかの出来事にアレンは眼を剥いた。

「なにやっつてんだあんた！」

「これ僕の形見なんで、アレン君が使ってください」

ワーズワースが腹の中からえぐり出したのは、少し青みがかった透明の球だった。握った手が隠れそうな大きさだ。

「風を発生させる魔導具です。僕がつくったもので、本当は武器ではなくて送風機として、なにかの役に立たないかなあつて。僕がこれまでつくってきたものだって、レヴェナがつくってきたものだって、本当は戦いのためにつくってきたんじゃないんだ。でもね、レヴェナがつくったもので唯一の例外……それが

……く……る」

ワーズワースの息を止まった。



「糞っ」

小さく呟いてアレンはワーズワースの亡骸を背負った。重かった。アレンが背負うには重かった。

そして、アレンは走り出した。

第四章　そして未来へ

《1》

鬼械兵がセレンの前に立ちはだかった。

逃げられないことを覚悟したそのときだった。急に鬼械兵が停止して床に崩れたのだ。その中でただひとり立っている女だ。

金髪の鬘たてがみを靡かせるライザ。

「逃がしてあげるからついてきなさい」

「えっ!？」

状況が掴めず驚いた。

ライザはセレンたちを裏切って隠形鬼　アダムと　インド

ラ　から消えたのだ。そのライザがなぜ？

「早くして、アナタといっしょのところ見られたらアタクシの立場も危うくなるわ」

「どうして助けてくれるんですか？」

ヒールを鳴らしてライザがセレンの目と鼻の先に立った。セレンの躰に手を這わせたのだ。

「きゃっ、なにするんですか？」

「これよ」

ライザはセレンのポケットから玉を取り出した。それは光を失っているが、どこかで見覚えがある。

「それって　生命の実　ですか!？」

「そうよ」

「どうしてわたしのポケットに？」

「彼が偽物とすり替えたからよ。アナタはこれを持って逃げる義務がある」

「彼つてもしかしてワーズワースさんのことですか？」

ライザは頷いてから背を向けて、早足で歩き出した。

心が温かくなり、ほっとした気持ちがセレンを包んだ。生

命の実を奪ったわけでもなく、先ほどだって自分を逃がしてくれた。ワーズワースはやっぱ悪い人じゃなかったとセレンはニツコリとした。

二人は先を急ぐ。

ドアの前で立ち止まったライザは、センサーに手と瞳をかざした。

スライドして開いたドアの先は、乗り物の格納庫だった。走行用ベルトのついてない戦車やエアカー、飛行機などが格納されていた。

その中からライザは一人乗りの飛行機を選んだ。真上から見  
た形は、角の丸い正三角形で、横から見ると中心に透明なド  
ム状の屋根が乗っており、その中がコックピットになっている。

「わたし操縦できませんけど？」

「自動操縦だから大丈夫よ」

「はあ、よかった」

ドーム状の屋根が開き、セレンがコックピットに押し込まれる。ライザはタッチパネルを操作して、自動操縦で行き先を決

めているようだ。

その操作をしながらライザは何気なく話をはじめた。

「アスラ城で隠形鬼から一時的に逃げることできたのだけれど、それ以上の逃げ場は残されていなかったわ。そんなアタクシの前に現れたのが彼だった。良い旅を　　というのは彼の言葉よ」

最後にライザがボタンを押すと、コックピットの屋根が閉まりはじめた。

飛行機が静かに浮いた。

セレンは屋根を叩いて口を動かしている。完全防音のために、なにを言っているのかわからなかった。

艶やかに笑ってライザは手を振る。

そして、ボソツと呟く。

「ああ、ハッチ開けるの忘れたわ」

音速で飛び立った飛行機がハッチをぶち抜いて空に消えた。

夜明けと共にテントの中でアレンは目を覚ました。

「どこだよ……ここ？」

仮設テントではなく、生活感のあるテントだ。遊牧民が使用するゲルのようなものだろうか。

外に出ると、ターバンを頭に巻いたよく日に焼けた少年がいた。

「起きたか」

少し片言な口ぶりだ。

アレンは頭を掻きながら答える。

「ああ、起きた。なあ、俺の連れはどうした？」

「死んでたから埋めた」

「……そつか。あんがと」

寂しげにアレンは囁いた。

あれからなにがあつたのか？

ピナカを乱射しながらひたすら逃げた。セレンを探すつもりだったが、大量の鬼械兵に追われているうちに、フローラも復活して、いつアダムも現れるかわからない状態だった。そして、壁をぶち抜くと、夜が見えたのだ。追い詰められたアレンはそこから飛び出すしかなかった。

「必死すぎてなにも覚えてないや。あんたが俺のこと助けてくれたの？ どこで？」

「砂漠の真ん中で屍体を背負って倒れた。死んでるかと思っただら生きてた」

「あんがと。でさ、ここどこ？」

「砂漠の真ん中」

「位置的な意味で、近くにある村とか」

尋ねると少年は持っていた杖で遠い丘を示した。

「あの丘を越えたところに村があつた。でも今は人間がいなくなつた」

「死んだのか？ それとも戦争で逃げたのか？」

「人間が機械になつた。機械になつた人間は人間に殺された」

「ふん」

ナノマシンウイルスだろう。クーロンから近隣の村までもう広がっていると言うことだ。それよりも、機械人化した人間が殺されたというのが衝撃的だった。

家族や友人が機械人化してしまつたら、元の躰に戻そうとするだろう。それが無理でも殺すなんてことはできない。けれど、社会全体からすれば、人間も機械人化すれば脅威と見られるのかもしれない。さらに機械人化が伝染する可能性も考えたのかも知れない。

少年はアレンの機械の片手を見つめた。

「おまえも機械だろ。手当てするときに服を脱がした」

「半分。俺のこと殺す？」

「敵でも脅威でも、ましてや食料でもない。殺す理由があるか？」

「ないな」

ピナカ はアレンが携帯したままだった。服を脱がせて手当をしたとき、武器を奪われなかったのだ。いつの間にかできていた腕の傷は、薬草を塗られ包帯が巻かれている。視力を失った片眼に巻いていた布も新しい物になっていた。

「いろいろあんがと、じゃあ俺行くわ」

アレンが歩き出した方向は村があるという丘のほうだ。

だが、その足が止まった。

少年はアレンではなく、空を見つめていた。

飛空艇だ。

インドラ がこちらに向かってくる。

アレンは インドラ に向かって手を振った。

「お〜い」

相手はアレンに気づいているだろうか？

ゆっくりと降下してくる インドラ。これはアレンを迎えに来たらしい。

仮設テントの集落から少し離れた場所に インドラ は降り、少ししてからエアカーがアレンに向かって走ってきた。乗っている人影が見える。ジェスリーだ。

エアカーが停車してジェスリーが運転席から降りた。

「ご無事でしたかアレンさん」

「そっちこそ。俺のことよく見つけたじゃん」

「クーロンを偵察しようと飛行中、偶然アレンさんのエネルギー反応を検知しました」

「俺のエネルギー？」

「機械と人間の混ざった特殊なエネルギー反応なので、運良く見つけることができました」

ジェスリーは辺りを見回して、再び口を開く。

「セレンさんはどうしましたか？」

「はぐれた」

「そうですか。詳しい話は船に戻ってからしましょう」

操縦室にはリリス、トツシュ、ルオがいた。とりあえず、まだルオは大人しくしているらしい。アレンが ピナカ を持ち出したので、黒の剣 がなければ インドラ は動かない。

部屋に入ってすぐのアレンにトツシユが尋ねる。

「シスターはどうした？」

「はぐれた」

「おまえいつしよじゃなかったのか！」

「途中までいつしよだったけど、敵の基地ではぐれた」

そして、アレンはこれまでのことを話して聞かせた。

クーロンにある要塞 ベヒモス のこと、セレンとはぐれたこと、ワーズワースのこと、無我夢中で逃げてその記憶がないこと。

話を聞き終えたトツシユはアレンの胸ぐらを掴んだ。

「糞餓鬼、シスターを置いて逃げるとはどういうことだ！」

「ちげーよ、逃げ回ってたらそうなたんだから仕方ないだろ！」

睨み合う二人は同時に銃を抜いた。

その仲裁に入ったのはなんとルオだった。 いや、違った。

ルオはアレンの ピナカ を奪っただけだ。

「これで朕の 黒の剣 は返してもらおうよ」

「おい、俺の銃だぞ！」

「君ではないだろう。ライザの物だ、つまり朕の物だ。この飛空挺も朕の物になるわけだが、これは君たちにくれてやる」

そう言っただけルオはピナカをジェスリーに放り投げた。早く黒の剣 と ピナカ を取り替えるということだ。

アレンはここでさっき話していなかったことを思いだした。

「そうだ、あの兄ちゃんから預かってた物あったんだ。ジェス



リーにだってさ」

メモリーをアレンはジェスリーに手渡した。

「これは古い時代のメモリーカードです。わたくしの規格で読み込むことができます」

なんとジェスリーはメモリーを呑み込んだ。差し込み口は腹の中というわけだ。

見る見るうちにジェスリーの瞳が見開かれていく。驚愕だ。

機械人のジェスリーが驚愕している。

「なんとということでしょう。まさか……こんな重要なことを……」

「どうした？」

アレンが尋ねると、ジェスリーは深く頷いてから、話しはじめたのだ。

「このメモリーカードには、いくつかの情報と、わたくしに掛けられていたプロテクトを解くキーが記録されていました。簡単に言いますと、わたくしは意図的に記憶を封じられていたようです」

訝しげにトツシユが尋ねる。

「どなんだ？」

「ワーズワースの正体についてです。彼はわたくしをつくった三人の科学者のひとり、ジャン博士だったのです」

「ほう」

と、声を漏らしたのはリリスだった。

「妾も気づかなかった」

リリスにも気づかれず、ジェスリーの記憶も封じ、アダムにも知られていなかったのだろう。

ジェスリーは語りはじめた。

「ワーズワースとしてのジャン博士は、その姿形、声すらも当時とはまったくの別人として、生体の改造をしたようです。しかし、今ならわかります。しゃべり方には、当時の面影が少し残っていました」

懐かしそうな顔でワーズワースは話していた。

「ジャン博士はアダム追放後すぐにコールドスリープをしました」

「なにそれ？」

不思議そうな顔をしたのはアレンだ。

「コールドスリープとは、生きた人間を冬眠させる装置だと思ってください。その作業を手伝ったのがわたくしでした。そして、ジャン博士はこの時代に目覚めたようです。およそ一五年ほどの前のことです」

ジャンがコールドスリープ前に何歳だったかわからないが、一五年プラスしてあの若さというのは、なんらかの技術によるものだろう。ワーズワースの姿になったとき、見た目の若さも手に入れたのかもしれない。

「そして、今から二年ほど前、ジャン博士は隠形鬼の存在を知り、それがアダムだとすぐに気づいたのです。ジャン博士はワーズワースとなり、どうか鬼兵団の一員としてアダムに近づき、その動向を探っていたようです」

ジャンとして、ワーズワースとして、そして風鬼として、渡り歩き、数々の経験をしたことだろう。鬼兵団としてやりたくないことにも手を染めたかもしれない。

「すぐにアダムをぶっ飛ばせばすぐ話じゃなか」

アレンはいつもこうだ。

ジェスリーは丁寧な首を横に振って見せた。

「アレンさんの方法はシンプルですが、実現は難しいのです。ジャン博士にとって孤独な闘いでした。すでに文明は滅び、頼るものもなく、理解者もなく、大きな敵にどう立ち向かうのか。今は鬼械兵団が動き出したあとですから、その脅威について人間が認識することは簡単です。しかし、それ以前にたった一人の人間が、その脅威について人々に訴えかけたところで、だれがその話を信じるでしょうか。時代が時代でも理解されないことはあります。レヴェナ博士は危険性を示唆していたのに、戦争は起きてしまいました」

ワーズワースは吟遊詩人だった。彼は旅をしながら、なにを求め、なにを人々に訴えかけたかったのか。その記録もジェスリーは知っているのだろうか？

一呼吸置いてから、ジェスリーはさらに話を続ける。

「クーロンは古い時代、人間軍の基地があった場所でしたが、戦争の早い段階で機械軍に乗っ取られた場所です。あなた方がクーロンで魔導炉と呼んでいる物は、実際にはナノマシニングルスをつくり出すプラントなのです」

ここにセレンがいれば、それを目の当たりにした者として、

なんらかの発言があつたかもしれない。

一同の中には本当にそんなものが存在するのか、人間を機械人化するなどありえるのだろうか、そういった空気があることは否めない。けれど、リリスは現実味をもってその話を聞いている。もともとそれは彼女が研究していたものだからだ。あの妖女リリスたるものが、複雑な顔をしている。

トッシュが発言する。

「魔導炉を壊せばナノマシンウイルスの危機は防げるってことだな？」

しかし、それに反対する者がいた。

「魔導炉は国の維持に必要な不可欠なものだ。破壊するなど朕が許さぬ」

これはルオの意見だけでは済まないかもしれない。ナノマシンウイルスの脅威を考えれば、魔導炉を破壊するのもうなずける。けれど、魔導炉のエネルギー資源の恩恵を受けている立場は、それが失われることをどう思うだろうか？

豊かな暮らしから、厳しい砂漠の真ん中に放り出されると知つたら、自分たちの生活を守ろうと立ち上がる者がいるのではないだろうか？

周りで人々が苦しんでいようと、戦争の真つ最中であろうと、私利私欲を守ろうとする者たちは絶えない。

トッシュとルオが睨み合う中、それを割ってはいるように、ジェスリーは話をして自分に視線を向ける。

「プラントを停止させるなり、破壊することは可能ですが、空

中に散布されたナノマシンウイルスを停止させることは通常の方法では不可能です。その唯一の対抗手段として、ジャン博士は 黒の剣 を考えていたようです。加えて 生命の実 がアダムの手に落ちた場合の対抗手段としても、 黒の剣 が有効とのことでした」

黒の剣 の秘密、知りたくはありませんか？

そうワーズワースに言われて、ルオは旅の同行をしたのだが、月へ行ってもわからず終いだっただ。ルオはジェスリーの話に興味を持った。

「朕の 黒の剣 がなんだというんだい？」

「黒の剣 の理論はもともと 生命の実 の副産物として生まれました。 生命の実 が無限のエネルギーを放出するものならば、 黒の剣 は無限にエネルギーを吸収するものです。実際には吸い取ったエネルギーを放出することも可能で、複雑な作用をするものなのですが、膨大な 生命の実 のエネルギーを吸収して、相殺できる唯一の受け皿ということが重要なことです」

ワーズワースがアレンに言い残そうとしたことだ。あのときは最後まで語られることはなかった。

レヴェナが唯一の例外としてつくったもの。すなわち戦う目的のためにつくったもの。それが 黒の剣 。

その真価についてジェスリーが語る。

「それだけではありません。 黒の剣 は使い方によつては、この世の全てのエネルギー活動を停止させることが可能です。

「アダムとてその例外ではありません」

それは“死”である。

ある意味、どのような経由でシユラ帝國に渡ったのかわからないが、シユラの煌帝が持つに相応しい象徴的な武器だ。

再びトツシユガルオを睨む。

「そんな危険な物、絶対おまえに返ささんからな」

「黒の剣 は朕の物だ」

ザザザザ……ザザザザ……

どこからか聞こえてきたノイズ音。

船内のスピーカーがなにかを拾っている。

《……私の名はアダム》

無言のざわめきが操縦室を包み込んだ。

それは全世界へ向けてのアダムの演説であった。

ラジオやテレビなどを含む、すべての電波をアダムはジャックしたのだ。

《2》

砂の海原にセレンを乗せた飛行機は墜落していた。

攻撃を受けたのだ。

地上からの何らかの攻撃を受け、砂漠のご真ん中に墜落した。その衝撃でセレンは今の今まで気を失っていたのだ。

操縦席に響く声でセレンは目を覚ました。

《……私の名はアダム。人間ではなく機械である》

それは全世界に向けられた演説だった。

《そして、この青き星の始皇帝となる者だ》

世迷い言にしか聞こえない言葉だが、それは現実の物になるうとしていた。

《機械の兵士たちが、世界各地で人間たちを制圧していることは、すでに多くの者の耳に入っていることだろう。それが我が軍　鬼械兵团である。手始めにシユラ帝国領のクーロンを落とし、その後、二大強国である神聖クリフト皇国の総本山クリフト市内と宮殿はすでに我が手中にあり、ロマンジア連邦の首都クアモスも制圧済みである》

かつては三大強国であり、そこにシユラ帝國が名を連ねていた。

《人間がすべての武器を捨てて我々に降伏しない限り、この戦争は続く。私の目的は人間の自由を奪うものではない。人間は武器を捨て、我々の存在　自立した機械を人類として受け入れる以外は、今まで通りの生活をすればいい。私がこの星を統治すれば、ロストテクノロジーのすべてが現代の技術として蘇り普及し、人間にとつても豊かな生活が実現するだろう》

目的に嘘はない。失われた時代も復古するだろう。だが、人間がアダムのやり方が受け入れ、機械人と人間が良好な関係を築くことができるのか、それが問題なのだ。

《我々の存在を受け入れがたいのなら、機械人になってみるがいい。特殊なウィルスによって、人間の肉体を機械に置き換える技術がある。すでにクーロン周辺で実験済みであり、

人間が機械人化した事実は、一部の人間の耳に入っていることだろう。この技術は身体のみを変化させるものであり、人格を支配したり奪うものではない。にも関わらず、人間たちは機械人化した人間を虐殺している。実に愚かだが、元の身体でも殺し合いをするような種なので仕方あるまい》

操縦席に流れる放送を聞きながらセレンは目を伏せた。

「人間同士で殺し合いをしていることは認めます。けど、機械人が人間を殺すのとなにが違うんですか。このひとのやろうとしてることは……矛盾してる」

機械はよく〇か一かと言われる。イエスであるか、ノーであるか、そこ矛盾はなく、プログラムにミスがあれば、システムエラーが起こる。

《今から一時間後、このウイルスの散布を本格的に開始する。その二時間後、一〇〇万以上の鬼械兵が新たにこの星に投入される。そして、これから七日間、二四時毎に衛星から地上に向けて攻撃をする。これはかつて メギドの炎 と呼ばれた兵器だ。天から炎が降り注ぎ、地上が地獄の業火で焼き尽くされ、世界が砂漠化すると言えば、人間たちにも伝わるだろう》

どこまで脅しだろうか？

本当に地上を焼き尽くするつもりだろうか？

人間だけでなく、青き星まで滅ぼすつもりだろうか？

ふと、セレンの脳裏に浮かんだ光景。月で見たエデンの園、そして ベヒモス で見た似たようなホログラム。

《地獄と天国、選ぶのは御前たちだ。武器を捨て、降伏せよ。



さすれば理想郷の実現を約束しよう!」

そして、通信は途絶えた。

自分になにができるのか、セレンは考えずぐに行動した。

「とにかく 生命の実 を……そうだリスさんに届ければ、わたしにできることをしなきゃ!」

目の前に立ちただかる問題は多い。

操縦席から見える景色は砂と空。準備もなく外に飛び出すなど無謀すぎる行為だ。だからと言って、セレンに飛行機は操縦できない。

「もつと別の場所に落ちたら……ッ!」

セレンはハツとした。この飛行機は落とされたのだ、地上からの攻撃によって。

いったい何者による攻撃だったのか、その脅威はまだ近くにあるのだろうか?

破れかぶれでセレンは操縦席のタッチパネルを操作した。

すると、操縦席の屋根が開いた。

肌を刺す陽と熱。

「閉めないで焼け死ぬ!」

想像以上の過酷な環境だった。汗がどつと噴き出してくる。

セレンは知る由もないが、この場所は 死の海原 と呼ばれる広大な砂漠地帯だった。なにもない高熱の砂漠地帯と云われ、その場所に立ち入り者などいないような場所。世界から忘れられた地と云ってもいい場所だった。

突然、セレンのポケットが燦然と輝きはじめた。

「えっ、なに!？」

驚くのはまだ早い。

地中が盛り上がり、砂が滝のように流れる光景。なにもなかった砂漠に巨大な箱が現れる。それには巨大な扉がついていた。重々しく見える二枚扉は、滑らかに左右に開いた。

セレンは操縦席から飛び出した。砂に足を取られバランスを崩し、地面に手をつけると、じゅっと火傷をってしまった。

「熱いっ」

ここに居ても仕方がない。だからと言って、扉の先になにがあるかわからない。それでもセレンは導かれるように扉の中に入った。

それは箱で行き止まりだった。明かりがついており、壁にボタンがついている。二つ並んだボタンの下に配置されているものが光っている。

「きゃっ」

セレンは身構えた。

箱が下へ移動しているのだ。そう、これは巨大なエレベーターだったのだ。

高速で移動するエレベーターは地下へ地下へと進んでいる。

身体がふっと浮き上がるような感覚して、エレベーターは停止した。

開かれる扉。

セレンを待ち受けていたものは、大勢のビームライフルを構えた機械人だった。

一瞬にして頭を過ぎったのは、鬼械兵団。飛行機を攻撃された理由も頷ける。

しかし、今まで見た鬼械兵とはタイプが違う。この機械人たちには、顔があり表情があったのだ。

機械人が道を空ける。向う側からやってくる影。それは四つ足であつた。黒き毛を持つ狼だ。

セレンの前まで来た狼は、なんと話しかけてきたのだ。

「私の名前はマルコシアス。もしや、あなた様はセレン様ではありませんか？」

「えっ……あ……は、はい……」

獣が人間の言葉をしゃべつた。清廉そつな青年の声音だつた。狼の肉体の構造上ではありえないことだ。

驚くセレンは言葉に詰まる中、狼はそれが自然体というように、また口を開く。

「セレン様が私のことを覚えてないとも仕方のないこと。まだセレン様は生まれたばかりの赤子だったのでから」

「赤ちゃんだつたわたしを知ってるんですか？ そんなどうして……それはいつのことです？ だってわたしは捨て子で、教会の神父さまに拾われたんですよ？」

疑問符が次から次へと頭の周りを回る。セレンは瞳を丸くして、驚きと混乱に陥つた。

「教会の神父さまに……さぞや、大変な苦勞をなされたことかと……」

マルコシアスは涙ぐんでいるようだった。

この状況でセレンは混乱するばかりだ。

「あなたはいつたいどのような方で、わたしのなにを知っていて、ここはどのような場所で、一から説明していただけないと、なにもわかりません」

「この場所は第零メカトピア。世界からも歴史からも完全に隔離された機械のみが暮らす街です」

ジェスリーの話ではメカトピアは第一から第三までの三都市のみだったはず。ただし、ジェスリーが伏せていたため、セレンはその話を知らない。ここではじめて機械人の暮らす街の存在を知ったのだ。

マルコシアスが背を向けた。

「どうぞ、私の背中にお乗りください。記念碑の前まで行きましよう」

「本当に乗っていいんですか？」

「お構いなく」

「じゃあ、失礼します」

恐る恐るセレンはマルコシアスに跨った。すると、マルコシアスに黒い翼が生えたのだ。それはまるで鴉の羽根だ。

「きゃっ！」

「毛に捕まってくれて構いません」

そう言っただけでマルコシアスは翼を羽ばたかせ空を飛んだのだ。

空から見る街並みはジェスリーのいたメカトピアと似ていた。その街の中心に開けた自然豊かな公園があり、さらにその中心の芝生地に女の銅像が建っていた。

それはレヴァナの姿だった。

「あれってレヴァナさんですよね？」

「ええ、セレン様の母上様です」

「……………」

驚きのあまりセレンは言葉を失った。放心だった。

マルコシアスが銅像の前に降り立った。

無言のままセレンは銅像に近づき、台座に乗るレヴェナの姿

を見上げた。

ホログラム映像を見た。

そして、アダムの顔として見てきた。

しかしここで見るレヴェナは今までとは違う感情をセレンに抱かせた。

「急にそんなこと言われても……だってこのひとつで、ずっと昔に生きていたひとなんですよね？ わたしまだ一六歳ですよ……その年齢も本当はたしかなものじゃないんですけど。このひとがわたしのお母様だなんて、信じられるわけがないじゃないですか」

「私には高度な生体認証システムがついています。あなた様は九八パーセントの確率でセレン様です」

「だってわたしの名前はセレンですから、セレンなのは当たり前です。この名前はわたしが拾われたときに、唯一持っていた十字架に古い時代の文字で刻まれていたそうです。でも……そんな……もしその話が本当だったとして、なぜわたしは捨てられ、この時代に生きているんですか？」

「セレン様は捨てられたのではありません。不幸な出来事が重なってしまっただのです」

「詳しく教えてください！」

身を乗り出してセレンは声を荒げた。

両親の顔も名前も知らずにセレンは育った。赤子だったセレンを拾って育ててくれたのは、若い神父とシスター・ラファエイナだった。二人はもうこの世にいない。それからセレンはずっと独りだった。

「まずは私のことから簡単に説明いたしましょう。私はレヴェナ様につくられたベツトアンドロイド。レヴェナ様に仕え、セレン様がお生まれになったときのこともよく知っています」

「あのっ、わたしの父は？」

「お父上に関しては、レヴァナ様はなにもおっしゃいませんでした。未婚の母だったのです」

「そうですか……」

セレンの声は沈んだが、すぐに笑顔でマルコシアスを見つめた。

「あ、話を続けてください」

その笑顔を見たマルコシアスは、銅像を見上げて話しはじめる。

「セレン様は生まれて間もなく難病にかかりました。当時の医療技術では、ナノマシン細胞やサイボーグ化でしか助からない病気でした。しかし、レヴェエナ様はその手術をすることに反対でした。当時としては珍しく、レヴェエナ様は自身をまったく機

械化されていない方でしたし、まだ自分で判断ができない赤子のセレン様の身体を勝手に機械化することを嫌いました」

ホログラムで見た映像、そしてここにある銅像、どちらのレヴェナも眼鏡をかけていた。眼鏡というものは、ファツシヨンを覗いて珍しいものだった。

今の話にマルコシアスは付け加える。

「勘違いなさらないでください。自身の身体をまったく機械化しないからと言って、我々アンドロイドのことを嫌っていたわけではありません。ただレヴェナ様は、己は己らしく生きたいというお考えの方でした。自分の生き方を他人に強要されたり、勝手に決められたりすることを嫌う方だったのです」

難病だったと聞いて、セレンは疑問が浮かんだ。

「今のわたしは健康そのものですか？」

「レヴァナ様はセレン様の病気を治すため、治療薬が開発されるまでコールドスリープさせたのです」

「コールドスリープってなんですか？」

「眠りについて、歳を取らないまま時間を過ごす方法です。しかし、大きな不幸が起きてしまいました。戦乱の最中、セレン様のコールドスリープ装置が紛失してしまったのです。それから何十世紀もの間、セレン様の行方はわからず終いでした。それから先にことは私にもわかりません」

「え？」

小さく声を漏らしてしまった。とても驚くと言うより、啞然としたのだ。肝心な部分が話として欠落している。

マルコシアスはセレンをまじまじと見つめた。

「私が見たところ、セレン様の健康は良好のようです」

「はい、自分でもそう思います」

「実はあの難病の治療薬は現在でも開発されてません。さらにその病気はもうこの世に存在していない」

「じゃあどうして治ったんですか？　って聞いてもわからないですよ」

「断片的な推測でよろしければ」

「せひ！」

と、セレンは身を乗り出した。

「実はコールドスリープについたのはセレン様だけではありませんでした。本当ならレヴェナ様が……」

マルコシアスは言葉に詰まった。

「アダムに乗っ取られたからですか？」

「ご存じでしたか……ごく一部の者しか知らない事実です。妹のリリス様にも伏せられていましたから。セレン様が目覚めたとき、治療をして、その後を見守る者が必要でした。アンドロイドが適任なのですが、レヴェナ様はそれを自分の手で行いたいと考えていたようでしたが、それもできなくなってしまわれた。そこである方が名乗りをあげました。レヴェナ様の知人の科学者でした。彼はセレン様に遅れて、共に眠りにつきました。そして先ほども話したように、戦乱の最中にコールドスリープ装置が紛失してしまいました」

「わかりました、その科学者さんがわたしのこと治してくれた



「……ってことですよね？」

「そうです。セレン様の病気の事情を知っている彼が、治療方法を探して治したと考えるのが自然かと。そうになると、ご一緒が目覚めたはずなのに、彼はどうしてしまったのかという疑問が残りますが」

「コールドスリープ装置紛失から、セレンが教会で拾われるまでの間、その空白にながあったのか？」

「やっぱり本当にわたしって、レヴェナさんの娘のセレンなんですか？」

「私の認証システムではほぼそうだと思います。それに十字架の話なさってましたよね？ もともとそれはレヴェナ様の物です。見せてくださいませんか？」

セレンは自分の首もとを触った。

「あ……ない。うそ……どこかに落とすなんて……」

「そうですね、それは残念なことです」

「……でもがんばって見つけます」

気持ちを切り替えてセレンは話を続ける。

「もしここで十字架を見せて、それがレヴェアナさんの物ですって言われても、やっぱり実感が湧かないと思うんです。実感はないけど、本当にお母さんの存在がわかって、ちょっぴり嬉しいです」

セレンは目元を指で拭った。

「つかぬことをお伺いするのですが、もしやあの小型飛行機におられたのはセレン様でしたか？」

と、マルコシアスは尋ねた。

「たぶんわたしが乗ってきたものだと思います。攻撃を受けて墜落してしまつて」

「嗚呼、なんてことを……実はその攻撃をしたのは、この街を守る自動防御システムなのです」

「だいじょぶです、わたし怪我とかしてませんから。怨んだり怒つたりもしてませんよ！」

マルコシアスは頭を垂らして、ひどく落ち込んでいるようすに見える。

セレンのほう慌ててしまう。

「だいじょぶですから、本当にだいじょぶですから、ぜんぜん気にしてませんから！」

「お氣遣いかたじけない。ところで、なぜこの場所に来られたのですか？」

「それは偶然……」

本当に偶然だったのだろうか？

墜落したのは偶然だったかもしれないが、この場所に飛んできたのは、偶然ではなかったかもしれない。自動操縦にセットしたのはライザだ。ならば、ライザはこの第零メカトピアの存在を知っていたのか？

マルコシアスは狼の顔だが、凜と表情をさせたように見えた。「偶然だとしても、レヴァナ様の娘であるセレン様が居られるだけで我々は心強い。地上でアダムとの戦争が起きていることを我々は知っています。そして、第零メカトピアの住人は、ア

ダムと戦う決意していたところなのです」

「もしかして、これが役に立つじゃないですか！」

セレンはポケットからある物を取り出して見せた。

驚きで眼を剥くマルコシアス。

「まさか……それは 生命の実 ではッ!?」

《 3 》

クーロンを包囲した多国籍軍。

戦車部隊の一斉砲撃が市壁を攻撃した。

その様子をアダムは ベヒモス の司令室の巨大モニターで見ていた。

「この場所を攻撃してきたのは、我々がここにいと知ってか……」

特定の軍が攻撃してきたのではない。鬼械兵団との本格的な戦闘をするために、人間は連合を組んでいる。機械と人間という明確な線引きの戦いだ。

「予定通り零號炉ゼロノウを始動させ、ナノマシンウイルスの散布をはじめろ」

アダムの命令で鬼械兵が動き出す。

魔導炉の天井が花開き、花粉のように光球が舞い上がる。

そのさらに上空に現れた インドラ。

アダムは インドラ の下部が輝くのを見た刹那、

「飛空挺に魔導砲を放て！」

叫んだ。

魔導砲の巨大な光線が天を突かんとした。

急旋回した インドラ に魔導砲が掠った。

天を進る稲妻。

傾いた インドラ が魔導砲を横に発射してしまったのだ。

そして、都市は沈黙した。

停電だった。

ナノマシンの散布も止まっている。

アダムが咳く。

「なにが……起きた？」

動力が別になっっている ベヒモス は稼働している。

アダムは振り返った。

その先には壁により掛かり優雅に珈琲を飲むライザの姿。

ライザは唇を舐めて艶笑を浮かべた。

直感するアダム。

「なにをした！」

「あら、まるでアタクシが悪さでもしたような言い方。アタク

シは最善の仕事をしたわよ。偽物の 生命の実 でもシステム

が稼働できるようにしたもの。偽物ではやはりエネルギー不足

が起きてしまったけれど」

偽物だと知っていて、それをアダムに報告しなかった。

「本物はどこにある？」

「シスターが持ち逃げしたわ」

「この女を監禁しておけ！」

アダムが叫び、鬼械兵がライザを連行していく。

さらにアダムは命令する。

「ライザが関わったシステムを早急に点検しろ。それが終わったら全システムの点検だ！」

怒っていた肩をアダムはゆつくりと落とした。

「なぜ人間という動物は裏切るのだ。何度も何度も私は人間に裏切られた。なぜ人間は裏切る？」

裏切るといふ言葉の意味を理解していても、なぜ裏切るのかという心理が理解できない。ゆえに裏切られることを予見できず、今回のような事態を引き起こしてしまった。

鬼械兵がアダムに身振り手振りなにを示している。電波による会話をしているのだ。それを聞いたアダムはすぐに巨大モニターの映像を切り替えた。

「市壁が“切断”されただと？」

戦車の上に立ち、多国籍軍の先陣を切っている漆黒の大剣を構えた少年。その軍勢は分裂していたシユラ帝國の残党がほとんどだった。今も煌帝ルオの威権を象徴する軍だった。

ルオの立つ戦車に追いついてきた別の型の戦車。その戦車の上には軽合金プロテクタースーツを装備した大柄の男。フルフェイスのマスクから若干覗ける顔はトツシュだった。

「俺様より先に行くな！」

「君と競争をしているつもりはないよ」

と、言いながらもルオの戦車はスピードを上げた。

「おい、待ちやがれ！」

と叫んでから、マスクについた通信機でトツシユは、  
「スピードを上げる」

と戦車の操縦者に伝えた。

切断された市壁の裂け目は戦車が横並びで二台通れるくらいだ。そこから鬼械兵がわらわらと湧き出してきた。

トツシユは背負っていたバズーカを構えた。

が、黒の剣の放った衝撃波が先に鬼械兵を一掃した。

トツシユは戦車の屋根を強く蹴飛ばすように踏んづけた。

「あの餓鬼っ、またいいところ取りしやがって！」

シユラ帝國の残党軍がルオに続いて市内に突入していく。

負けじとトツシユも進撃する。

「全軍一気に進めーッ！」

通信機でトツシユが命じると、残る軍隊も激進した。革命軍を中心として、他国の軍なども含めた連合軍。

煌帝ルオと英雄トツシユの名前で集まった軍だ。

そして、空からは インドラ。

インドラの狙いは魔導炉の破壊だ。

阻止するためにアダムが叫ぶ。

「飛空挺を魔導砲で打ち落とせ、なんとしても！」

ヘビモスがその顔を インドラ に向けた。移動要塞  
ヘビモスの全容はまるで象牙を生やした河馬かばだった。巨大  
な口を一二〇度以上開き、そこから魔導砲を発射したのだ。

天まで届く輝ける塔のような光線が何本も何本も発射された。  
その光線の間を掻い潜る インドラ。避けることに精一杯で

攻撃に転じられない。

鬼械兵から電波で報告を受けるアダム。

《零號炉のエネルギー源を元のシステムに変更しました》

「すぐに最大出力で稼働させる」

再び魔導炉からナノマシンウィルスが散布される。それは今までの光球とは違うものだった。光り輝く翼の生えた赤子。まるで天使の子のようなものが空を舞い、やがて弾け飛んで光球となつて世界に降り注いだ。

それは宗教画のような光景だったと共に、この戦場においては不気味な光景だった。目の当たりにした人間たちの志気が揺らがされた。

さらに花開く魔導炉から、巨大な人影がせり出してきた。まるでそれは裸体の女。燦然と輝くナノマシンウィルスの集合体が、魔導炉よりも巨大な女の姿となつて生まれ出たのだ。

輝く女 は愛を振り撒くようにゆっくりと両手を広げ、ナノマシンウィルスの光球を風に乗せた。

全身をプロテクターで覆っていた騎鳥部隊の兵士が、突然クエック鳥から転げ落ち悶えはじめた。

「ギヤアアアツ」

周りの兵士たちも次々と転げ回り、中には装備を脱ぎ捨てようとする者まだ現れた。

「中に……ギヤアアアツ……入つて来るツ！」

フルフェイスマスクを投げ捨てた兵士の顔が、見る見るうちにメタリックに侵蝕されていく。

「退却しろーッ！」

機関銃を乱射して鬼械兵と交戦していた大男が叫んだ。全身プロテクターで顔はわからないが、その声はヴェリバルト大佐だ。

ナノとはその単位の一〇億分の一を表す。メートルであれば、〇・〇〇〇〇〇〇〇〇メートルである。

さらにナノマシンとは、〇・一から一〇〇ナノメートルの機械装置である。隙間と言える隙間がなくなるとも、プロテクタースーツの中にまで侵入することは可能だった。

輝く女 からすれば、それは顔の前を飛ぶハエだったかもしれない。しかし、それはその大きさからは想像もできないほどの、禍々しい鬼気を放っていた。

黒の剣 をサーフボードのように乗りこなし、ルオは 輝く女 の眼前まで飛んできていた。

しゃがんで柄を握ったルオ。

刹那、振り下ろされた 黒の剣 が 輝く女 の顔面を切断した。

鬼のような形相をして大きな口を開ける 輝く女。叫び声は聞こえなかった。

そのままルオは重力に身を任せ、輝く女 の股まで切り裂き、その輝く身体が 黒の剣 に吸いこまれ吞まれていく。さらに魔導炉にまで斬撃を喰らわせた。

破壊された魔導炉に構っている余裕は ベヒモス にはなかった。



なんと、インドラ が特別攻撃を仕掛けてきたのだ。つまり体当たりだ。

上空から猛スピードで迫る インドラ を ベヒモス の機動力で躲すことは不可能だった。

大きく開かれた ベヒモス の口から魔導砲が発射された。防御フィールドを展開していた インドラ だが、魔導砲の直撃を受けて大きく船体を損傷させ、煙を上げながら墜落する。はじめから墮ちるのが目的だ。関係ない。

轟音を響かせ インドラ は ベヒモス の口の中に突っ込んだ。

そして、その場で インドラ は魔導砲を放ったのだ。

雷鳴が轟く。

無数の籠に似た稲妻がうねり狂いながら インドラ と ベヒモス を絡め取った。

沈黙した。

ベヒモス の司令室は暗闇に閉ざされ、完全にエネルギー供給をストップしてしまっていた。

「おのれ、捨て身で来るとは……人間とは恐ろしいものだ」

暗闇の中でアダムは辺りを見回した。

「機能が生きている者はいるか？」

暗闇の中で火花が散っている。そこから中からだ。ベヒモスの機器類から鬼械兵まで、インドラ の魔導砲で感電してしまっただのだ。ピナカ の直撃を受けても平気だったアダムだけが立っていた。

艦内にアダムは通信電波を飛ばした。

《全員この艦を捨てて退避せよ》

そして、司令室から一瞬にして消えた。アダムが立っていた場所には、換わりに鬼械兵が現れた。

アダムが空間転送で向かったのはエンジンルームだった。

ベヒモスは停止してしまっただが、そのエネルギー源は無事だった。

秤の上に乗せられている大きな袋。これがベヒモスのエネルギー源だった。大地の袋と呼ばれるこの魔導具は、大きさは人の胸ほどの袋だが、その重さは大地と同等。この重さ、重力をエネルギー変換して、ベヒモスを動かしていたのだ。アダムは大地と同じ重さの大地の袋を軽々と持ち上げた。そして、空間転送でベヒモスの外にいた鬼械兵と場所を入れ替えた。

灰と化しているクーロン市内は鬼械兵と人間の戦闘が激化していた。

さらに人間と人間の戦いも。

レッドドラゴンの銃口の先にはフローラが立っていた。

「勝ち目のない戦いよ」

「それは人間が機械にとって意味か、それとも俺様はおまえにとって意味か？」

「両方」

フローラの身体から槍のような植物が放たれた。

銃声が吼えた。

腹を無数の蔓で貫かれ、トツシユは苦しそうな顔をしてよるめいた。

「なぜ避けなかった？」

「あなたこそ」

苦しげに囁いたフローラも腹を押さえていた。その指の隙間から滲む鮮血。

膝をついたトツシユ。

「相打ちなんて最悪だな……女の死に様なんで見るもんじゃない。なんで撃たれたんだよ！」

「どちらに転ぶかわからないけれど、戦争はもうすぐ終わるわ。はじめから戦争が終わったら自ら命を絶つつもりだったの」

「罪滅ぼしか？」

「この星のためにやったんだもの、後悔なんてないわ」

トツシユの傷口からゆつくりと蔓が抜かれていく。

驚いた顔をするトツシユの顔色が少しずつよくなっていく。

同時にフローラが枯れていく。

全身から水分が失われ、年老いて目も呉れないほどの老婆と化していく。

自分の腹の傷が癒えたのに気づいてトツシユは悟った。

ゆつくりとトツシユはフローラに近づき、その息を確かめた

が。

「……胸糞悪い」

フルフェイスを脱ぎ捨て地面に叩きつけた。

そして、煙草を加えて火を付けた。

「こんな糞不味い煙草はじめてだ」

戦争はまだ終わっていない。トツシユは レッドドラゴンを握り締め大地を踏みしめて歩き出した。

一方、インドラ の操縦室ではリリスとジェスリーが地獄から蘇った敵と対峙していた。

首をもがれても、また新たなボディを手に入れ復活した火鬼だった。

「此処で会ったが一〇〇年目、息の根を止めてあげんす！」

「懲りない子だねえ」

リリスはぼやいた。

ジェスリーは物陰に隠れている。

「わたくしは戦闘用ではありませんので、見守っていてもよろしいでしょうか？」

「年寄りをこき使うんじゃないよ」

しかも、リリスは岩だ。

しかし、火鬼とて炎の使い手である。

炎と岩。

「わたちの炎は岩を溶かす色気があるのでありんす」

扇から放たれた炎は金属の床を溶かしながら、リリスの身体を包み込んだ。

にやりと笑う火鬼。

炎の中で妖女は艶やかに微笑んでいた。

「餓鬼に惑わされる妾ではないぞよ」

石触手が伸び、生身だった火鬼の目玉を貫き、後頭部から飛

び出した。

火鬼は口をわなわな震わせた。

「地獄で……待つてる……」

顔面から石触手が抜かれ、リリスの身体に戻っていく。

そこに立っているリリスの姿を見てジェスリーは驚いた。

「そのお姿は？」

「やっと此奴の精神を全部喰らうてやったのじゃ」

そこに立っているのはまさしく妖女リリスの姿。だが、その身体には光沢があり、黒い御影石のようであった。形状は妖女リリスだが、その素材は石なのだ。

「じゃが、まだ自由に動けぬ。運んでくれるか？」

頼まれてジェスリーがリリスを持ち上げようとしたが、足が数センチ浮いただけだった。

「見た目から計算できないほどの質量があるようです。わたかし一人では運べそうもありません」

「仕方ないのお」

リリスが浮遊した。

ふわふわと不安定に空を飛びリリスを見てジェスリーは、「飛べるのならわたくしに運ばせなくてもよかったのでは？」

「今試したらできたのじゃ」

二人は操縦室を急いで出た。

ルオ、トツシュ、リリス、ジェスリー。残るアレンはアダムの前に立ちただかっていた。

「その袋持ってどこ行く気だよ？」

黒い眼帯で片眼を覆うアレン。  
その身体の周りには風が渦巻いていた。

《 4 》

「ふふふ。私を追い詰めたつもりか？」

アダムは不気味に笑った。

魔導炉も ベヒモス も、フローラも火鬼も、失われた今、  
アダムは劣勢に立たされたのか？

否。

それは戦いの一部にしか過ぎない。

市内に響き渡っていたのは人間の悲鳴だった。

鬼械兵団の圧倒的な戦力で、人間が次々と息絶えていく。鬼械兵は腕がもげようと、足を失おうと、悲鳴一つあげず、まるでゾンビのように襲い掛かってくる。死の軍隊を相手にしている気分だ。

アレンは気づいている。アダムには少なくともあと二つの切り札がある。火星にいる一〇〇万を超える鬼械兵と、人工衛星からの地上へ向けての攻撃 メギドの炎。

たとえ 生命の実 がなくとも油断できない。それにアレンたちは 生命の実 がアダムの手にないことをまだ知らないのだ。警戒を強めている。

「その袋はなんだよ？」

「知りたいか？」

「ああ、知りたいね」

アダムが 大地の袋 を振り回して押し掛かってきた。慌ててアレンはブリッジをして 大地の袋 を躲した。

「いきなりかよ！」

まだそこで攻撃は終わりではない。

アレンの腹に 大地の袋 が落とされようとしていた。

その袋がなんのかアレンは知らない。だが、ヤバイと直感して、地面を転がって避けた。

大地が鳴らした地響き。

まるで隕石が衝突したように、クレーターが地面にできた。

すでに 大地の袋 はアダムが持ち上げている。ほんの少し地面に触れただけでこれだ。

クレーターができたときの衝撃で、アレンは天高く吹っ飛ばされていた。

「洒落になんねえ。やつぱただの袋じゃねえのかよ！」

空から見るクレーターの大きさは直径三〇メートルほどだった。周りにいた兵士たちも巻き込まれている。

アレンは地面に衝突する寸前で、ふわっと身体が浮き上がり、ゆっくりと着地した。風を操ったのだ。

涼しい顔をしているアダムとは対照的に、アレンは冷や汗を垂らしている。

大地の袋 を一発でも身体に喰らえば一瞬して潰される。

接近戦は危険だった。

アレンは腕を薙いで風の刃を繰り出した。

「喰らえ！」

「それは御前だ」

一瞬にしてアダムとアレンの場所が入れ替わった。

「うわあっ！」

風の刃を受けたアレンの服と胸が切られた。

噴き出す鮮血。

切られた服の隙間から覗くならかな乳房が血で濡らされた。

アダムは今のアレンの姿を見て、息を漏らした。

「嗚呼、御前が少女だったことを忘れていた」

「女で悪いかよ！」

「性別的には女性だが、御前は永遠の少女だ。歳も取らず、何千という月日を生きてきた。実は御前の足跡について調べたのだ。近年以前となると、御前らしき人物が記録されていたのは、

一二年前の事件だった。地上最後の智慧を持つドラゴンと云われていたドウルブルザードの聖都襲撃事件だ」

「覚えてねえよ」

「そうか、では何年前のことなら覚えているのだ？」

「知るか」

「私は創られた瞬間から覚えている。膨大な記録を背負っているのは辛い。人格に膨大な記憶は邪魔なのだ。しかし、私はそのように創られた」

アダムはゆっくりと目をつぶった。

「が、それでも私は生きる意味を捜し続ける」

前半部分は声が小さすぎて聞き取れなかった。アダムはいっ



たいなんと呟いたのか？

そんな細かいことなどアレンには関係なかった。

歯車が鳴りはじめた。

肉弾戦にアレンは賭けたのだ。

自らの機動力に風の力を上乘せする。

猛スピードで殴りかかってくるアレンを前に、アダムは急に立ち眩みを起こしたように足下をふらつかせた。

「うつ……」

人間のように呻き、思わず膝から崩れそうになった。

そこにアレンの拳が叩き込まれた。

「ウオオオオオオオオオオオオッ！」

アダムの身体が吹き飛ぶ前に、目にも留まらぬ拳の連打が繰り出される。

歯車が悲鳴をあげている。

「糞つたれッ！」

最後にアレンはアダムの顎を下から抉り殴った。

一〇メートル以上の上空まで吹っ飛ばされたアダム。その手にはしつかりと 大地の袋 が握られている。

「わたしになにが起こっている？」

アレンに殴られたことなど、なかったようにアダムは呟いた。そのまま無抵抗のままアダムは地に落ちた。

止めを刺そうとしてきたアレンを視線だけでアダムは見た。

「気をつける、わたしが今持っているのは 大地の袋 という魔導具だ。重量はこの星ほどある。わたしはこれを重力を操っ

て支えることができるが、これが大地に置かれればどうなるかわかるか？」

アレンは拳を上げて止めていた。

「どうなるんだよ？」

「重さとは重力だ。星と星とがぶつかると思えばいい」

「落とすなよ絶対」

「はじめからそのつもりだ」

「汚ねえぞ、人質取ってるもんじゃねえか！」

「しばし待て」

「はあ？」

攻撃できないアレンを目の前に、アダムはゆっくりと立ち上がった。

地中から聞こえてくる響き。なにかが来る。

瞬時にアレンは遙か後方に飛び退いた。

次の瞬間、地中から巨大な蛇のような頭が飛び出してきたのだ。

それはまるで鎧を纏ったような海蛇だった。海龍と言ったほうがいいかもしれない。想像を絶する大きさは、クーロンを上空から見なければわからなかった。

クーロンの市壁の外周をぐるりと一周する海龍。尻尾のところから地中に潜り、そこからクーロンのほぼ中心で頭を出したのだ。

「鬼械竜 レヴィアタン だ」

レヴィアタンの鼻先に乗っているアダムが言った。

「これは転送装置魔法陣でもある。予定時刻にはまだ早いが、人間の答えはもう聞くことができた。火星の同志を呼ぶことにしよう」

アダムは手に持っていた 大地の袋 を レヴィアタンの口の中に放り込んだ。

「生命の実 には遠く及ばないが、一〇分程度は火星のゲートとリンクすることができだろう。さて、どれほどの鬼械兵がこの青き星にやって来るか？」

一瞬にして辺りが蒼白い光に包まれ、目をつぶらずにはいられなかった。

鬼械兵にやられ、次々と人間が倒れていく。これ以上、戦場に鬼械兵を増やすわけにはいかなかった。レヴィアタンを止めなくては  しかし、なにができる？

「糞ッ！」

アレンは地面を蹴って高くジャンプした。さらに風の力を借りて上昇する。

「俺にできることは……こいつをぶん殴ることだ！」

拳をアダムに叩きつける。

強烈な拳をアダムは片手で受け止めた。

アレンの背後で声がした。

「退け！」

黒の剣 を振り下ろすルオだった。

瞬時にアダムとルオの場所が入れ替わった。

冷や汗を流したアレン。

「俺のこと殺す気かよ？」

「それはまたの機会だ」

黒の剣の刃はアレンの鼻先で止まっていた。

アダムに空間転送は厄介だ。下手をすれば同士打をさせられる。

地面に着地したアレンとルオがアダムと対峙する。

「俺のケンカに手え出すなよ」

「五月蠅い、朕の獲物だ」

「ふむ、黒の剣は厄介だ」

と、最後にアダム。

それを聞いてアレンが怒り出す。

「俺は戦力外かよ！」

「そういうことだ！」

叫びながらルオがアダムに斬りかかった。

「まずは千の兵」

アダムが囁いた瞬間、低空から一〇〇〇の鬼械兵が突如現れ降ってきた。ついに火星から鬼械兵が投入されはじめたのだ。

瞬時に判断したルオは空に向かって斬撃で衝撃波を放った。

空中でいくつかの鬼械兵が爆発したが、全体に対しては微々たるものだ。

アレンはレヴィアタン の頭部を指差してルオに話しかける。

「おまえの剣であれ停止させろよ、そういう機能ついてんだろ。あれ倒せば鬼械兵が降ってこなくなる！」

「簡単に言ってくれるな」

クーロンの街を囲むほどの巨体だ。人の子などゴミほどの大きさでしかない。

レヴィアタンの頭部が地中に潜った。

「おまえがとろいから逃げられたじゃねーか！」

「朕のせいにするな！」

二人が言い合っている間にも、新たな鬼械兵は地上に降り立ち、人間を虐殺しはじめている。二人の周りも例外ではない。無数の鬼械兵が群がっていた。

ルオが 黒の剣 を薙ぐ。

刹那にして破壊される鬼械兵ども。

アレンも鬼械兵と戦いたかったが一对多数はアレンに分が悪い。

鬼械兵が石触手に串刺しにされた。リリスだ。アレンの元にリリスとジェスリーがやってきた。さらにジェスリーが持っているのは、

「アレンさん受け取ってください！」

ピナカ が投げられ、アレンはキャッチした。

「サンキユ」

お礼と同時に ピナカ は放たれていた。

三つの輝く矢が鬼械兵を撃ち抜き、さらに巨大な三つ又の槍となつて薙ぎ倒す。

しかし、再び低空から一〇〇〇の鬼械兵が降ってくる。

追い詰められた状況。

リリスがごちる。

「インドラ を犠牲にしたのは失敗じゃったかのぉ」

たしかに インドラ の魔導砲があれば、地上を一掃する攻撃ができた。

だが、すぐにジェスリーがフォローする。

「しかし ベヒモス に唯一対抗できたのは インドラ です。ベヒモス をあのと看停止に追い込んでいなければ、戦況は今より酷い状況に陥っていたと思われませう」

それ市内は敵味方入り乱れている状況だ。無差別攻撃の インドラ の魔導砲は使用できなかっただろう。

「片っ端から片づけりゃいいんだろ！」

アレンは ピナカ を放った。

「朕の辞書に敗北はない」

ルオは 黒の剣 を薙いだ。

鬼械兵の数はまったく減ったように見えない。

それでもアレンとルオは戦い続ける。

サブマシンガンに取り付けられていたライトで闇を照らす。

トツシユは停電している ベヒモス 内に侵入していた。鬼械兵の姿はない。しんと静まり返っていた。

だが、警戒は怠らない。足音と気配を消しながら慎重に先へと進む。はつきり言って、今の装備では鬼械兵とのタイマンは避けたかった。

サブマシンガン、バズーカ、レッドドラゴン。一撃で鬼

械兵とやれるのはバズーカだが、一体に対して一発など戦闘には向かない。なおかつ、ここは屋内だ。

外にいた鬼械兵は複数の兵士で取り囲み、サブマシンガンで蜂の巣にしてやっと一体倒すのがやっとだった。レッドドラゴン は鬼械兵の装甲を貫くことができたが、一発貫いてなになるのだろうか。

汗を垂らしながら歩き続けたトツシユは牢屋までやってきた。檻の中を照らすと、女が立っていた。

「アタクシのこと助けに来てくれたのかしら？」

「だれがおまえなんか」

牢屋に入れられていたのはライザだった。

「艦が停止したお陰で、檻に流されていた電磁フィールドは消えたのだけれど、鉄格子はどうすることもできなくて困っていたのよね。早く助けて頂戴」

「だからだれがおまえなんか助けるか、裏切り者」

「だったらなんでこんな場所来たのよ？」

「シスターの嬢ちゃんを助けるために決まってるだろう」

そうなのだ、トツシユたちはセレンの行方を知らないのだ。

「ああ、あの子ならアタクシが逃がしたわよ」

「はあ!? どういうことだ？」

「アタクシが本当に裏切ったと思ってるわけ？」

「俺様はなあ、一度もおまえのこと信用したことないぞ」

苦笑するライザ。

「ったく、やんなっちゃうわ。人間様に使われる機械の下僕な

んかになると思う？ このアタクシが？」

たしかにライザは他人に仕える玉じゃない。

「どうしてルオの下にはついてるんだ？」

「仕えているというより、あれアタクシの作品ね。せつかくだからだれも知らない秘密教えてあげましょうか？ それと交換でアタクシはここから出すというので手を打たない？」

「聞いてから考える」

「それじゃ取り引きにならないでしょう。アタクシのとき置きよ」

「わかった出してやる」

トツシュはバズー力を構えた。まだ撃たない。話を聞いてからだ。

愉しそうな顔をするライザ。今まで見せたことのない無邪気な顔だ。

「じつはね……ルオってアタクシの弟なのよね。あははははっ」

「マジか？」

「ほら、早く出しなさいよ」

「マジかって聞いてるんだ」

「腹違いでも何でももない、前皇帝と正妻の間に生まれた子供よ、アタクシもルオも。けれど、女に生まれると損よね。皇族の血筋にアタクシの存在はなかったことにされてるわ。一般人扱いされることはなかったけれど、下級貴族の養女として育てられたわ」



すっかり話を聞き入っているトツシユはバズーカを床に向け  
ていた。

「それからどうなった？」

「本当はアタクシ自身もなにも知らず、そのまま下級貴族の娘  
として一生を終えるはずだったのだけれど、本当の母が一度だ  
けお忍びでアタクシに会いに来たことがあるの。涙を流しながら  
何度も謝りながら、全部話してくれたわ。正直腹が立ったの  
よね、こいつもアタクシを捨てたひとりには違いないわけじゃ  
ない？」

「ひねくれてるぞ」

「仕方ないじゃない。養女になった家にはすでに養父母の本当  
の娘がいて、しかもアタクシの下に弟まで産んでくれちゃって、  
アタクシは家政婦じゃないつての。それでね、家を出るために  
血の滲む猛勉強したわ。男と同じくらい勉強できても、女のほ  
うが下に見られるから、男どもが足下に及ばないくらいの地位  
と権力を手に入れるために、本当に必死だったわ。でもまさか  
ルオの傍に仕えられるくらい出世できるなんて思ってたなかつた  
けれど」

「本当はルオに復讐とか考えてるのか？」

「さあ、どうかしらん」

おどけてライザは笑って見せた。

そして、後ろ向きに歩きながら牢屋の奥へ進んだ。

「アタクシの話はこれくらいにして、さっさと出して頂戴。早  
漏も嫌われるけれど、遅漏も嫌われるわよ」

「関係ないだろ、その話は！」

トツシユはバズーカを撃った。

鉄格子の何本かが折れ、周りの格子はひしゃげた。

ライザが牢屋の中から出てくる。

「そうだ、シスターの話もついでにしてあげましょうか？」

「そっちが本題だ。どこにいるんだ？」

話が戻された。

「彼の話だと第零メカトピア」

「どこだそれ？ その彼ってどんな奴だ？」

「ワーズワースよ」

「……奴が死んだって知ってるか？」

少し哀しげな顔をトツシユはしていた。その顔とライザは顔を合わせない。

「ええ、彼の役目はアタクシが引き継いだから問題ないわ」

「ん？」

「諜報活動とか裏工作とか、だれのお陰でナノマシウイルスや火星からの転送とか、アダムのスケジュールを狂わせてやったと思ってるの？ アタクシが細工したからに決まってるでしょう」

傲慢な声音で言ったライザにトツシユは少しうんざりした。

「ああ、それはわかったから、シスターはなんで第零メカトピアってとこにいるんだ？」

「さあ、詳しくは知らないわ。彼がセレンがそこに行けば、もしかしたらなんらかの力を借りられるかもしれないって」

「どういうことだ？」

「知らないわよ。ほらさっさと行きましよう、艦内に残っている武器とかを漁りに」

ヒールを鳴らして先を歩き出したライザが立ち止まり振り返った。

「明かりがないと先進めないでしょう、早くして」

「はいはいお姫様」

皮肉を込めて吐き捨て、舌打ちしてからトツシユはライザの後に続いた。

《 5 》

鬼械兵の軍勢を相手にしながらアレンは空を見上げた。

急に曇りだして辺りが暗くなったのかと思ったが、それは天気のせいではないようだ。

巨大な円盤が上空に浮かんでいた。

「新たな兵器かなんかか？」

ジェスリーもその円盤を見た。

「今までまったく見たことのない型の物体です。いわゆる未確認飛行物体　UFOです」

円盤型飛行物体からなにかが降下してくる。数え切れないほど多くのなにかだ。

アレンはよく目を凝らした。

「もしかして鬼械兵か？」

「いえ、違います。LB1型アンドロイドです。設計図しか存在してはいはずだったのですが不思議です」

降下しながらLB1はビームライフルで次々と鬼械兵を仕留めていく。

アダムにとつてもそれは予期せぬ出来事だった。

「わたしの目にも留まらず、いったいあんな機械人がどこにいたというのだ？」

地上に降り立ったLB1は人間を狙わず、鬼械兵のみを仕留めていく。完全に狙いははつきりしている。鬼械兵を殲滅することだ。

さらに上空から翼を持った狼に乗って少女が戦場にやって来る。

純白の法衣に身を包み、サファイア色に輝く四枚の翼を持った少女。その手には 生命の実 が取り付けられた錫しゃくじょう杖じょうを持っていた。

「もう争いは終わりにしましょう」

少女の声は不思議と戦場の片隅にまで届いた。

人間の兵たちは空を見上げ、ある者はこう呟いた。

「天使様か？」

視力のいいジェスリーにはわかった。

「セレンさんです！」

マルコシアスから降りたセレンは上空に立ち、その場で錫杖を使って魔法陣を描いた。

描かれた魔法陣はセレンの頭上から網のように広がり、クー

ロン全体を レヴィアタン ごとドーム状に包み込んだ。いっ  
たいなにをしようというのか？

アダムは一瞬にしてマルコシアスと場所を入れ替えようとし  
た。

「なぜだ……？」

しかし、できなかつたのだ。なにも起こらず、アダムはその  
場から一ミリも動いていない。

もうひとつのことにアダムは気づいた。

「新たな兵が来ない」

火星からの援軍が止まった。

すぐにアダムは理解した。

「これはあのときと同質のものか」

それは ベヒモス での出来事だ。ワーズワースがセレンた  
ちを逃がすため、アダムを閉じ込めた方法。

「しかし、計画が遅れるだけに過ぎない。戦力ではまだ鬼械兵  
団が優っている」

立っている人間は少なかった。

すでにクローン周辺を取り囲んでいた軍勢は レヴィアタ  
ン によって一掃されていた。たとえ市内の戦況が変化して人  
間が勝利しようと、レヴィアタン 一機で逆転されてしま  
うのだ。

そして、またアダムは計画を一からやり直せばいい。時間な  
ら飽きるほどある。

アダムは空を見上げた。

「生命の実 だけは必要不可欠だ」

宙に浮いたアダムは高速で飛びセレンに近づいた。

いち早くマルコシアスが接近してくるアダムに気づいた。

「貴様がアダムだなッ、レヴェナ様を愚弄する行い許さんぞッ！」

翼から幾本もの炎の矢を放つ。

「犬がッ！」

炎の矢はアダムが手を振り払っただけで消えてしまった。お返しに衝撃波を手から放ち、マルコシアスを遙か彼方へ吹き飛ばした。

上空で静止したアダムとセレンが見つめ合った。

「生命の実 を渡してもらおう」

「いやです。今すぐ鬼械兵団を止めてください」

「生命の実 を渡し、人間が戦うことをやめれば止まる」

「あなた方が戦うことをやめてください」

「ならば力尽くだ」

手を伸ばしながらアダムが迫ってくる。

突き出された錫杖から見えない障壁が放たれた。

それに衝突したアダムが弾き飛ばされ、地面に向かって真っ逆さまに落ちていく。

地上ではアレンが待ち構えていた。

けたたましく鳴る歯車。

「喰らえッ！！」

加速して落下してきたアダムを打ち上げるように殴り飛ばし

た。

高く舞い上がったアダムは宙でピタツと静止した。

「無駄な攻撃だ」

アダムは手にエネルギーを集め、光球にしてアレンに投げつけた。小さい魔導砲のようなものだ。魔導弾 魔弾だ。

ピナカ で相殺を試みようとしたアレンの目の前にルオの背中が飛び込んできた。

ルオは 黒の剣 の柄を握り締め、切っ先をアダムに向けながら矢のように宙を飛んだ。

「串刺しになるといい！」

魔弾を呑み込んだ 黒の剣 はそのままアダムを突かんとする。

紙一重でアダムは刃を躲し、指を組んだ手でルオの背中を殴り飛ばした。

背骨を折られながらルオは地面に叩きつけられた。

殺気を感じて振り返るアダム。頭上から降り注ぐ炎の矢。気づいたときには遅かった。

アダムの身体が炎に包まれ落下する。

「まさか犬にしてやられるとは！」

火の粉を散らしながらアダムは地面に叩きつけられ、一度バウンドしてうつ伏せに倒れた。

すぐにアダムは湯気を立てながら起き上がった。

「いくら攻撃を加えようとわたしは倒せない」

服が燃えたアダムは裸体だった。美しい曲線を描く女の肢体。

頭部と右肩から手の先までを除いて、メタリックな色をしている。気づいた者がいるだろうか。左手の先から徐々に肌の色を取り戻している。

「やって見なきゃわかんねえだろ！」

アレンがアダムを殴り飛ばした。

上半身のバランスは崩したが、アダムの下半身はまったくその場から動かない。

ゆっくりと上体を戻してアダムはアレンを睨んだ。

「おまえの相手はあとでしてやろう」

アダムの狙いは 生命の実 だ。

再びアダムは空を飛び、再びマルコシアスが立ちほだかる。

だが、今度の足止めはアレンだった。

アダムの足首を片手で掴むアレンの姿。

「行かせるかっつーの！」

「しつこいぞ」

アダムがアレンの顔面を踏ん蹴った。

「ぐっ」

思わず手を離してしまったアレン。だが、地上には落ちない。風を操って空を飛んだのだ。

セレンはずっと錫杖で魔法陣を描き続けていた。

「できた！」

輝いて発動する魔法陣。

大地が大きく蠢いた。

焼け残っていた金属の柱が空へ上昇していく。それに続いて



次々と金属が空へ昇って行くではないか。例外なく鬼械兵やLB1もだ。

上昇率は重さを比例していた。重たければ重たい金属であるほど、高く天へと昇っていくのだ。

これによって地上から鬼械兵が消えた。今の今まで戦闘を繰り広げていた人間の兵士たちが安堵する。問題は戦車まで上昇してしまったことだ。

新たな混乱を生むことになったが、戦乱は治まることになった。

しかし、まだ戦いが終わつたわけではない。

もとより空を移動できる者は、魔法陣の束縛から逃れることができるのだ。

アレンとアダムは腕を交差しながら互いに殴り合っていた。リーチが長かったのはアダムだ。吹き飛ばされるアレン。

それを尻目にアダムはセレンから 生命の実 を奪おうと躍起だ。

「邪魔だッ！」

声を張り上げたアダムは全身からホーミングミサイルのような光を放った。アダムに迫っていたルオとマルコシアスがその直撃を受けた。

いつの間にかアダムの身体が肌の色を拡大させていた。両手足は完全に肌の色を取り戻している。胴体は肌色とメタリックがまだらになっていた。

「なぜわたしの邪魔をするのだ！」

鬼気を纏ったアダムは一気にセレンの眼前まで迫った。  
錫杖の障壁が間に合わない。

ついにアダムの手が錫杖の柄を掴んだ。

「渡せ！」

「渡しません！」

「おのれえ！」

アダムが伸ばした片手がセレンの首を絞めた。

「渡さないと窒息するぞ！」

「……ううっ……ぐ……」

「死にたいのか！」

「お……お母さん……」

錫杖から手が離れた　アダムの。

下からはアレンが猛スピードで迫っていた。

「もう容赦しねえぞおおッ！」

歯車は咆哮をあげた。

その気配を感じたアダムは振り返り、なにを思ったのか両手を広げて凜した表情をした。

アレンの拳がアダムの腹を抉る。

突き破られた肉がメタリックの液体を飛び散らせた。

瞳を見開いて息を呑むセレン。

アダムの腹を腕が貫通していた。

なぜかアレンは悲しい顔、アダムは聖母のような微笑みを浮かべた。

そして、アダムはこう言ったのだ。

「あなたに辛い役回りをさせてしまつて……ごめんなさい」

アダムは自らアレンの腕を腹から引き抜いた。

落ちていくアダム。

地上までの途中でルオが 黒の剣 を構えていた。

「朕が止めを刺してくれる！」

「やめてーッ！」

悲痛なセレンの叫びが木霊した。

ルオとアダムの眼が合った瞬間、アダムが邪悪な笑みを浮かべたのだ。

なんと、アダムの口からメタリックの液体が吐き出され、意思を持っているかのようにルオの口から体内に流れ込んだのだ。

「うぐっ……うっ……」

眼を剥いたルオは顔を下に向けて吐き出そうとした。だが、その身体の中から手足の先端に向かってメタリックに染まっ  
ていく。

髪を振り乱しルオが顔をあげた。

「ふふふふっ、何と言う力溢れる躰なのだ！」

それがルオではないと、周りにいた者は瞬時に理解できた。

ルオではないのなら。

レヴェナを抱きかかえていたリリスが叫ぶ。

「アダムに寄生させておるぞ！」

魔獣と化した煌帝ルオの肉体を手に入れたアダム。その手には 黒の剣 が禍々しい鬼気を放っている。

「此こそ始皇帝に相応しい！」

紅い瞳でアダムは自分の領土を見渡すように世界を眺めた。  
そして、黒の剣 を掲げた。

地獄の底から唸り声が聞こえてくるような風の音。

宙に浮いていたものたちが地上にゆっくりと落ちていく。

生命の実 の支配力を 黒の剣 が少しずつ呑み込みはじ  
めているのだ。

アダムは大地に 黒の剣 を突き立てた。

「黒の剣 の真価を見せてやるっ！」

大地が枯れていく。

突き刺さった 黒の剣 を中心に、円を描いて大地が枯れて  
いくのだ。

それだけではない。もっとも近くで瀕死だった人間の兵士が、  
息を引き取り、髪が白くなりはじめている。さらに機械兵が風  
化していくではないか。

リリスが叫ぶ。

「引け、全力でこの場を離れるのじゃ！」

敵も味方も関係ない。黒の剣 が喰らっているのだ。

セレンは全速力で降下した。

「今すぐやめてください！」

アダムに向かって錫杖を叩きつけるように振った。

瞬時に 黒の剣 が抜かれ、刃で錫杖を受け止めた。いや、  
逆に錫杖が刃を受け止めたというべきか。生命の実 のエネ  
ルギーに守られた錫杖は、黒の剣 の刃に断ち切られること  
がなかったのだ。

近くで死んでいる兵士の風化が止まった。

黒の剣と生命の実が均衡した状態。

クーロンを覆っていたドーム状の結界も消失していた。再び火星から鬼械兵が来てしまうのか。いや、来なかった。時間が過ぎたからではない。

拡声器から響く男の声。

《聞こえるか、トツシュだ！》

どこから話をしているのだろうか？

《馬鹿でかいヘビの戦艦のコックピットは乗っ取った》

《蛇ではなくて龍よ。戦艦の名前はレヴィアタン》

横にいるらしくライザの声もスピーカーは拾った。

《コックピットは制圧したんだが、ドアの向こうに鬼械兵がうじゃうじゃいるんだ。応援頼む！》

トツシュが叫んだ。

コックピットだけを制圧して、立てこもってる状態なのだ。

リリスはジェスリーに顔を向けた。

「レヴィアタンと通信可能かい？」

「直接ではなく、周辺全域にでしたら通信電波を飛ばせますか？」

「それでいい」

「少々お待ちを　どうぞ、お話してください」

通信電波にリリスの声が乗る。

《トツシュの坊や聞こえるかい、聞こえたら返事をおし》

それを三回繰り返し、再び『トツ』と言ったところで返事が

あった。

《リリース殿か？》

《そうじゃ、妾じゃ。アダムがルオの坊やに取り憑いた》

《なんですって!？》

横からライザが口を挟んできた。

ライザには構わずリリースは話し続ける。

《黒の剣 が無差別にすべてのエネルギーを吸いはじめる危険性もある。ただちに全軍の退却を命じるのじゃ》

《おい、なにする気だ!》

《なにつて、こうするのよっ!》

《やめろ!》

会話の途中でなにやら向う側でアクシデントが起きたようだ。クーロン外周付近の大地から飛び出した巨大な龍の首。レヴィアタン は市壁を軽々とまたぐように越え、その長く巨大な身体で市内に侵入した。狙いはアダムだ!

開かれた レヴィアタンの巨大な口の中が輝きはじめる。

リリースが叫ぶ。

「アダムから離れるのじゃ!」

気づいてセレンは急上昇した。

アレンは猛スピードでリリースとジェスリーを抱きかかえてその場から離れた。

魔導砲発射!

アダムは 黒の剣 を構えてニヤリと笑った。

「餌が来たぞ我が魔性の剣よ」

爆風で屍体や瓦礫が舞い上がる。

大地が削れ、迫り来る魔導砲をアダムは受けて立った。

目も眩むような輝き。

正面から見た魔導砲は計り知れない大きさだ。

その巨大な光に向かつて 黒の剣 が振り下ろされた！

地獄の風が唸るような音を立てて光が闇に呑み込まれる。

竜巻のように渦巻きながら、その渦の先が 黒の剣 に瞬く間に吸いこまれていくのだ。

アダムの紅いマントが狂風に靡く。

「ふふふっ……ははははっ、力を感じるぞ。剣に流れ込んで来るエネルギーを私の肉体にも伝わって来るぞ！」

歓喜を越えた狂気の形相でアダムの笑い声が響き渡った。

レヴィアタン が吼えた。

なんと レヴィアタン がアダムに体当たりをしようと突進してくる。

微かに漏れ聞こえてくる声。

《ザザザ……もうやめろ……ザザザ……》

《うるさいわよ……ザザ……》

もう止められなかった。

レヴィアタン の籠を模した巨大な頭部はアダムの眼前まで迫っていた。

禍々しい 黒の剣 が振り下ろされた。

まさか、この巨大な レヴィアタン をも斬れるというのか  
!?

嗚呼、真っ二つに裂かれていく。

勢いのついた レヴィアタン の胴体が、真ん中から綺麗に二つに裂かれ、そのまま地面で何度もバウンドしながら、先にあつた市壁をぶち破り、頭部で大地を滑り削り、やがて尾の先まで割られて止まった。

大惨事だった。

クーロン市内に残っていた兵士たちも多く巻き込まれた。

残骸となった レヴィアタンに 潰された者もいた。

ライザの形振り構わない暴挙は多くの犠牲者を出した。

にも関わらず、紅き瞳の始皇帝は 黒の剣 を構えたまま、その場を一步たりとも動かさず凜と立っていた。

「もはや 生命の実 は要らぬ。此の 黒の剣 に力を蓄え、我が悲願を達成するのだ！」

天高く 黒の剣 が掲げられた。

《 6 》

今度は大地だけではなかった。

どこからか舞ってきた花びらが一瞬にして枯れた。

近づくことはできない。

黒の剣 に近づけば喰われてしまう。

屍体が干からびて一気に骨になり、さらに砂となって舞い散る。

まるで早送りの映像を見ているようだ。



世界が砂と化していく。

「アダムは空を見上げた。その視線の先にいるのはセレンだ。いや、セレンを見ているのではない。生命の実 を見ているのだ。」

「もはや 黒の剣 に対抗できるのは 生命の実 を備えた錫杖しかない。」

セレンの背中で四枚のサファイア色の翼が美しく輝いた。

「やめてくださいというのがわからないんですか！」

降下した勢いのまま錫杖がアダムに振るわれた。

「黒の剣 が薙がれ、錫杖ごとセレンの躰を大きく後方に飛ばした。」

「人間が武器を捨て降伏しない限り戦いは終わらない。まずは御前が 生命の実 を捨てるのだ」

「できません。わたしがこれを捨てても、あなたが武器を捨てないからです。それでは戦いは終わりません」

「なら私を倒すか？ 何故、私を倒そうとするのだ？ 武力を持つて武力を制するのが御前のやり方か？ 私と同じ方法を採用御前に私の事をとやかく言う資格があるのか？ 御前の望みは何だ？」

「まくし立てるようにいくつもの問いを投げかけた。」

「セレンは押し黙ってしまった。」

「シスター・セレンの望みは平和だ。戦いなどしたくない。見たくもない。けれど、それを終わらせるための手段 その葛藤。錫杖を握る手は常に震えていた。」

アダムはセレンを見透かしていた。

「平和の為に戦うと言うのは矛盾していると思わないか？ 平和主義を謳うのならば、武器を持った者が目の前に現れても、丸腰で無抵抗に殺されるべきではないか？ 例え、家族や愛する者が殺されようと、其れをただ見ている事が平和なのだろうか？」

どこか言葉に違和感がある。

もしかしたら、アダムも揺れているのでないだろうか 矛盾の中で。

「私は悪か？ 御前は善か？ それとも逆か？ 此の世は勧善懲悪か？ 私は反逆者なのだろうか？ 神とは何だ？ ルールは誰が決めるのだ？」

アダムは枯れた世界を見渡した。

「此が私の望む世界なのか……クククク……そうだ、我が望みは破壊と混沌！」

邪悪に笑ったアダムはセレンに斬りかかった。

もともとセレンは戦闘などできない。

もつれた足を地面に引っかけセレンは尻餅をついてしまった。その状態でなんとか錫杖の柄を突き出して 黒の剣 を受け止めた。

「く……く……っ！」

必死に歯を食いしばるセレンだが、じわじわを押されている。錫杖の柄を 黒の剣 の刃が眼と鼻の先まで迫っている。

なんとということだセレンの髪の毛の色が薄くなっていく。

黒の剣 が 生命の実 を優るといふのか!?

突然、頭を振り乱してアダムが後退った。

「くおおおおっ……違うつ……私の望みは……」

腕が大きく振り払われ 黒の剣 が放った衝撃波が大地を抉

つて吹き飛ばした。

「きゃっ！」

錫杖でガードしながらセレンも上空に吹き飛ばされた。

アダムは 黒の剣 を大地に突き立て片膝をついた。

「己えッ…… 黒の剣 の仕業か……此奴も生きている……歴代の主の欲望や呪いまで吸い取っていた云うのか……其れが私の意識まで支配しよう……」

武器が使用者の精神まで支配するというのか？

禍々しく 黒の剣 が唸っている。

創られたそのときから、黒の剣 はこのように唸っていたのか？

血塗られた大剣。呪われた大剣。シユラ帝國の象徴である大剣。

帝國に伝わる以前は、どのような持ち主が使っていたのだろうか？

元を辿り最後に行き着くのは生みの親であるレヴェナだ。

しかし、これがレヴァナの意図する 黒の剣 の姿だったのだろうか？

黒の剣 はいつ道を誤った？

アダムは 黒の剣 を握り直して大きく薙いだ。

「ククククツ……我は此の青き星の支配者となるのだ。霸王の剣に相応しいではないか！」

切っ先がセレンに向けられた。

「血が足りぬ」

邪悪に染まったアダムがセレンに突撃する。

セレンは上空に吹き飛ばされたあと、そのまま地面に落ちてしまい、今立ち上がるうとしている最中だった。

迫る刃の切っ先に気づいてセレンが眼を丸くする。防ぐことも、躲すこともできない。

切っ先はセレンの法衣を貫き 肌の前で止まっていた。

アダムは自分の足下を睨んだ。

「何者だ！」

地中から飛び出ている手で自分の足首を掴んでいる。アダムはその足を大きくほぼ真上に蹴り上げた。

砂を舞い上げながら埋もれていた人影が飛び出し、そのまま天高く飛ばされた。

「出してくれたお礼は言わないからな！」

アレンだった。

放たれる ピナカ の輝く三本の矢。

「やはり先に片付けなくてはならないのは御前のようだ！」

矢は瞬く間に 黒の剣 に吸収され、斬撃の衝撃波がアレンを襲った。

「ぐわっ！」

衝撃を躲しきれず胸に喰らったアレンが吹き飛んで地面に落

ちた。

仰向けになったアレンの胸から火花が散る。機械の半身である片方の胸の装甲が、爪で抉られたように穴が空いている。それでもアレンは齒を食いしばって立ち上がった。

「まだまだ！」

歯車はまだ鳴り続けている。

仁王立ちをするアレンにアダムは斬りかかった。

「何故立ち上がるのだッ！」

「負けたくないからに決まってるんだろ！」

振り下ろされた黒の剣を躲し、アレンはアダムの懐に入ると、渾身の拳を腹にお見舞いした。

腹に喰らいながらもアダムは体勢を崩さなかった。そのまま黒の剣を薙いでアレンの胸を真つ二つにしようとした。

アレンの足の裏を擦るか擦らないかの距離を刃が通り抜けた。飛び上がって黒の剣を避けたのだ。そのままアレンはアダムの顔を蹴り上げた。

顎を上に向けながらアダムが後方に飛ばされ、背中から倒れそうになったが、片足を引いて踏みとどまり、その足を蹴り上げて跳躍し、アレンの脳天に斬りかかった。

機械の手を突き出したアレン。

これまで何度も黒の剣には苦い思いをさせられた。はじめてルオと闘ったときには、機械の腕を切り落とされ生死の境を彷徨った。今まではアレンの装甲では、その刃を防ぐことはできなかった。

が、アレンの手のひらは 黒の剣 を受け止めていた。

口と眼を大きく開いて驚愕するアダム。

「何故斬れぬ？ いや……何故、黒の剣 に喰われ朽ち果てぬのだ？」

もはやこの周辺は死の大地と化していた。

人間も機械人も物も、朽ち果て砂に還って逝った。無事なのは 生命の実 に守られたセレンだけのはずだった。

裂かれた胸の装甲の奥底で燦然と輝き出す歯車。それは歯車の形をしていたが、アダムにはわかった。

「まさか 生命の実 だとッ！」

その輝き、その溢れ出す生命の息吹、まさしく 生命の実 ！

黒の剣 から闇が霧のように溢れ出す。

地獄からの悲鳴。

アレンがセレンに目を向ける。

「ぼさつとしてないで手伝えよ！」

「は、はい！」

駆けつけたセレンが錫杖の柄で 黒の剣 の刃を押し戻そうとする。

噴き出した闇は七つの首を持つ竜のように不気味に蠢き暴れ狂う。

狂気を孕んだアダムの紅い瞳。

「此の星ごと御前ら喰らい尽してくれるわ！」  
大地が揺れる。

アレンは足を踏みしめ歯を食いしばった。

「くっ……」

暴風が三人を包む。

激しく揺れる髪。

ズシンツと大地が沈んで三人を中心としてクレーターができた。

小さな稲妻のようなエネルギーが、火花を散らしながら発生した。

微かに聞こえはじめたヒビの入る音。

アレンの手に食い込む刃。セレンが握る錫杖の柄にも亀裂が入っていた。

狂気の形相でアダムは笑いはじめた。

「ハハハハッ……滅びろ、滅びてしまえ、クハハハハ……ハ……？」

急にアダムの顔つきが変わった。疑問を浮かべたのだ。

大地から芽が出て、双葉に分かれた。

生えてきたのは一つではなく、次々と大地から若葉が芽を出しはじめた。

大地が緑に染まっていく。

「何事……だ」

アダムは驚きを隠せない。

予期せぬ出来事が起きたのだ。

色とりどりの花が咲いた。

稲穂が風に揺れた。

大きく育った木から真つ赤な林檎が地面に落ちた。  
豊穡の香りが世界を包み込む。

またヒビの入る音。

黒の剣の刃に稲妻のようなヒビが奔った。

憎たらしい糞餓鬼の笑みを浮かべたアレン。

次の瞬間、黒の剣が折れた。

「喰らえッ！」

叫んだアレンから繰り出される拳。

それは生身の拳だった。

顔面を殴られたアダムが片足を引いてよろめく。

「……何故だ……何故だ……アレンよ、御前は機械なのか、それとも人間なのか、どちらなのだ？」

「俺は人間に決まってるんだろ！」

止めと言わんばかりの生身の拳がアダムの頬を抉るように殴った。

吹っ飛ばされたアダムが何度何度も地面を転がる。

地面に這いつくばり立ち上がりうとするアダムの手には、も

う 黒の剣は握られていない。

力を失ったアダムはやつとの思いで立ち上がったが、背中を丸めて大きく咳き込んだ。

「ゲボツ……ブグツ……ウエエエ……」

アダムの口からメタリックの液体が吐き出される。

芝生の上で蠢くその液体はアダム。

気を失ったルオはゆっくりと倒れた。



液体金属の本体となったアダムは、スライムのようにドロドロと動き、まるで手のようなものを苦しそうに伸ばした。

「オオオツ……ウオオオオ……終ワリダ……何モカモ……メギドノ……炎デ御前達モ道連レニ……」

セレンから錫杖を奪ったアレンは、それでアダムを叩きつづした。

「私ハ……何者……ダツタノ……ダ……」

飛び散った液体が光に包まれて消える。

跡形もなくアダムは消滅した。

錫杖を投げ捨て倒れるように座り込んだアレン。

「あゝ、腹減った」

涙目でセレンは肩を撫で下ろした。

「終わったんですね」

目を指先で拭いながらセレンは空を眺めた。

背筋が凍った。

セレンの顔が見る見る恐怖に染まっていく。

「そんな……な……」

巨大な紅い炎の塊が流星のように降ってくる

メギドの

炎だ。

アレンは大の字になって寝転んだ。

「まあ、知くらねっ」

「アレンさん！」

「死ぬ前に旨いもんたらふく喰いてえなあ」

「……いいです、わたしひとりです……」

錫杖を拾い上げ、サファイアの翼を輝かせたセレンは飛び立とうとした。

その手首が掴まれ引き止められた。

セレンはアレんかと思つて振り向いたが、そこにいたのはルオだった。

「あれを食い止められるのは朕だけだ」

ルオの手には折れた黒の剣が握り締められていた。

闇色の黒の剣が音すらも吸いこむように静かだった。

セレンは立ち尽くした。

そして、ルオは黒の剣に乗って、遙か空へと飛び立ったのだ。

アレんは空を見つめていた。

緑が風に揺れる。

世界は静かだった。

それはほんの少しの間だった。世界全体が静止してしまったような感覚。

静寂。

アレんは瞳をつぶった。

そして、再び瞳を開けたとき、世界は動きはじめた。

それから数ヶ月の月日が流れた。

大地に鎮座している超巨大円盤形飛空艇の前で、セレンがマルコシアスを涙目で見つめていた。

「あの、本当に行っちゃうんですか？」

「この星で我々が暮らしていくのは難しい。すべての機械人を連れて月に行きます」

「また逢えますよね？」

「いつか人間と機械人が暮らせる日が来れば還ってきます」

「わたしが生きてる間には難しそうですね、ぐすん」

涙を拭うセレンを見てマルコシアスは笑った。

「あはは。ライザ博士が衛星を直してくれたので、いつでも顔を見て通信することは可能ですよ。では、そろそろ時間なので、さようならセレン様」

「あのつ、またお母さんの話聞かせてください！」

まるで手を振るようにマルコシアスは翼を動かし、あつという間に飛空艇まで飛んで行ってしまった。

やがて月に向かって飛空艇は飛び立っていった。

セレンは見えなくなるはずとずっと手を振り続けた。

丘の上は風が強かった。

「つたく、煙草に火が点かねえ」

トツシユは口の煙草をポケットの押し込んでから、辺りを見回した。

杖を突いた少年が見えた。

「おーい！」

トツシユが手を振って叫んだのに少年は気づいて、岩場を飛び越えてやって来た。

「なんだ用か？」

片言なのか、ぶつきらぼうなのか、そんな口ぶりだった。

「この辺に墓があるはずなんだか、見たことないか？」

「んっ」

少年は杖の先でその方向を示した。

「ありがとな坊主」

トツシユは少年に礼を言つて駆け出した。

それは粗末な墓だった。大きな石の土台に、それよりも一回り小さな石が積み上げられている。花が供えられていなければ、それが墓石だとわからなかつたかもしれない。

花を供えた者は墓の傍に立っていた。トツシユもよく知っている者だ。

「久しぶりだなジェスリー」

「こんなところで会うなんて、奇跡の確率です」

供えられている花を見たトツシユは、さっきの煙草を一本、花の横に置いた。

すぐにジェスリーが突つ込む。

「ジャン博士は煙草をお吸いになりません」

「死んでるんだから関係ないだろう」

「……ありがとうございます」

「ん？ ああ、礼を言われることじゃない。ちょっと近くを寄つたからついでだ」

この辺りはなにもない土地だ。

「少しお話してもよろしいでしょうか？」

と、ジェスリーが切り出した。

「どんな話だ？」

「歴史から消えてしまわないように、わたくし以外の方にも知っていてもらいたいのです。ジャン博士はある使命を帯びて、コールドスリープ装置である赤子と共に眠りに就いていました。その赤子は病気で、当時の医療技術では治すの困難でした。ですから治療薬が開発されるまで、眠りに就くことにしたのですが、いろいろな事情がありまして、ずっと目覚めることなくこの時代まで忘れられてしまいました。それが一六年ほど前、古代遺跡を荒らしに来た盗賊によってコールドスリープ装置が発見され、ジャン博士と赤子は目覚めました。目覚めたのはいいのですが、この時代はすでに魔導と科学力が衰退しており、赤子の病気を治す治療薬も存在していませんでした。けれど、運がよかったことに、この時代の人間はその病気の抗体を持っていました。そして、赤子の病気を治すことができました。」

「よかつたじゃないか。それでめでたしめでたしか？」

「いいえ、そのあとジャン博士の住んでいた村が戦乱に巻き込まれ、赤子が行方不明になってしまったのです。それからジャン博士は世界中を旅して赤子を捜しました。しかし、何年経つても見つからなかったのです。」

「そこで話は終わりじゃないだろうな？」

ジェスリーはポケットから十字架のペンダントを取り出した。「つい先日アレンさんから預かったものです。もともとこれはジャン博士が恋人に贈った物なのですが、今はセレン様の物なので、トツシユさんから返していただけないでしょうか？」

「まさか……その赤子って……」

新生シユラ帝國の玉座へと続く真つ赤な絨毯。

その道を飾るのは国中から集められた美男子たちだった。

四つん這いにさせた青年を足置きにして、玉座に座っていたのはこの帝國初の女帝だった。

「退屈だわ」

ライザは溜め息をついて、思い立ったように立ち上がるといきなり走り出した。

「またライザ様がお逃げになったぞ！」

近衛兵たちの大声が城内に響き渡った。

かつてその国は世界から畏れられる軍事国家だった。

しかし、今は一〇〇年未来をいくと云われる魔導科学国家の歩んでいた。

“ライオンヘア”と呼ばれていたのも昔のこと、今は“白衣の女帝”と云われている。

城内に悲鳴があがる。

「大変だ、ライザ様の撃った光線銃を喰らった兵士が猫になっちゃまったぞ！」

「ぎゃーっ、こつちの兵士は豚だぞ！」

この国は今日も平和だった。

花畑の真ん中にある柩にもたれかかり、地面に脚を伸ばして座っている妖女。

それは硝子の柩に似ていたが、中は培養液で満たされていた。中で静かに眠っているのは。

「ねえお姉様、明日はどこに出掛けましょうか？」

風が吹いて花が香り立った。

「うふふ、お姉様ったら研究所にこもってばかりで……これは神様が与えてくれた休日かしら」

妖女がゆっくり立ち上がると、その姿は老婆へと変貌した。

「わしばかりが歳を取ってしまつて、目覚めたお姉様はわしのことがわかるかの？」

声まで年老いてしゃがれている。

「そうじゃ、いっしょに海に行こうと約束して、一度も行ったことがなかったの。明日は海にでも行くか」

不思議そうな顔を老婆はした。その鼻をくすぐった風の匂い。「潮？」

海など近くにないのに、どこから香つて来たのだろうか？

太陽が燦然と降り注ぐ煌めく海の上に少年はいた。

少年は海風に吹かれながら、竹材で作ったいかだに揺られ、どこ行く当てもなく漂流していた。

海賊帽子に片眼には黒い眼帯。いかだの帆にはらくがきみたいな髑髏マークが描かれていた。

深く被った帽子から覗く片眼は、遙か彼方を見つめているように、なにも見つめていないような眼差し。

少年はあの先になにを見る？





「あ、てめえなんでこんなところにいんだよ、海賊やってんの？」

「海賊船ではなく商船だ」

ルオは溜め息をついた。その横から新たな人影が顔を出した。十六、七くらいの娘、ラーレだった。

「そちらの女性はルオの知り合いですか？」

驚いたルオと少年　ではなく少女アレン。

「俺のこと女だつてわかんのか？」

「君、女だったのかい？」

疑いの眼差しでルオはアレンを細い眼で見た。

「悪かつたな女で」

「乗れ」

ルオはロープを下ろした。

「おお、サンキュ！」

アレンは軽く礼を言つてロープを登った。

甲板のへりに来ると、ルオが手を伸ばしたので、それにアレンはつかまつた。が、お互いの手と手が握り合った瞬間、ルオは心の底から嫌そうな顔をしたのだ。

「やっぱり気持ち悪い」

そう呟いて手を離れた。

水飛沫を立てて海に落ちたアレン。

「うわあ、俺泳げねえんだよ、この野郎落としゃがつて！」

「朕も泳げぬ」

慌ててラーレが海面を指差した。

「鮫です！」

「飯だと！」

アレンは叫んだ。

サメに向かつて泳ぎ出すアレン。

呆れたようにルオは眩く。

「泳げるじゃないか」

巨大な口を開けた巨大サメはアレンをひと呑みにしようとす  
る。

どこかで歯車の鳴る音がした。

「飯いゝゝゝっ！」

サメを放り投げながら自分自身も飛んでいた。

船の甲板に打ち上げられたサメとアレン。

全身をびしょびしょにしながら、大の字で空を眺めるアレン  
の視線が霞む。

「……腹……減った」

そして、アレンの意識は白い中に落ちていった。

穏やかな寝息を立てるアレンの表情は、まるでたくさんの料  
理を目の前にしているように、ニヤニヤと笑っていたのだった。